
銀の薬師

綾月魁夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の薬師

【Nコード】

N7033G

【作者名】

綾月魁夜

【あらすじ】

今は滅びてしまった銀の薬師最後の一人、紗綾^{さあや}。彼女は、好きなばあや・夕凧^{ゆうなぎ}と人語を理解する狼・琳^{りん}と一緒にひっそりと森の中で暮らしていた。そこへ、王宮からの使いというものが現れる。銀の一族が滅びた本当の理由と、神の関係とは。神は万能ではない。そんなお話です。

来訪者

1 来訪者

深い深い森の中。人里からまるで隠れるようにその屋敷はあった。石造りの屋敷は絢爛豪華からはかけ離れている。しかし、そこに住む三人の住人にとっては居心地のよい最高の空間であった。

森の一部をぽっかりと切り取ったような庭には、色とりどりの花が植えられた花壇。さらさらと音を立ててあふれる、澄み切った泉。樹齢何百年という巨木の下でまどろむのは、美しい少女と立派な狼だった。美しい、と言口にしてしまえば、なんとも陳腐なものに聞こえてしまう。その流れる滝のような銀系の髪、月光を透かしたような白い肌。あどけない寝顔に浮かぶのは、穏やかな微笑。何か夢を見ているのか、小さな唇から声とも寝息つかぬものが零れ落ちた。

「ひいさま、ひいさま」

遠くで声が聞こえる。しかし少女は目を覚まさず、代わりに狼がのそりと首を持ち上げた。

「夕風。沙綾はまだ眠っている」

不思議なことに、狼の口から発せられた言葉は明確な人語であった。しかも、沙綾と呼ばれた少女を起こさぬよう小さな声であったにもかかわらず、屋敷の奥にいる女には十分届いたらしい。一度女の声が途切れ、ついで歩み寄る足音が聞こえた。そして一瞬の間の後、苦笑交じりの声がささやいた。

「琳さま、お辛くはありませんか？」

狼に敬意を払う女も珍しいが、それを当たり前に受け取る狼も珍しい。琳は人間でいったなら困ったように笑って言った。

「辛くないといえば嘘になるが……沙綾を起こすのは忍びない」

自分の背中に体を預けて眠る少女を見る瞳は、優しい。大切に慈

しむべき存在を見守るようだ。

「よくお眠りですね。ですが……そろそろ日も翳ります」

空を見上げれば、南にあった太陽はじりじりと西に移動している。それに伴って、まだ春先の空気は次第に冷えていく。

「それもそうか。……沙綾、沙綾」

「……りん……？」

狼にゆすられた衝撃に、沙綾はゆっくりと体を起こした。小さなあくびを一つ漏らし、大きく伸びをする。

「おはようございます、ひいさま」

「あら……夕凧もきていたの？」

少女は狼から女に目を移すが、その瞳はぼんやりと焦点を結ばない。それでも、夕凧のいる方を違わず見つめるのは長年の習慣ゆえか。

「いつまでたつてもお庭から戻りませんもので」

わざとらしいまでに敵しい声を作って告げれば、沙綾がごめんなさい、と首をすくめる。もちろん、二人とも本気ではないとわかっている。

「さあさ、お茶の準備をしますからお部屋にお戻りくださいませ」
琳と沙綾に向かって一礼すると、夕凧はゆっくりと屋敷に戻る。その背を見送ってから琳が先に立ち上がり、沙綾も軽く伸びをして立ち上がった。

「どれくらい寝ていたのかしら」

「そうだな……もうそろそろ日が傾くころだ」

「どろりで冷えるわけだね。琳にくっついていたら、全然気づかなかったけれど」

狼の毛皮は、昼間の光をたっぷり吸って暖かった。それゆえ、沙綾もゆっくりと眠ることができたのである。もう一度沙綾はかがむと、その体をぎゅうつと抱きしめる。苦しさに軽く琳がもがき、沙綾は笑って狼を開放した。

二人並んでゆっくり歩き、時折琳が方向を示唆するように一歩前

に出る。その体にぴったりと足をつけ、慣れた道をためらいもなく少女は歩いた。

「琳、花の香りが強くなっているけど、もしかして満開になった？」

「ああ、綺麗に咲いているぞ」

花壇の前で立ち止まった沙綾の前で、琳も鼻を突き出すように覗き込む。その眼前には、アネモネやマーガレット、スミレなど色とりどりの花が咲き乱れていた。

「せっかくだから、ばあやに摘んでいこうかしら」

指先で花びらをたどるように触れ、花の形を判断する。彼女の瞳は光を失って久しく、色の判断をするのは琳の役目だ。

「その奥に紫、手前に赤」

琳の言葉通りに花を手繰り、一輪ずつ丁寧に手折る。まるで見えているようだ。琳は感じるが、現実には沙綾の瞳に花の色は写らない。その理由を知っているがゆえにわずかに悲しみが胸に宿る。それでも、少女が笑っていることで琳は哀しみを隠すことができた。

やがて、沙綾の細い腕で抱えきれなくなったところ、ようやく満足したのか手を下ろす。時折銀に輝く爪先がわずかに緑に染まっていた。

「これだけあれば十分よね」

独り言のようにつぶやき花びらに顔をうずめる。その甘い香りをたっぷり堪能してから、琳が歩き出すのと同時に沙綾も歩き出した。

「ばあや、お待たせ」

「まあ、ひいさま。こんなにたくさん摘んでこられたら、花壇が丸裸になっていませんか？」

「大丈夫よ、ちゃんと琳に見てもらったから」

笑いながら相槌を求めれば、琳がもちろんとうなずく。その様子を微笑ましそうに見つめ、夕風はくるるときびすを返した。

「早く水につけてあげましょうね。ひいさまと琳さまは、手を洗ってからテーブルで待っていてくださいまし」

まだまだ子供に接するような夕風に二人は苦笑し、それでも素直

に従った。

カチャリ、とかすかな音がたつ。目の前に置かれた紅茶は、ミルクティー。蜂蜜たつぷりの夕風特製ミルクティーは、沙綾のお気に入りだった。もちろん、添えられたクッキーも。

「琳さまには、ちゃんと蜂蜜を抜いてありますから」
銀の器を差し出しながら夕風が微笑む。この狼が、昔から甘いものを好まないことはよく知っていた。

「甘いほうがおいしいのに」

「もともと私は人と同じ食事をしないからな」

もつたいない、とばかりに嘆く沙綾を軽くあしらい、水しぶきも音も立てずに器用に紅茶を飲む。その横で沙綾も上品にカップを口に運ぶ。口の中で紅茶の味をたつぷり堪能し、ほっと息をついてからふと気づいた。

「ばあや、さっきの花、どこに飾ったの？」

てつきりこのテーブルに飾られるとばかり思っていたのだが、花の香りがしない。不思議そうにきよろきよろと辺りを見回すと、夕風が微笑を含んだ声で告げる。

「琳さまとひいさまのお部屋と、私の部屋に飾らせていただきました。残りは応接間に」

「ちよつとたくさん摘みすぎちゃったかしら？」

「いいえ、部屋が華やかになって、とてもうれしいですよ」

よかった、と安堵する沙綾の隣で、狼が一瞬ピクリと耳を動かす。そして音を立てずに立ち上がると窓辺に向かった。普段の琳は滅多なことでは食事中に立ち上がらない。そう、沙綾の母親にしつけられていたからだ。そんな極めて珍しい行動に夕風がまず眉をひそめる。

「琳？」

空気が動く気配で少女も気づき、振り返る。もし、沙綾の瞳に琳

の姿が映っていたならば、その珍しい表情に驚いたであろう。何かを警戒するような、けれど、どこか戸惑うようなその双眸に。

「夕凧。馬が近づいてくる。二騎……いや、三騎か」

「ひいさまはここを動かないでくださいまし」

琳の言葉にすばやく立ち上がり、夕凧は厳しい表情で部屋から出る。その緊張した様子に不安がこみ上げてくるのをとめられず、沙綾は琳に駆け寄った。もうどこに何があるか熟知している部屋ではあるが、視界の利かない沙綾にはわずかに走ることも危険だ。

「沙綾、走ると危ない」

少女が抱きつくままに沙綾を受け止め、琳は諭すように言葉をつむぐ。しかし、沙綾はその言葉が聞こえないかのように、ただきつく琳を抱きしめていた。

柔らかな銀の体毛に体をうずめながら、思い出すのはあの日の夜。光を失い、逃げるように村を出た恐怖の記憶。夕凧の暖かい手のひらだけを頼りに、真の暗闇の中を子供は足早に歩いた。

「沙綾、大丈夫だ」

琳の優しい言葉に、びくりと体を震わせ沙綾の意識が浮上する。そして扉の外に意識を向ければ、緊張してはいるが争いの気配は一切ないと安堵した。

「大丈夫。何があっても沙綾は私が守る」

「……うん」

ぎゅっと琳にしがみつき、沙綾は深く呼吸する。その一呼吸ごとに早まっていた鼓動は元に戻り、震えていた体も、やがて徐々におさまっていった。

しばらくそうしてじっとしていると、扉が開く気配がする。ぱたんとすぐに閉じられてしまった扉の向こう側は、視力のいい琳でも確認することができなかった。

「ひいさま……琳さま……」

困ったような、泣きそうな口調で夕凧が歩み寄る。いつものかくしゃくとした足取りはなく、よろよろとくず折れるように二人の前

に跪いた。その背中を優しく撫で、沙綾ははやる気持ちを抑えながらなるべくゆつくりと言葉を紡ぐ。

「ばあや？どうしたの？」

「ひいさまを、王宮へと」

「王宮？」

普段人とかかわりを滅多に持たない沙綾には、王宮という言葉に耳なじみがない。どこか遠く、異国のように思える。そんなところへいったいなぜ、という思いと、なぜ自分のことを知っているのかという不審がじわじわと胸に広がった。

「なぜ？」

「ひいさまの、お力が……」

敬愛する彼の人から預かっている、大切な子供。いつしか、自分の子供のように思っていた。己の一族の、大切な大切なその力をどこでかぎつけたのか。

ぎりつと音がしそうなほど唇をかみ締め、夕風はうなだれる。いつものおっとりとしたばあやのただならぬ気配に、沙綾は慌てた。なだめるようにその背を軽く撫で、一度抱きしめる。

「……話を、聞くだけ聞いてみるわ」

硬くこわばった表情のまま夕風につげ、沙綾は立ち上がった。琳も従うように沙綾の足に寄り添う。一人になる心細さに、愛おしい子供を送りだすことに、夕風は泣きそうな声で琳を呼んだ。

「琳さま……」

「大丈夫だ。夕風は落ち着くまでここにいるといい」

歩き出した琳は立ち止まり、振り返り告げた。その力強い言葉にほっと安堵し、夕風は目を閉じて手を組む。

「神よ……」

どうか、あなたの愛し子に辛い試練を与えないでください。あの子は、十分に苦しみました。今もなお、苦しんでいます。どうか、どうか

パタン、と音が聞こえ、沙綾と琳が手の届かないところへ行った

のを、知った。

「私に御用と伺ってまいりました」

琳を従え、沙綾は背筋を伸ばして客人に目を向ける。もちろんその姿を見ることはできないが、その気配からどのような者が訪れているのかを知った。

「あんたが、薬師の姫君か？」

ぶつきらばうな口調が耳に届き、彼に向き直るように体ごと向ける。琳が警戒を解かないので、緊張したまま一つ息を吸った。

「私は一介の薬師。姫などではありません。そして、すでに薬師としての生業を止めたもの。あなた方の求めるものは何もあります。今すぐお引取りください」

ぴん、と筋の通った紐のような、けれどすぐに切れてしまいそうな危うい響きをもったまま、沙綾はぐるりと部屋を見回す。声は一つしか聞こえていないが、気配は三つ。どれも研ぎ澄まされた刃のような鋭い気配だ。たぶん、武器をたしなむものたちなのであろう。「申し訳ありませんが、その言葉は聴けません。我々には重大な使命があります。あなたが断ろうとも、どうしても王宮に連れて行かなければならないのです」

先ほどの声よりも幾分やわらかい。それでも、どこか上から命令するような響きは隠せない。その口調にほんのわずかに眉をしかめ、沙綾は声のほうに視線を投げる。胸を張り、小柄な少女だと侮られないように毅然とした口調で告げた。

「残念ですが、私に権力はききません。私はこの国の住民であつて、国民ではない。なので、あなた方の言う重大な使命も私には関係のないことです」

そうきっぱりと言い切れば、最後の三つ目の気配が動いた。がたん、と大きな音を立てていすが蹴倒され、空気が動く。ずかずかと

歩み寄ってくるのがわかったが、沙綾は動かない。動いたのは、足元の狼。

「グルルウウ」

牙をむき出して威嚇する琳に、気配が一瞬たじろぐ。その隙を見逃さずに、沙綾が口を開いた。

「近づけば、攻撃します」

「ちっ！」

前傾姿勢で今にも飛び掛ろうとしている琳に、さすがの男も舌打ちして止まる。その様子を傍観していた最初の男が、どこか面白そうに告げた。

「わかった。こっちが悪かった。とりあえずお姫さんも座らねえか？ レイも戻れ」

「……わかった」

レイと呼ばれた男は素直に戻り、椅子に座る。それを待つてから、琳がそつと足元を離れた。沙綾は一步、二歩と警戒を解かないまま歩き、言われたとおり腰掛ける。

「さっきのばあさんには話したけど、あんたには詳しく話してなかったみてえだな。まずはこっちの状況からきちんと説明しよう」

そこで言葉を区切り、沙綾を伺う。少女は何も言わずに、ただ言葉待った。

「事の発端は、一ヶ月前にさかのぼる」

この国には、賢君と呼ばれ、国民から親しまれている国王がいた。しかし、国王は老いた。やがて老いは病を運び、国王は病に倒れる。その跡継ぎとなる王子は二人いた。第一王子ルーク、第二王子シド。一人ならば何も問題はなかったのだが、不幸なことに二人いたのだ。

この国をすべる王族には、古くから慣わしがある。生まれた王子が二人以上ならば、そのうち光をまとうものが次の国王になると。

代々その選定は現国王が決めていた。有事の際は、それを神官が代弁する形になっている。

過去にも何度か現国王の変わりに神官が次代の選定を行っていた例があった。国王は病にたおれ、言葉をつむぐのも難しい状態である。なので、今回も過去の例に倣い神官が次代を選定することになった。しかし、それが問題であった。

有事の際に次代を決めることができる神官は、三人いる。三人が一致したときに初めて国王となれるのだ。だが、大神官が現在不在の状態であり、神官は二人。その二人は、それぞれ光の意味をこう告げた。

一人は、光とは金の色を持つものだという。

一人は、光とはそのまとう王気のことであるという。

そして、王宮は二つに割れた。金の色を持つ第一王子を推す一派と、王気を持つ第二王子を推す一派と。やがて争いは熾烈になり、とうとう第一王子倒れた。それも、原因不明の眠りの病に。誰がやったか確証はなく、解毒薬も手に入らない

「あんたは薬師だ。国中の薬師を呼んだが、だれも解毒をできなかった。もう、あんたしか頼るものがないんだ」

そういつて、男は苦しげに顔をゆがめた。主を救うために、自らのプライドを捨てて頭を下げる。他の二人も、それに習って神妙に頭を下げた。

本来はプライドの高い人たちなのであろう。どこか憤然とした気配が残っているが、その潔さに沙綾の心はゆれる。

本音を言えば、沙綾は宮廷の争いごとなどどうでもよかった。国王が変わろうが、第二王子が次の国王になろうが、自分の生活に何も変わりはない。夕風と琳と、静かにこの森の中で暮らしていくだけだ。平穩に、穩やかに。

けれども。彼女の中の、薬師の血がざわめく。今まで近隣の村人

をたびたび救ってきた。そのたびに感謝され、その救ける喜びに心底薬師であることを誇りに思っていた。もし、今ここで彼らの頼みを引き受けなかったら？そうして、そのままもしも救える見込みのある王子が亡くなったら？

そう考えると、胸の奥に冷たい石の塊ができたような気分になる。

重たい沈黙が続く中、琳の尻尾がそつと沙綾の足をなでた。思ったとおりに行動したら言いと、勇気付ける。

「……わかりました。診てみましょう」

ようやく沈黙を破った沙綾の言葉に、男たちの表情が明るくなった。これで主は助かるかもしれないと。希望の光を胸に灯す。

「ただし、いくつか約束してほしいことがあります」

「きけるものであれば」

条件をつけられるのは承知のうちだ、と男が笑った。

「一つ。あなた方の主人が一命をとりとめた後、一切私にかかわらないこと。二つ。私の存在を公にしないこと。三つ。琳を、狼を王宮内へ入れてくれること。四つ。万が一、私があなた方の主人を助けられなかった場合、私を含め全員に咎が及ばないこと。もちろん、そのときも一つ目の条件と同様に私たちに一切かわらないこと。この条件を飲んでくださるのであれば、王宮へ参ります」

「わかった。約束しよう。必ず守る。……心配なら後で書面にするか？」

最後に茶化すように付け加えるが、彼は約束を破らないだろう。

なんとなく、沙綾はそう思う。軽く微笑をたたえて首を振った。

「……いいえ、ここにいるあなた以外の方と琳が証人です。書面はいりません」

一瞬琳が沙綾に視線を向けるが、うなずくことで大丈夫と示した。男が面白そうに笑う気配が届く。それをきっかけに、場がわずかに和んだ。そうしてはたと気づく。そういえばまだ名前も名乗っていないかったのだと。

「申し送れました。私の名前は沙綾。最後の薬師です」

やや緊張気味にそれでもなんとか微笑を形作り、沙綾は立ち上がり軽く一礼をした。不思議な物言いに男が首をかしげる。

「最後？」

「はい。私で、最後です」

男が意味を問うが、少女は答えない。男は深く追求せずにただうなずいた。そうして沙綾を座るように促し、同じように席を立つ。もともと礼儀正しいのか几帳面なのか、わざわざ宮廷式の丁寧な礼まで添えた。

「俺の名前はレオン。こっちがレイで、こいつはミラ」

「……申し訳ないのですが、私は目が見えません。声を聞かせていただいてよろしいですか？」

たぶん、レオンは手で示しただけなのだろう。頭を下げる気配はあるが、なじみのない彼らの区別はまだつかない。わずかにためらった後、沙綾は申し訳なさそうに言葉をつむぐ。てつきり彼らは気づいているかと思ったが、そこまで観察されていなかったらしい。そう思うと。小さな苦笑がもれる。

「おっと、これは悪かった」

軽く驚いた気配が返ってきた。やはり、沙綾が思った通り彼女の双眸が光を失っていることに気づかなかったようだ。他の二人も同じだったようで、近づいた男でさえ気づいていなかった。それほどまでに彼らも緊張していたのだろうか。

そんなことを頭の片隅で考えていると、思考をさえぎるように声が届く。

「ミラといいます」

「レイだ」

口調は丁寧だが、どこか冷たい感じのするミラ。ぶっきらぼうだが、レオンに通じる温かみを感じるレイ。そして、彼らのリーダー格なのであろうレオン。面白い三人組だなと、琳はかすかに鼻を鳴らす。自ら挨拶をしようとし、それを沙綾にとめられた。

「今準備をしますので、もうしばらくお待ちください」

軽く会釈を残し、沙綾は琳を伴って部屋を出る。その拍子に、扉にすがつていた夕凧が転ぶように後ずさった。

「ばあや……」

「失礼かとは思いましたがお話を聞かせていただきました。……お行きになるのですね」

そこに彼女がいることに気づかなかった沙綾は驚くが、諦めにも似た口調が驚きを消し去った。それに疑問を感じるが、それを口に出す前に琳が言葉をつむぐ。

「行かなければならないだろう」

「……はい」

琳と夕凧の視線が交錯する。それに気づけないまま、沙綾は動いた。彼らの話を聞くに、時間はあまりない。

「準備をするわ」

そうして沙綾が場を離れた瞬間、夕凧が悲しそうに視線を落とす。諦めとやるせなさとかすかな憤りが混じった、複雑な表情。

「私は……また、あの子を護れないのでしょうか」

「夕凧……」

「また、あの子に哀しみを背負わせてしまうのでしょうか」

王宮へ行くということは、図らずもあの人に出会うのではないかと。もしも出会い、そして真実を知ったとき。

がり、と小さな音がし、夕凧の手元を見れば爪が床板に食い込んでいる。その痛みがないわけではないだろうが、夕凧はひたすらこぶしを強く握り締めていた。

「大丈夫だ。あの子は、何にかえても私が護る」

「琳さま……」

「あの子が悲しむからおやめなさい」

そつと鼻先を夕凧のこぶしにつけ、促す。それだけで夕凧は力が抜けたようにこぶしを開いた。

「どうか……どうか、あの子をよろしくお願いいたします」

これ以上哀しみを背負わないように。

これ以上涙にその瞳がぬれないように。

王宮

2 王宮

琳と沙綾は、賓客用の部屋に通された。甘い香りのする紅茶と焼き菓子を出され、部屋には二人だけになる。もちろん、扉の外に衛兵がいることは間違いないのだが。

「琳……私に、できるかな」

きゅつとスカートの裾を握り締め、沙綾が小さくつぶやいた。今更ながらに、王宮にいるという事実が彼女を萎縮させている。もしも琳が一緒ではなく、一人であつたならまともに薬を選ぶこともできないくらい緊張していた。

「大丈夫だ。沙綾ならできる。……沙綾にしか、できないんだ」

「……私にしか、できない」

足元に座った狼の柔らかな体温。幼いころから共にすごし、そのぬくもりがそばを離れたことは片時もなかった。家族のような、体の一部のような琳が大丈夫というのだ。きっと大丈夫なのであろう。そう思うことで沙綾は小さく息を吐いた。緊張をほぐしておかなければ、身が持たない。

コン コン

少し間延びしたノックが聞こえた。居住まいをただして座りなおし、琳は口を閉じる。こちらの返事を待たずに入ってきたのはレオン。

「こっちだ」

言葉少なに合図をする。沙綾は立ち上がり、支えるように琳が足元に寄り添った。琳についていく形で部屋を出て、右へ左へと複雑な道を歩く。その際一言もレオンは言葉を出さず、また沙綾も無言でついていった。

「ここだ」

案内された場所は、王宮の奥深く。衛兵の気配はするが、彼らは何もしゃべらない。ただ一礼を返し、彼らのために扉の前からわずかに退いた。

一つ息を吸ってからレオンが扉を開けた瞬間。誰かが勢いよく飛び出してきた。

「レオン！今までどこをほつつき歩いていたんですか！こっちはものすごく大変なことになっていて、今まで一人で王子の面倒を見ていたんですよ！レオンがいないだけで兵士の士気は下がるし王子は相変わらず目覚めないし陛下の容態は悪くなる一方だし王妃は王妃でああだし……………って、こちらのお方は？」

立て板に水のごとくまくし立てていた男は、あつけに取られている沙綾と琳にようやく気づく。まず琳に驚いたのか、ぎよつとしたように軽くのけぞった。しかし逃げ出しはせず、次いで沙綾を見つめレオンをじつと凝視する。その細い双眸でまっすぐにみつめられたレオンは、苦笑して扉を閉めた。衛兵たちが一生懸命何もなかったふりをしてくれる、その気持ちを汲んだのだろう。

「フィージ、少し落ち着け。お姫さんたちがびっくりしているだろう？」

くしゃり、と淡い茶色の髪をかき回し、慣れた仕草で肩をたたく。そうすれば、優しい面立ちにふわりと微笑が浮いた。

「姫……………？ああ、申し訳ございません。あなたが件の薬師殿ですね。申し遅れました。私、王子付きの教官でフィージと申します。レオンが何か失礼をしませんでしたか？」

「おい、それはどーゆー意味だよ」

にこやかな笑顔で挨拶したフィージとは対照的に、レオンの青い瞳が剣呑に細められる。しかし、その表情とは裏腹にレオンの口調は笑いを多分に含んでいた。どうやら彼らは旧知の仲のようで、レオンも本気ではないというのは初対面の二人でもすぐにわかった。

「そのままの意味ですよ。口が大変悪いですが、根はいいやつなんですよ。よろしくやってください。ああ、すみません、大切なお客様

を戸口で立たせっぱなしにしてしまつて、私としたことが不明でした。少し急がなければならぬので、お茶の準備をと行きたいところですがそこは割愛させていただきますね。すべて終わりましたら、ゆっくりお茶でも飲みながらいろいろお話させていただければと思います。いかがでしょうか？姫君」

どうやらこのフィージという男性はものすごくよくしゃべるらしい。となりでレオンがげんがりしたように彼を見つめ、沙綾は思わず声を立てて笑ってしまった。その途端、全員の視線が沙綾に向いた。

「あの……？」

もしかしたら笑つたらいけなかったのだろうか？

そんな不安が胸によぎるが、彼らの言葉に不安はすぐに払拭された。

「ずっと緊張しっぱなしにさせちまつたけど、笑えるなら大丈夫みてえだな」

「レオンが何か悪さをしてそんなにふさぎこんでいると思つていたのですが……笑っていただけで本当によかつた」

どうやら傍目にもわかるほど自分は緊張していたらしい。それを汲み取った二人がわざとおどけたように振る舞い、沙綾の緊張をほぐしてくれたようだ。緊張は悪くはないが、しすぎる緊張は悪影響を呼んでしまう。

昔夕風に言われた言葉を思い出し、沙綾は一度瞬いた。そしてふわりと微笑する。

「大変失礼をいたしました。ご心配をおかけしてしまったみたいですね。もう、大丈夫です」

「そいつはよかった。……この減らず口が役に立つこともあるんだな」

柔らかな微笑を浮かべた沙綾にレオンも屈託なく笑った。あからさまな嫌味はフィージにきかないらしく、笑顔で黙殺される。その二人の関係を少しだけうらやましく感じれば、琳が柔らかな体を押

し付けてきた。どうやら、早く挨拶を済ませてしまえと催促しているらしい。

「申し送れました。私は沙綾。この子は琳。早速ですが、殿下の具合を拝見させていただいてよろしいでしょうか？」

「そうしていただけると助かります。……お手は必要でしょうか？」
沙綾の目が不自由なことに気づき、フィージが言葉を添えた。それににこりと笑って首を振り断る。

「琳がいますので……ありがとうございます」

軽く会釈をし、琳を伴って歩き出した。そのまま真っすぐ王子の眠るベッドにたどり着き、膝について手を伸ばす。少し離れたところにいる二人には、目が見えないのに治療ができるのかという不安が少なからずあった。しかし、確かに見えてはいないはずなのに慣れた手つきで脈を取り顔に触れ、真剣な面持ちで患者を診る。診察が終わったのか、沙綾は立ち上がり、難しい表情で二人を見た。

「どうだ？」

焦れて言葉をつむいだのはレオン。強固な意思で焦りや不安を押し殺してはいるが、声音は硬い。

「……最善は尽くします。申し訳ございませんが、しばらくの間お二人は退出していただいてよろしいですか？」

「見ているだけでもいるのはダメか？」

「見ていられるのが困るのです」

困ったような顔だが、きっぱりとそういわれてしまえば二人に断るすべはない。しかし、見ず知らずの者と大事な王子を二人きりにするのも問題だ。何かあってからでは遅いのだ。彼女が刺客とも限らないのだから。

しかし。

「レオン、部屋を出しましょう。どうせいても、私たちでは邪魔になるだけです」

「……わかった。ただし、隣の部屋にいるのは譲れない」

「もちろんかまいません」

フィージに諭され、レオンはしぶしぶながらもうなずいた。条件をつけることを忘れなかったのは、さすがといおうか。

沙綾と琳を残して隣室に消えた二人は、やるせなさのため息に乗せる。乱暴にいすに座るレオンに眉をひそめながらも、フィージは棚から蜂蜜酒と焼き菓子を持ってくる。レオンの前に差し出し、自らもその向かい側に座った。

「そんなにカリカリしなくても大丈夫ですよ。あの方は、銀の一族でしょう？必ず王子を助けてくださいます。あなたもそれを見込んで、わざわざあの森を訪ねた。あの方に会うために。あなたのすること間違いは滅多に起こりません。それは私が証明します」

「……わかつちやいるんだけどな」

彼女でなければいけなかった。大切な彼の人を助けることができるのは、世界中でもあの小さな少女だけなのだから。

「あなたには甘いでしょうが、少し飲んで休んでください。終わりましたら、必ず起こしますから。どうせあなたのことです。他の人のことなど考えずに馬を飛ばしてきたのでしょうか？あなたも相当参ってるはずですよ。自覚はないのですか？」

「……わかつたよ。頼む」

くどくどと説教されるのは趣味じゃない。

顔をしかめると、杯に満たされた蜂蜜酒をぐいっとあおった。彼には甘すぎるそれも、疲れた体には心地よい。焼き菓子には手をつけずに、そのままソファにごろりと横たわった。

「あの方が、本当に銀の姫であるのなら……」

何も心配は要らない。

「……皮肉なものですね」

小さく自嘲した。彼女に頼らなければならなかったことを、ちらりと後悔する。それでも、自分の悔恨など小さなことに過ぎないとフィージは目を閉じた。

隣室では、沙綾が小さな布袋からさまざまな薬草を広げていた。粉にしたものもあれば粒状のもの、液体、花びらや葉の乾燥したものなど種類はたくさんある。その中からいくつか選び出し、近くにあった水差し用の器に移していく。

「いつみても沙綾はすごいな」

「どうして？」

「見えていないのに、何でわかるんだ？」

「わかるんじゃないくて、薬が教えてくれるのよ」

もう、何回答えたかわからない答え。琳は、沙綾が薬を調合するときは必ず同じことを聞く。そして必ず同じことを沙綾が答える。これは一種の儀式のようになっていた。

「薬はね、目で見てもわからないわ。ちゃんと、相手のことを考えて何が必要か尋ねれば必ず応えてくれるの」

「……そんなものか？」

「そんなものよ」

くすりと笑って沙綾はさらりと答える。事実、それぞれの薬が入っている小瓶には指で触れてわかるような特徴はない。沙綾にはすべて同じ小瓶に感じられるだろう。それでも、彼女が作った薬

例えば傷薬や解熱剤など　はどれも格別によく効く。

やがて器の中身は、どろりとした白濁色の液体で満たされた。最後の仕上げにと、沙綾は小さなナイフを取り出し、ためらいもなく指先を傷つける。ほんの二滴。赤い液体が混ざると、不思議なことに濁っていた液体は透き通り、淡い紅色に色づいた。

「ちゃんと飲むかしら……」

何せ、相手は眠っているのだ。口に含ませたとしても嚥下してくれるとは限らない。それでも、骨ばった手首やことさらゆっくり脈打つ心臓に時間はないと悟る。

静かに頭を持ち上げ、そっと口元に器を当てるとゆっくりと液体を流し込む。幸いなことに、彼は少しずつではあるがきちんと飲み込んでくれた。

「琳、二人を呼んできてくれる？」

「わかった」

ほっと安堵した沙綾の要望に快くうなずき、琳は軽い足取りで歩き出した。さすがに大きな体を持つ琳でも、重たい扉を開けることはできない。前足でカリカリと扉をひっかけば、すぐに開いた。

「王子は？」

「容態はいかがですか？」

心配顔の二人が駆け寄ってくるころには、薬はすべてなくなっていた。沙綾はにこりと微笑むと大丈夫とうなずく。

「早ければ今日の夜にでも、遅くても明日には目覚めるかと」

「そうか……」

ひとまず安心はしたが、肝心の王子はまだ目覚めていない。まだ気は抜けないとレオンはひそかに気を引き締める。

「姫君、お疲れでしょうからどうぞこちらの部屋へ。今温かいお茶を用意させますので。……指先をどうされたのですか？先ほどは気づきませんでした。怪我をされていたのですね。申し訳ございません、すぐに薬をお持ちしますので」

ふと、薬師に薬を出してもいいものかと疑問に思うフィージ。首をかしげて考え込んでしまった彼に、沙綾は笑った。

「これくらいの小さな傷ならたいしたことありませんので。見苦しいものをお見せしました」

布袋の中から止血用の布を取り出すと、細く切り裂く。それを片手で器用に巻きつけ、床に散らばった小瓶を片付け立ち上がった。

「殿下の容態は安定しているとは思いますが、ご迷惑でなければしばらく様子を見させていただきたいのですが……」

「もちろん！こちらからお願いしようと思っています。部屋の準備は後で用意させますので、どうぞこちらへ」

恭しく沙綾の手をとり、フィージは隣室へ歩き出す。と、歩みを止めてレオンを振り返った。

「どうしますか？」

「ここにいる」

いつ王子が目覚めてもいいようにとのことなのだろう。職務熱心なだけでなく、レオンと王子は年の離れた兄弟のようでもあった。それだけ、彼のことが心配なのだ。

レオンとも王子ともかれこれ十年來の付き合いとなる。二人の関係もレオンの気持ちもよくわかるフィージは、穏やかに表情を緩めてうなずいた。親友をそのままに、沙綾を伴って歩き出す。と、何かに気づいたように振り返った。

「おや？」

当然ついてくると思った狼が歩みを止めてしまったので、フィージは数歩戻ると狼と目線を合わせるようにかがむ。少し迷ってからまじめな口調でどうするかと尋ねた。狼にまじめに話しかける人間は珍しく、沙綾は少しだけうれしそうに笑う。そうして、口を開かない狼に変わって少女が返答を返した。

「琳にミルクがたつぷり入ったお茶をいただけるとなら」

「それはもちろん。大切な恩人のご友人であらせられるからね。」

「おや、人ではないから友人ではないのかな？友犬、いや狼か。友狼？しつくりこないな。この場合はやっぱり友達になるのかな」

生真面目な顔で琳を評するフィージを、当の狼がまじまじと見つめた。まるで今まで見たことはない不思議な生き物を見るように。さらに、フィージの後ろでは沙綾があっけにとられたように彼を見つめ、レオンにいたってはうつむいて肩を揺らしている。

友人のおかしな言動には慣れてはいたが、それが人に対してだけ発揮されるものではないと気づき、笑いのツボにはまってしまったらしい。そんな彼らの様子に気づいたのか、至極まじめな顔でフィージは周りに尋ねた。

「何かおかしなことを言いました？」

「いや、私に対してここまでまじめに考え込む人間は、そう多くないからな」

声がどこから聞こえたのか一瞬わからない。問いかけたフィージ

も、そばで聞いていたレオンも、ぎょつとしたように琳を凝視した。琳が言葉を発したことに沙綾も軽く驚き、ついで眉をひそめる。

「琳」

「大丈夫だ」

心配する沙綾をよそに、琳は楽しそうに答える。この二人は信用できると。

「……いやあ、驚きましたね。鳥がしゃべるのは見たことありますが、狼がしゃべるのは生まれて初めてですよ」

驚きのあまり、言葉が出てこないらしい。饒舌すぎるほど饒舌なフィージにしてはめずらしく、言葉が少なかった。同様に、レオンは言葉も出ないほど驚いているらしい。王子のそばから離れ、まじまじと琳を真正面から見つめた。

「……狼、だよな？」

「無論」

目の前でしゃべられれば信じないわけにはいかない。自分たちの常識にはきつと当てはまらない者たちなのであろう。

そう結論付ければ、もともと頭の柔らかいフィージである。細い目をさらに細めてにこやかに笑った。

「姫君の話では、君はミルクたっぷりのお茶を飲むそうですね。今甘い焼き菓子と一緒に用意しましょう。姫君も一緒に、隣の部屋でお待ちいただけますか？」

「お言葉に甘えまして」

沙綾もにこりと笑うと、フィージとレオンに軽く一礼を返してから琳を伴って隣室へ行く。残されたレオンは奇妙な表情のまま、それでも王子の枕元へと戻った。

「……なんか、あんまり驚いてねえんだな」

ベッドの端にどっかりと腰をかけて友人を見つめる。細い目の青年はそれは意外だと表情を変え、飄々と返事をした。

「いいえ、ものすごく驚いていますよ。でも、納得はしました。…

…これで、彼女が本物であると」

「……………」

「さて、私はお茶の準備をします。あなたも何か飲みますか？」

「頭がすっきりするようなのを頼む」

「では、すぐにでも」

にこやかな笑顔を残してフィージは部屋を出る。相変わらず眠り続ける主を苦い顔で見つめ、黒髪の青年はつぶやいた。

「俺は時々、あいつが怖いよ……。お前ならどう思う……？」

普段は軽い調子だが、ひとたび剣を取れば冷静沈着、向かうところ敵なしと恐れられるレオン。その彼ですら、フィージが怖いと思うときがある。もう、長い長い付き合いになるが、あの穏やかな笑顔の裏に隠されたものは自分と十分通じるものだ。

「早く起きろよ、ルーク」

祈るように組んだこぶしをきつく握り締め。今はただ、神に祈る。

目覚め

3 目覚め

癖のない黒髪を、誰かがいじっている。少し硬質なまつすぐな黒髪は、昔は姉たちのおもちやだった。そのせいか、今も誰かに触られるのが嫌いだ。

うつとうつしく思っ頭を軽く振るが、指先は一瞬離れただけですぐにまた絡まってくる。その感触を楽しむように。

姉とは違う、少し無骨な細い指。触られるのは嫌いなはずなのに、なぜか心地よい。そう、昔、まだ自分が本当に小さな少年のときに

「……誰だ……」

夢うつつのまま記憶を手繰るが、幾度も髪を引かれる感触に記憶は砂のように零れ落ちる。それは形にならずに、結局眠りを妨げられてレオンは目を開けた。

「おはよう」

「……おは……… おはようじゃねえだろ、ルーク」

湖の瞳が、ようやく自分を見つめた。青く、碧いその眼差しは自分が求めてやまなかったもの。今は少し疲れに翳ってはいるが、日の光に当たればきらきらと湖面のように輝くその双眸。ようやく見つけた、自分が仕えるべき主。

けれどその瞳が自分を映す喜びよりも先に、あまりののんきさに脱力感がレオンを襲う。

「私は、どれくらい眠っていた？」

「一月経つくらいか」

体を起こそうともがくルークに手を貸し、レオンはその背中に枕をいれて掛布を丸め、彼が楽なように整える。にこやかに礼を述べるが、その顔色は明らかに悪かった。

「待っている、今フィージを呼ぶから」

「レオン、待て」

部屋を出て行こうとするレオンを制し、ルークは思案するようにうつむく。何か言葉を紡ごうとするが唇をなめては飲み込み、言葉は音にならない。そんなルークを訝るようにつめ、レオンは数歩進んだ足をまたベッドに向けなおした。

「ルーク？」

「フィージは……いや……大丈夫、なはずだ……」

「一人で抱え込むなって、何度いえばわかるんだ」

敬愛する主人であると同時に、弟のような存在だ。悩むルークの頭をばん、とたたき、レオンはベッドに座りなおした。そして視線で話を促す。

「どうした？何を悩む」

「……私が倒れたのは……… フィージが入れたお茶を飲んだ後だった」

「何？」

思わぬルークの発言に、レオンは驚きを隠せない。フィージは、レオンの無二の友人であり、ルークの忠実な臣下で教師だ。それに、当の本人からそんな話は一言も聞いていない。普通に考えれば自分が疑われるようなことを他人に話すとは思えないのだが、ことがことなだけにレオンの眉間にしわがよった。

「どういうことだ？」

「あの日……父上の代わりに仕事をしていたのは知っているな？」

もちろん、とうなずくレオンから視線をそらし、ルークは迷うように唇をなめる。それからしばらく沈黙し、やがてレオンが焦れたころ再び口を開いた。

「その日は、西の地方で洪水があって、人手がすごく少なかった。

私とフィージと、数人しかいなかったんだ」

彼が倒れた日は、レオンもよく覚えていた。確かにその日、連日の豪雨で川が氾濫し、西の地方に大人数が借り出されていた。その

中にレオンもいたのだから間違いない。ひどい土砂降りで、前もよく見えない中で懸命に作業をしていたのだ。

小さな村一つが水没するような大規模な氾濫だった。大勢の人が亡くなり、ようやく水が引いたときには呆然とする人々の姿でいっぱいだった。彼らを叱咤し、どうにか立ち直らせるころにはもう日付が変わっていた。結局宮廷に戻ったのはその翌々日で、その時にはすでにルークは眠りについていて。

「そろそろ日暮れも迫っていて……昼食をとる間もなかったから、フィージが軽食とお茶を持ってきてくれた。フィージはいつも隣でお茶を入れていた。そのときも、隣の部屋にはフィージだけしかいなかったはずだ」

過去にさかのぼる記憶をルークの言葉が現実を引き戻す。その言葉の意味に気づき、ますます眉間にしわを寄せた。

「……眠ったのは、その直後か？」

「いや、もう少し後だったと思う」

「なら、フィージのお茶とは限らないな。一緒に何か食べたんだろう？それが原因かもしれない」

しかし、とも思う。自分が帰ってきたときには、すでにルークは眠りについていて。眠りにつく直前の話を聞いたときも、ルークが何か口にしたとはいわなかった。ただ単に忘れていたとも考えられるが、何せルークが目覚めなかったことで一時騒然となったのだから、フィージがそういう「抜け」をするとは思わない。自然、ある仮定が浮かび上がってくる。

「……あいつを疑いたくはねえが……とりあえず、あいつのことは俺に任せとけ。お前はもう少し休んでろ」

話し疲れたのかルークの顔色が一段と悪くなったことに気づき、レオンは彼を半ば無理やり横にする。ゆるく抵抗するその体に布団を直すことで押さえ、やがてルークが眠りに落ちるまで穏やかな顔で付き添った。しかし、彼が眠ると一転して表情が陰しくなる。何事考え込むが、一つ大きくかぶりを振って隣室の扉を開けた。

規則正しい寝息を止めないように、レオンは息を殺して歩く。もともと剣をたしなむ身だ。気配を殺すことなど造作ない。そつとナイフを抜くと、フィージの首筋にあてがった。

ナイフの冷たい感触に眠りを妨げられ、紅茶色の双眸が開く。眠りが浅かったのか、すぐに自分の置かれている状況に気づいた。

「何のまねですか。悪ふざけにもほどがありますよ」

ナイフが首筋に触れているというのに、フィージはいたって冷静に言葉を紡ぐ。相手が顔見知りということと、ナイフを突きつけられる理由が思い浮かばないからかもしれない。

時に自分以上に冷静に状況判断をするフィージに、レオンは無性に腹立たしく思った。もしもここでわめくか何かしてくれれば、もっと自分は冷静になれたのにと八つ当たりめいたことを考える。そんなことを考える自分は、冷静なのかそれとも多少なりとも混乱しているのかわからずに、内心苦笑した。しかし表情には一切出さずに、静かに告げる。

「残念だがふざけているわけじゃあない。……ルークが目覚ました」

「本当ですか！」

今にも飛び起きそうなフィージを、レオンの刃が制する。フィージの眉間にすつとしわがより、いい加減にしろと視線が語った。もちろんそれだけではレオンの刃は離れずに、怒ったような困ったような、どこか泣きそうな情けない顔でつぶやくように問う。

「なあ、フィージ。どうしていわなかった？」

「何をです？」

「ルークが倒れる前に、お前が持ってきたお茶と食事を取ったことを」

一瞬、フィージの双眸が見開かれた。そして迷うように視線をさまよわせ、何度か口を開閉させる。が、やがてあきらめのため息をつく。

「それは……王子から話を聞いたのですね？」

「ああ。場合によっちゃあ、このまま……」

ぐつと刃を押し当てる手に力をこめれば、ぷつりと皮膚の敗れる感触。そのまま一筋赤い筋が首を汚した。血の流れる感触に顔をしかめ、馬鹿なことを言うなと怒りを表す。

「冗談よしてください。私が王子を裏切るはずがない。王子を殺したいなら、あなたがいない間にさっさと終わらせていましたよ。眠らせるなんて生ぬるいことはせずに、さっさと殺して誰の手も届かないところに逃げますよ。いわなかったのは……いえなかったのは」

確かに、何事も完璧を追求するフィージならはこんな中途半端に終わらせることはしないだろう。薬物ならばすぐに足がついてしまう。剣のたしなみはあまりないとはいえ、新米兵士を相手できるほどの腕前だ。油断している丸腰の相手ならば、手間取ることもないだろう。彼の思考回路はある意味わかりやすい。もしも自分で手を下したならば、証拠を残さずにさっさとこの国から姿をくらませているはずだ。

それならば、答えは一つ。

「誰をかばってた？」

「……巫女を……リコです」

「何？」

思わず耳を疑った。もっとも容疑者から遠い人物の名前が飛び出してきたからだ。

「本当か？」

「ええ、本当です。嘘を言ってどうなりますか」

確かに、彼女ならばフィージがかばう理由は十分にある。今は巫女となり神に身をささげたが、もともとは彼の妹だ。その仲のよさは宮中にお墨付きで、フィージが時間を空けてはリコの元を訪れていることは有名だ。しかし、何よりもリコの悪い噂を聞いたことがない。それに、リコならばレオン自身もよく知っている人物だが、彼女がどういう人物かよりも今は巫女であることが問題だっ

た。

「けど、リコは……巫女だろう？」

「そうです。あなたもご存知のように、巫女は一日の大半を祈りの間で過ごします。巫女は神に身を捧げたもの。俗世の仕事ができるはずがありません。けれど……現に、リコから受け取った料理とお茶で王子は倒れてしまいました。リコから誰からもらったものか問いましたが、なぜかそこだけ記憶が曖昧なのです。それはすなわち

」

彼女の身を危険にさらすもの。

それだけは許せるはずもなく、フィージはやむなく隠蔽した。幸い、ルークが食事を取ったことを知っているのは自分だけだ。しかも、食事を取った直後ではない。ならば自分にも妹にも疑いはかからないだろう。

苦悩に顔をゆがめたフィージに、レオンがため息を漏らした。そのまま無造作にナイフをしまうと苦い顔で告げる。

「お前が妹をかわいがってるのはわかるが……ことがことなだけに黙っていられるとな。とりあえず、そのお茶は調べさせてもらうぞ」

「あ、レオン。お茶の葉からもあの時王子が食べた食事の中からも薬は見つかりませんでしたよ」

「……………なんだって？」

あっけらかんとした口調で悪びれもなくいうフィージ。思わずレオンは聞き返すが、フィージの微笑みは何を当たり前なことを、といわんばかりだ。先ほどの苦悩に満ちた声は演技だったのかと疑いたくなるほど飄々と続ける。

「私がそのまま放置しておくと思いますか？いくらリコがかわいくても、あの子が利用されているとわかったなら容赦しません。翌日に調べましたが、何も出ませんでした。……まあ、それもあつたら誰にも言わなかったんですが」

呆れ果てて脱力し、レオンは疲れたようにベッドの端に腰掛けた。一瞬そのよく動く口を縫ってやりたい衝動に駆られるが、恨みがま

しい視線でフィージを責めるだけにとどめる。

「お前なあ……そうならそうと早く言えよ。紛らわしい。口はよく動くくせに、肝心のところはしゃべらないのはいいい加減に止める」

「そうは言われましても……敵を欺くなら味方からと」

「状況を考える、状況を」

布団の上から一度フィージの腹あたりを半ば本気で殴り、怒りもあらわに立ち上がる。ぶつぶつと文句をつぶやくと、振り返りもせずには部屋を出た。

残されたフィージはゆっくりと体を起こす。何気なく窓の外を見れば、ぼんやりと輝く淡い月が目に入った。その光から視線をそらし、乾きかけている血を無造作にぬぐう。赤く染まった手の甲を自嘲気味に見つめ、困ったように笑った。硬く閉ざされた扉を見つめながら、ため息のように言葉を紡ぐ。

「レオン。申し訳ありませんが、私は誰も信用していません」

もう、長い長い付き合いであるあなたさえも。

「あの方を守るためであるならば……」

吐息にまぎれた言葉は、静かに夜の闇に消える。

言葉は誰にも届かない。ただ、闇だけが聞いていた。

翌朝、まだ日が昇ったばかりの時間に沙綾は目が覚めた。いつもと違うベッドで寝たせいだろうか。眠りが少し浅く、けだるい感覚が体を支配している。

「もう起きたのか？」

「ええ、なんとなく目が覚めてしまって……」

空はまだ薄ぼんやりと明るくなっただけだ。いつもならもう少し眠っているところだが、眠気は訪れない。それならばと起き出し、用意されていた水で手を洗う。

昨夜はフィージの部屋から戻るなり、緊張と疲れで着替えるまもなく眠ってしまった。頭に触れればところどころで髪がもつれ、顔

に触れた感触で肌が汚れていることに気づく。

「琳、私、ひどい格好をしていないかしら？」

「……家にいるときよりは、確かにひどい格好だな」

「やっぱり……。お湯を使わせてもらいたいなんて贅沢は言わないから、水をいただきたいわね」

自分の目が見えなくてもやはりそこは女心。できる限りの身だしなみは整えたいと思うのは当たり前だろう。

「香りの葉は持ってきていないのか？」

「そういえば……」

何気なく問われたことにはつととして布袋を探る。天に願いが届いたのか、はたまた沙綾の無意識からか、一瓶だけ香りの葉が入っていた。

「よかった……。琳、ありがとう」

きゅつと琳の首を抱きしめると、さつそく水差しから新しい水を器に注ぐ。その中に香りの葉といくつかの薬草を混ぜると、昨日切った傷口をもう一度開く。ちり、とした痛みを感じると、ぷくりと赤い玉ができた。それを水の中に入れば、なんともさわやかな香りがほのかに漂う。その出来ばえに満足して笑い、備え付けてあった化粧箱から櫛を拝借した。

もつれた髪を丁寧にすき流し、香水に浸した手巾で幾度も顔を拭う。それから首筋、腕と順に布を滑らせた。最後に髪を布で包みこめば、艶が増えてまるで絹糸のように滑らかになった。

「もう大丈夫かしら」

「大丈夫、いつもの沙綾だよ」

鏡代わりとなっている琳に尋ねれば、太鼓判を押したような返事が返ってくる。

ようやく人心地つき、さて着替えようかと服を手にした瞬間、沙綾は思わずため息をついた。用意されていた服は、沙綾の着たことがない形の服だった。着替えの服は持ってきておらず、昨日着たまの服ではさすがに居心地が悪い。

「困ったわ……。まさか琳じゃ手伝えないし……」

「さすがに沙綾に服を着せるのは難しいな。もう少し待ってから、誰か人をよんだらどうだ？」

「そうね、そうするわ」

あきらめて服を元に戻し、窓を開ける。心地よい風とともに、かすかな雨の香りが部屋を満たした。

「……夕風は大丈夫かしら」

今まで近くの町に出たことはあっても、必ずその日のうちに返ってきていた。夕風一人を残したことはなく、不安が沙綾の胸をふさぐ。

「夕風だつてたまには一人のほうが気楽かも知れないよ？」

「……そうね、ずっと私の面倒を見てもらっているんだものね。たまには羽を伸ばしているかしら」

くすりと笑った沙綾にほっとし、琳はその足元に擦り寄る。窓辺に押し付けられる形となり、沙綾は笑って琳の頭をなでた。そのまま床に座り込めば、甘えるように琳が顔をなめる。

「くすぐつたいよ」

くすくすと笑うが、なかなか琳は止めようとしない。そういえば、この香りは小さいころから琳の好きな香りだったなと思ひ出す。昔から、この香りをつけているときはまるで犬のように琳は甘えるのだ。

「琳は……帰りたくないの？」

琳の頭をぎゅつと抱きしめることでなめるのを止めさせ、沙綾は少しためらってから言葉を紡ぐ。

琳とであつたのはもう大分昔のことになる。いつも自分の傍らに寄り添ってくれる狼は、すでに沙綾の一部といつても過言ではないけれど、時々思う。琳は、かつて住んでいた場所へ帰りたくないのだろうか。

「私のいる場所は、沙綾の隣だよ。銀歌様に命じられたことであっても、私は沙綾が好きだ。だから、そばにいる」

少しだけ怒ったように沙綾の胸に頭を押し付け、白い指先を甘がみする。琳の気持ちがうれしいと同時に疑った自分をわずかに恥じた。

「ごめんなさいね。あなたは私の大切な家族。ずっと、ずっとよ」

いずれ、自分も琳とともに行くことになるだろう。あのお方の場所へと。けれども、そのときになっても決して自分と琳は今の関係を崩すことはないだろう。

「沙綾、そろそろみんな動き出したみたいだ」

琳がそういうと同時に、部屋の扉がたたかれる。一瞬迷ってからシヨールを羽織り、扉を開けた。

「おはようございます、お早いですね。今人呼びますので、もう少しお待ちください。ああ、王子が目を覚ましました。あなたのおかげです。心から感謝いたします。……まだ少し顔色が悪いですが、食事を取られるとのことなので、よろしければ同席していただけますか？ 嫌いなものがなければ同じ食事を用意いたしますが、いかがしますか？」

「おはようございます。えと……殿下が目を覚まされたのですか。薬が効いたようで、本当によろございました。それから……特に好き嫌いはありませんので、失礼に当たらなければご一緒させていただきますと思います」

フィージの話し方にも慣れたつもりではいたが、やはりいっぺんに問いかけると何から答えていいのか戸惑ってしまう。それでもどうにか笑顔で答えた。

「では、お二人の食事を用意いたしますので、もう少々お待ちください。なるべくあなたの姿を人目に触れさせたくはありませんので、不自由をかけてしまいますがお許してください。私の妹を連れてきますので、気兼ねなく世間話でもしていただければ。ああ、それとリン殿は何を食べられますか？」

「人と同じ食事は好まない。ミルクの入ったお茶だけもらえればそれで満足だ」

「わかりました。そうしましたら、リン殿にはそのようにしますの
で。もうしばらくこちらでお待ちください」

「お心遣い、ありがとうございます」

では、とフィージが出て行くのにあわせてパタンと扉が閉じた。
その後ろでほっと小さく息をつく。

「沙綾はフィージが苦手そうだな」

「苦手というか……何から話していいかわからなくなるわ」

淡い苦笑を浮かべ、緊張に乾いてしまった喉を冷たい水で潤す。
グラスをテーブルに置くと、控えめなノックが聞こえた。

「どうぞ」

「失礼します。お初にお目にかかります、リコと申します。しばらく
くサーヤ様の身の回りをお世話させていただきますね」

おっとりとしたしゃべり方は、兄のフィージとはあまり似ていな
い。けれど、かもしだす雰囲気はよく似ていた。そして、好奇心旺
盛な紅茶色の瞳も。フィージよりはやや遠慮がちに、それでも沙綾
と琳をじっと見つめる。その視線に淡い口調を混じらせて微笑み、
沙綾は軽くお辞儀した。

「はじめまして、リコ様。よろしくお願いいたします」

「まあ、私のことはリコと呼んでくださってかまいませんわ。敬語
も必要ありませんよ」

沙綾の丁寧な口調に驚いた表情を浮かべるが、次の瞬間笑う。そ
うすると、兄とそっくりになることに気づいたが、琳は賢くも沈黙
を守った。

「ええと……失礼に当たらないかしら？」

「ええ、もちろん」

「それなら……リコ、よろしくね」

ぎこちないがそれでも砕けた沙綾の口調に安心したのか、リコが
笑う。同じ年頃の少女と接した記憶がない沙綾には、少し新鮮な感
覚だった。琳に対する愛情とは違う、好ましい感情。うまく名前は
付けられないが、心地のいいその感覚は嫌いでない。

「まずは着替えをお手伝いさせていただきますね。昨夜はお着替えにならずに？」

「ええ、ベッドに横たわったらそのまま寝入ってしまったみたいで……」

「森からいらして、すぐに殿下を診て下さったのでしょうか？お疲れで無理ありませんわ」

「恥ずかしがるように沙綾が告げるが、リコは別段笑うでもなく真顔でうなずく。」

森までの距離は正確にはわからないが、かなりの距離があると認識していた。しかも、レオンに連れられてきたと聞いている。ということは、彼と同じ速度で駆けつけたのだろう。手加減されたとはいえ、相当負担がかかっているだろうことは簡単に予測できた。

「サーヤ様は珍しい形の服をお召しになられているんですね」

興味深そうに沙綾のいでたちを眺め、リコは人形遊びよろしく沙綾をいじる。手を上げさせたり後ろを向かせたりと、何事にも熱心になるところは兄そっくりだ。

「珍しい……かしら？」

沙綾にとってはごく日常的な服だ。幼いころから大きさは変われど、基本的に形は変わっていない。元々女性は子供にあまり手をかけられない一族であったため、彼女の服は人手のかからないローブのような形だ。

夕風はあれこれ世話を焼いてはくれるが、昔から自分のことは自分でする。それが沙綾の信条であるため、服を着るのにいちいち人手がいるのは好まない。そのため、ただ被って腰の辺りを帯でくるだけの、簡単なものだった。

「珍しいといえますか……もっと華やかな服をお召しにならないのですか？」

「私の仕事は薬草を摘んだり薬を煎じたりすることだから、綺麗な服は必要ではないの」

別段卑屈になった様子もなく、あるがままのことを当たり前のよ

うに言う沙綾。その素直というか純粹さに驚き、まじまじと沙綾を見つめる。

「合理的というか……着飾ることには、あまり興味がありませんの？」

「だって……綺麗なものは、見えないから……」

少しだけ寂しそうにつぶやかれた言葉。それにはつとして、失言に恥じる。

「ごめんなさい。……でも、こんなにお美しいのに、ものすごくもったいないですわ」

「沙綾は確かに綺麗だけど、リコも十分綺麗だ。それなのに、リコこそ着飾ったりしないのか？」

不意の言葉にぎょつとして、リコは足元に視線を落とす。不思議そうに自分を見つめる狼は、確かに恐ろしい牙を持っているが、その毛並みの美しさに、澄んだ瞳に恐怖はわいてこない。むしろ、この狼がしゃべることは当たり前のように思えた。

「あなたが『リン殿』ね。兄から聞いていたけれど、驚いたわ」
「あまり驚いていないような感じはするけど？」

面白がるような琳の言葉にくすりと笑い、リコはかがんで琳と視線を合わせる。深い紅茶色の瞳が琳の姿を映し、琳は一瞬心の中を見透かされるような感覚を味わった。

「私は巫女。神の言葉を聴くものよ。だから、狼のあなたがしゃべることには何の不思議もないわ」

「巫女……それなら、私のそばにいるのに差支えが……」

「お兄様とルーク様のお言葉ですから。それに、お世話といっても夜と朝の着替えのお手伝い、あとはおしゃべりをする事ですし、私はぜんぜんかまいませんわ」

心底沙綾と話せることが嬉しいというその口調に、ようやく不安が消える。ほんのわずかに自分の目が不自由なことを後悔したが、その後悔もリコの笑顔の前では長続きしなかった。

「ありがとう、リコ。改めて、よろしく願います」

「こちらこそ。そろそろ支度を整えないと、レオン様の雷が落ちそう」

くすくすと声を出して笑うと、綺麗にたたまれた藤色の衣装を手取る。広げて形を見ると、にこりと笑った。

「きつとサーヤ様によく似合いますわ」

出会い

4 出会い

背中の部分にクッションを山と積み、どうにか楽な体勢をとつてはいるが、ルークの顔色は相変わらずよくなかった。沙綾を今か今かと気を揉んで待っている、ようやくノックの音が聞こえる。

「遅かった」

乱暴にドアを開け、レオンは思わず絶句した。

美しい娘だと思っていたが、ただそれだけでしかなかった。王宮の華やかさばかり見ていた彼には、初めて出会ったときの印象はみすばらしく貧相。ただ、その一言だった。それがなんという変わりようだろうか。女は衣装と化粧で化けるというが、これは化けすぎだろうと内心つぶやく。

シンプルな藤色のドレスに身を包んだ沙綾は、神々しいという表現が一番ぴったりする。スクエア型に開いた胸元には一粒の濃い青透ける素材で作られた袖はぴったりと腕を覆い、きゅっとしぼった帯はふわりと後ろで大きく結んである。華やか刺繍が施してあるわけでもなく、大きな美しい飾りがついていないわけでもないが、逆にそのシンプルさが彼女の美しさを際立たせていた。

さらに、なにやらさわやかな香りが漂ってくるのではないか。最初は柑橘系の香りかと思ったが、どやら違う。森のような、夜のような、言葉では表現できない不思議な香りだ。あまり香水というものが好きではないレオンも、沙綾のこの香りは嫌いになれなかった。

「あの……？」

「あ、ああ。悪い」

一向に扉の前から動く気配のないレオンの耳に、困惑の声が飛び込んだ。はっと我に返ると慌ててよける。目の見えない沙綾のために椅子を引き、待つことしばし。リコが何か言う声が聞こえ、沙綾

が入ってきた。その姿にフィージもルークも目を見開く。

「大変お待たせして申し訳ございませんでした」

「ルーク様、レオン様。お久しぶりでございます」

沙綾の挨拶が続いてリコも挨拶をし、リコが席に着く。沙綾は琳を従えてまっすぐにベッドまで歩み寄った。

「サーヤ、殿？」

「はい。お初にお目にかかります」

ルークの前でドレスのすそを持ち上げ、誰も見たことない不思議な一礼をする。たぶん、彼女の一族独自のものなのであろう。皆が興味深そうに見つめた。そんな視線も気にせずに、沙綾はただルークがいるであろう方向をじっと見つめる。

「お体の具合はいかがでしょう？」

「少しだるくて、食欲はあまりないかな」

元気なふりを装ってはいるが、ルークの声には張りが無い。沙綾は視線をそらし、床に膝をつく。手探りでその手をとると、脈をはかり腕に触れ、一言断りを入れて首に顔に触れた。

「微熱がありますね。脈も少し乱れています。後で薬を煎じさせていただきますね」

一通りルークの状態を見終わると、ふわりと安心させるように微笑んだ。軽く目礼を残してようやく席に着く。そして改めて言葉を吐く。

「大変お待たせしてしまって申し訳ございませんでした。皆様、だいぶお待ちになられたのでは？」

「だって、サーヤ様はほんとにお綺麗なんですもの」

沙綾の心苦しそうな言葉にかぶさるように笑うリコ。どうやら遅くなった原因は彼女にあると見て、フィージがあきれたようにため息をついた。

「リコ。姫君で遊ぶとは何事だ」

「あら、遊ぶだなんてそんな……。ただ、お兄様が用意されたドレスに見合うアクセサリを捜していただけですわ」

なるほど、確かによくよく見れば沙綾は控えめなアクセサリーをいくつかつけていた。

一番目立つのは首に飾られた深い青のサファイアだが、髪に隠れた耳には小ぶりの花形をしたピアス、髪には真珠の粉がきらめいている。

「……確かに年頃の女性に贈るには物足りないものでしたね。失礼いたしました」

まじまじと沙綾の姿を観察すると、フィージは素直に自分の非をわびた。リコの見立ては正しく、アクセサリーをつけていたほうがより上品に、華やかに彼女を見せる。

「そんな……こんなに上等なドレスを用意していただけただけで十分です」

恐縮したように沙綾が答えれば、フィージはただ柔らかな微笑で返す。そして話題を変えるように声の調子を軽く上げ、不機嫌なレオンをちらりとみた。

「さて……レオンがそろそろ空腹に限界を訴えていることですし、食事にしましょうか」

そういい、自らグラスに水を次いで回る。ルークには気を利かせて白湯を供し、遅い朝食が始まった。和やかな食事の最中、リコは率先して沙綾の世話を焼く。どうやら兄から頼まれた以上に沙綾が気に入ったらしい。あれこれと食事の説明をし、時には手を出して沙綾を喜ばせた。

「お兄様、どうしてサーヤ様を姫君と呼ばれるのですか？」

ふと、リコが何気なく口にした言葉。その瞬間、場が緊張感を帯びる。それに気づいてリコが戸惑うが、穏やかなルークの声が場を和らげた。

「それはね、リコ。彼女が偉大な薬師の一族だからだよ」

「偉大だなんて……そんな……」

かすかに恥じるようにうつむくその姿は愛らしく、知らず緊張していたリコもほっと肩の力を抜く。そして納得したように笑った。

「そうですね、ルーク様を助けていただいたんですもの。サーヤ様は本当にすばらしい薬師ですわ」

心からの賞賛にさらに頬を染め、それでもうれしそうに礼を言う。ふと、その様子を見ていたレオンが何か思い出したように口を開いた。

「そっぴや姫さん。無事にルークを助けてもらったことだし、報酬をはらわねえとな。依頼人は俺だ。俺にできるものならなんでもいっしてくれ」

「そうですね、正当な代価を支払わないと……。薬師は慈善事業できるほど甘いものではありませんからね」

フィージもレオンの言葉にうなずき沙綾を促す。当の本人は軽く首をかしげ、困ったように笑った。ちらりと足元の狼を見れば、狼も同じように当惑しているのがわかる。

「申し訳ございませんが、報酬は受け取れません」

「何だって？」

思わず聞き返したレオンに、フィージ、ルーク、リコまでが沙綾を凝視した。彼らの中では、正当な報酬を受け取らずに仕事をするという考え方はない。

「私たち薬師の一族は、以前は報酬を受け取っていたらしいのですが……。もう、一族も私一人になりました。夕凧と琳と、三人で暮らしていくぶんには、そんなたいそうなお金がかかるわけでもありません。幸い近くの村の方から好意で食料をいただきますし、薬草は畑や山で取れます。なので、お金の必要性がありませんのです」

「そっぴはいつてもなあ……。一応、契約を交わしたからには何か報酬を支払わないとこっちの都合が悪い」

苦笑とも取れる笑みを浮かべてレオンがいい、それならとフィージが口を開く。

「しばらく滞在していただく間に、何がほしいか考えていただいたらどうでしょう？もちろんお断りになるときは姫君には申し訳ないですが、私たちで決めさせていただきます」

よろしいですか？とフィージが確認を取れば、沙綾よりも先に琳がうなづく。沙綾に物欲があまりないことを知っているためだ。

「それでいいんじゃないか？沙綾は特にほしいものもないだろう？」

「ええ、そうね……。夕風になにか買っていつてあげることくらいかしら？」

愛らしく小首をかしげ、真顔で言う沙綾。その純粹さに皆が思わず微笑んだ。

「そうしたら、ルークの体調がよくなるまでここに滞在してくれ。少し不自由な思いをさせるかもしれないが……」

「ご心配には及びません。お気遣い、ありがとうございます」

「サーヤ様には私が不自由させませんから、ご安心ください」

につこりと至極楽しそうにリコが続け、笑いを誘った。そんな和やかな雰囲気の中、ただ一人ルークだけはわずかに表情を曇らせている。体調不良というよりも、何か気がかりなことがあるといった風だが、誰にもそれはわからなかった。

朝食が終わり、リコと連れ立って沙綾は部屋に戻る。他愛のないおしゃべりを楽しんでいると、琳が少し不思議そうに問うた。

「リコ、なんで沙綾のことをサーヤって呼ぶんだ？」

「それはですね、都に住む人と発音が違うからですよ。なんていうんでしょう？サーヤ様もリン様も独特の発音というか……私たちには難しいんです」

リコ自身もどう説明していいかわからないらしい。沙綾も琳も、彼女らの名前が自分たちとは違うことに気づいていたので、そう深くは考えなかった。

コン コン

会話の切れ間を狙ったように、控えめなノックが響く。沙綾が立

ち上がろうとしたところを制し、リコが応じた。

「はい」

そつと隙間から伺うように扉を開け、相手を確認する。フィージからなるべく人前に沙綾を出さないようにといわれていたことと、この美しい客人と自分の会話を邪魔されるのは嫌だと感じたためだ。隙間から伺えば、そこにはよく慣れ親しんだ相手の姿が見える。

黒髪なのに、星の光をまぶしたように時折やわらかく輝く髪。ありきたりな自分の蜂蜜色の髪に劣等感を持っているリコにとって、羨ましくもありほんの少しだけ妬ましくもあるが、相手は嫉妬する対象にはならない。なぜなら、尊敬すべき師であり、男性なのだから。

「アンジュ様。どうなされたのですか？」

「あなたがお世話をしている客人にご挨拶をと思ひまして」

アンジュに沙綾のことを告げたのは自分だ。フィージから言い付かったことで、しばらく教会に行くことはできないと。ただそれだけを伝えた。それはもちろん、尊敬する師であるこの人に心配をさせたくないという一心で伝えたものだ。フィージの許可はもらっていなかったが、彼に黙って沙綾の世話をするのは難しい。ほんの少しの罪悪感があったが、彼ならばいいだろうとリコは良心をなだめた。

ふと、何か違和感を感じる。何故兄に黙っていたのだろうか？別段兄に話しても構わなかったのではないか。

けれどその疑問はすぐに深いところに沈み込み、リコは一瞬の後に違和感を感じたこと事態を忘れてしまう。

「ご挨拶、ですか」

リコは少しだけ迷ってから、あわせるだけならば問題ないと納得する。何も、彼女の素性を洗いざらい 自分もそこまで知っているわけではないが 話すわけでもない。ただ尊敬する師である神官に紹介するだけだ。

そう言い聞かせ、にこやかに微笑んだ。

「どうぞ、お入りください」

自ら扉を開け、アンジュを招く。アンジュも穏やかな笑みを浮かべて中に入った。そして、その表情が一瞬こわばる。

「アンジュ様？」

「……綺羅……？」

突然立ち止まったアンジュに疑問を投げかけるように名前を呼ぶが、返事は返ってこない。

小さな呟きは誰の耳にも届かずに、ただ驚きとも困惑とも取れる沈黙が落ちていくだけだ。

「どうかなさいましたか？」

「……いえ、なんでもありません。ただ少し……そう、日の光がまぶしくて」

自分でも苦しいいい訳だと思いつつも、唇を滑り落ちた言葉は取り消せない。しかし、リコは言葉通りには受け止めずに笑った。

「本当に、沙綾様がいらつしやると一段と光がまぶしく感じられますね」

無邪気で純粹なりコの性格を、今回ばかりは心底神に感謝する。

だが、リコの言葉も一概に間違っではない。彼の人も、月光の下では女神のように美しかったのだから。

懐かしさがこみ上げてきて、一瞬目の前の景色が消える。そこは深い森の中。円形の広場で、神の娘が踊る。やわらかく響く竖琴の音と高く澄んだ笛の音が混ざり合い、微かな衣擦れの音と娘の手足についた鈴がなる。なんと幻想的な空間。その神の娘に、自分は

「お初にお目にかかります。沙綾と申します。この子は琳。怖そうに見えますが、おとなしいので、どうぞご安心ください」

過去にはせた想いを断ち切ったのは少女の言葉。はつとして陽だまりにたたずむ少女を見る。そんな神官に沙綾は安心させるように微笑んだ。その表情に何かを懐かしむように目をすがめ、彼女の前に立ち止まる。

「初めまして。アンジュと申します。あなたに、神のご加護があらんことを」

深く一礼をしてリコにすすめられるままに席に座る。その足元に琳が近づくが、アンジュは恐れる風もなくその頭をそつとなでた。「賢い子ですね。銀色の獣は月の神の僕といいます。どうぞ、大切になさってください」

「ありがとうございます。この子は、私の大事な家族です」

琳がおとなしくなでられているなら何も怖いことはないはずだ。なのに、胸がちりちりする感覚がさつきから消えない。

うまく表情に出ないように隠し、リコの気配を探す。その仕草に気づいたのか、リコが声を出した。

「お茶の準備をしますね。サーヤ様もアンジュ様も、どうぞおくつろぎになってお待ちください」

にこやかに告げ、足取りも軽く部屋を出る。ためらいのないリコになんともいえない感情が胸に宿るが、それを押し隠してアンジュに声をかけた。

「アンジュ様はカーシャ様をお奉りしていらっしゃるのですか？」

「ええ。昔は銀歌様をお奉りしていたのですが、カーシャ様の恵み深さに改宗いたしました」

「そうだったのですか……」

何も、おかしいところはないはず。改宗することはそうそうあることではないが、珍しいことでもない。

でも、何かが引つかかる。

「沙綾殿は生まれつきお目が……？」

「いえ、六つのころまではちゃんと見えていました。……事故に、巻き込まれてしまいました」

「それは……さぞかし大変な思いをされたでしょう。今まで見えていたものが急に見えなくなるのは、とても恐ろしいことです。何事もなく健やかに育ったのは、きっと神のご加護があったからでしょう。……お名前の発音から、銀の信仰をなさっていらっしゃるので

しょう?」

「ええ……。家族が……一族が皆、銀歌様を信仰していますので……」

月の神とあめられる銀歌は、長い銀の髪と黎明の瞳を持つといわれている。銀の竖琴を持ち、足元に銀色の狼を従えた男性像で描かれ、そのことから銀歌を信仰するものは銀の信仰をしているといわれる。

逆に、金の信仰といわれるのは太陽神カーシャを奉ったものだ。波打つ金の髪に湖の瞳を持つ豊満な女神。金色の杖の上に金色の鷹を従えた姿で描かれ、豊穡を司る神だ。

銀歌とカーシャは双子の兄弟とも恋人とも言われているが、それを確かめるすべは誰にもない。

「そうですね……。一族が銀歌様を奉っていたのですね。あなたのお姿は、銀歌様に愛されたような姿ですね。母君に似られたのですか?」

「母様……。も、銀の髪で……。父様が、銀歌様と同じ黎明の瞳で……。私は、どちらの血も受け継いで、性別以外は……。銀歌様に似ていらつしゃると……」

ぼうつとしたような口調で、沙綾は神官の問いに答える。いつもはいさめるはずの琳も何も言わずに、ただおとなしくアンジュの足元に伏せていた。

昼間なのに、なぜか薄暗く感じる気がする。もちろん、闇に閉ざされた沙綾の瞳に光は映らない。いつも見ている闇と、どこか違う感じがぬぐえずに、それでも答えるのが当たり前のような気がして言葉をつむぐ。

「母様は、巫女でした。父様は、かななぎ覲でした」

「……母君のお名前は?」

「母様の名前は、綺羅。その名前のとおり、子供の私から見ても……とても、とても綺麗な人でした。優しく、舞と歌がとてもお上手で……父様は、その隣でいつも竖琴を奏でていらつしゃいました」

暗闇に、幼いころの光景が浮かぶ。

深い森の中、月光に照らされた広場で母が踊る。銀歌にささげるための神楽舞を。その横で、父が豎琴を奏でる。母のために、銀歌のために。

幼かった自分は、一番前の特等席でその様子をいつも楽しそうに眺めていた。母の躍る姿は好きだったし、父の奏でる音色は耳に心地よかった。大きくなったら母と一緒にこの広場で踊ると。両親は共に優しく見つめてくれていた。

柔らかな月光が、一転して禍々しい紅に変わる。ちろちろと蛇の舌のような炎が舞い上がり、静かな森に悲鳴と怒声が響いた。わけもわからずに、炎からただ一心に逃げた。琳の銀色がすすと焼け焦げに黒く染まる。

涙でにじむ視界に父と母を捜すが、見つからずに。

何か怖いものが迫ってきた。見たこともない銀色の人間たち。銀色は美しく優しい色のはずなのに、人間たちが見につけている銀色はただ恐ろしかった。炎の照り返しで赤く染まっていたからかもしれない。

「あ……ああ……」

振り下ろされる刃。

舞い散る血と悲鳴。

銀色の髪。

「母様……！」

そこから途切れた記憶。

気づいたときには暗い闇の中にたった一人で座り込んでいた。

「沙綾殿」

少し低い、聞いたことのない声が自分を呼んでいる。いや、聞いたことのある声。

「あ……」

相変わらずあたりは闇に包まれている。けれども、この闇を自分は知っている。長年慣れ親しんだ、銀歌の住まう闇だ。

「私……？」

「大丈夫ですか？ ぼんやりしていたかと思ったら、突然悲鳴を上げまして……」

「……アンジュ、様。……何か、恐ろしいものを見ていたような……」

まだぼんやりする頭で考えるが、永い一瞬の間に見たものか思い出せない。きゅっとこぶしを握り、頭を軽く振る。沙綾が不安なときはいつも安心させてくれる琳も、今ばかりは何の応えもなかった。「お待たせしました。……アンジュ様？ サーヤ様？ どうかなさったのですか？」

明るい声と共に扉が開き、元気よくリコが入ってくる。二人のおかしな様子に気づき、茶器を置くと慌てて駆け寄った。

「サーヤ様？ 大丈夫ですか？ 顔色が……」

「どうやら白昼夢を見られたらしいです。お加減がかんばしくないようなので、私はこれで失礼します。リコ、沙綾殿を頼みましたよ。どうぞ、お大事に」

軽く一礼を残して部屋を出ると、アンジュは薄く笑う。そうして、間違いないと確信する。

「ようやく見つけた」

まぶたの裏に浮かぶのは、長い銀の髪の女性。いつも微笑みを絶やさずに、誰にでも平等に接してくれた。そう、自分のように穢れた存在にも。彼女こそ、神に愛された女性だ。

「綺羅……」

薄暗い闇の中に、ただ静かに声は消えていった。

想い

5 想い

そろそろ日課になりつつあるノックの音が今日も聞こえた。毎日決まった時間に三回なるノックの音。

「どうぞ」

明るい声で沙綾が声をかけると、ミラとレイの二人が姿を見せた。二人とも沙綾同様表情は明るい。彼女がルークを助けたことを知っているため、最初の険悪さはすでになくなっていった。

「お嬢ちゃん、今日はちよつと待たせたか？」

ずかずかと遠慮もなく沙綾に近寄ると、くしゃくしゃとその頭をかき混ぜる。その後決まってリコに怒られるのだが、沙綾はその仕草がうれしくて仕方がない。もう二十を目前に控えていたが、子供のように扱われることが少しだけ心地よい。身近に男性がいなかったせい、レイを年の離れた兄のように感じるときがある。

「リン、お土産だよ」

最初は琳を敬遠していたミラだが、琳がとても賢いことに気づくと、いつも何らかのお土産を持って帰ってきた。

柔らかい栗色の髪の毛に、穏やかな若草色の双眸を持つ彼は、その優しい風貌から女性受けがいい。その人脈を使い、厨房から琳が好む木の実のパンやクッキーをよくもらってきていた。ちらりと琳が視線を上げると、今日のお土産は鮮やかな色をしたかぼちゃのクッキーだと判明する。

「ミラもレイも、いつもありがとう」

もう一週間ほど経つだろうか。沙綾が望んだ報酬は、毎日夕風に手紙といくばくかのお金を渡してきてもらうことだった。もうあまり若くない夕風に、力仕事は辛い。琳がいるときは琳と沙綾が手伝っていたが、彼女一人ではなかなかかどらないことも出てくるだ

ろう。よく近隣の村人に手伝ってもらっていることから、彼らを雇う代金をルークに請求したのだ。

「今日のお土産は姫君にもあるよ」

そういつて差し出された袋には、夕凧からの手紙と足りないと思われる薬草、それから沙綾が好むお茶の葉だった。

「このお茶……」

懐かしいとも感じるお茶の香りに胸がいっぱいになり、沙綾は袋ごと抱きしめる。そしてそっと手紙を開けば、沙綾にしか読めない方法で手紙は記されていた。

昔、まだ目が見えずに苦労していたときに教えてもらった文字を読む方法だ。そっと指でなぞれば夕凧の優しい声が耳に響く。何事も変わりはないこと、ミラとレイがよく手伝ってくれること、沙綾が納得するまで治療に専念するようにと細やかな気配りがあった。

「いつも夕凧を手伝ってくれていたのね。どうもありがとう」

手紙から顔をあげ、微笑んで礼を言う。二人からは当たり前だという言葉が返ってきたが、沙綾にはそれで十分だった。

「夕凧が作るこのお茶、すごくおいしいの」

ためらいがちにお茶でもどうかといえば、真っ先にミラが賛成する。それに続いてレイもうなずき、それならリコを呼ぼう、いやいや、どうせなら皆でとたちまち人数が増えた。そうして結局のところ、一時間後にルークの部屋でお茶会という形に落ち着く。今ではルークもだいぶ調子は戻ったが、まだ執務のほとんどは自室のベッドの上で、という状態だ。油断は許されない。

いったん解散となった沙綾の部屋は少し寂しく、それが高ぶった気持ちを逆に落ち着けてくれた。

「琳、夕凧は元気だって。村の人もよくしてくれるから安心してって」

「それはよかった。ルークの容態も安定しているし、もう三日もすれば家に帰れるな」

「そう……ね。後は薬をしばらくの間置いていけば大丈夫だと思う

わ。食欲もずいぶん戻ったみたいだし、安静にしていれば大丈夫ね」

「なら、今日皆が集まったときにでも言うか」

「それがいいわね。……ねえ、琳。レイとミラに、お別れがいえな
いけれどもこのままでいいの？」

琳がしゃべれることを知らないのは、レイとミラの二人だけだ。

二人とも琳が賢い狼だとは認識しているが、誰も琳がしゃべることを話していない。てつきり彼らの上司に当たるレオンが話しているかと思っただが、どうやら何も話していなかったらしい。

「ふむ……それは少し寂しいものがあるな。彼らにはよくしてもらっている。……沙綾は話してもいいと思うか？」

「ええ、夕凧が安心して任せているようだから、何も問題はないと思うわ」

「それなら、今日は少し会話に加わろう」

済ました顔でそういうが、琳がその会話を楽しみにしていることはその尻尾が証明していた。

一時間後、沙綾が入れたお茶とリコがもらってきたクッキーでさ
さやかなお茶会が始まった。レイとミラはルークとも親しく、皆の
間に主従関係の堅苦しい感じはない。

「おいしいお茶ですね。さわやかなのに苦味が少ないし、かといっ
て甘すぎるわけでもない。ミントが入っているんですか？ すつきり
した感じがしますね。どこでとれたお茶ですか？」

さっそく知的好奇心もあらわにフィージが沙綾に問うた。沙綾は
笑って乾燥した茶葉をフィージに渡す。

「自家製のお茶です。私は家でしか飲んだことがないものなんです」
「珍しい形ですね。ミントのようにも見えるけれど、それよりも
う少し小さいですね。何かのブレンドですか？ いや……一種類です
ね。この種はありますか？」

「今はないですけども、家に帰ればありますよ」

くすくすと声を出して沙綾は笑い、その横でレオンとリコは呆れ顔だ。

「お兄様だったら……珍しいものを見るとすぐに何か探りたくなるのは悪い癖だわ」

「たまには研究抜きで物事を考えられねえのか？」

「私は単純に珍しいものが……」

ムキになって言い返そうとするが、ルークの朗らかな笑い声にさえぎられた。これは完全に分が悪いと黙り込む。悔し紛れにクッキ―をほおばり、おやと首をかしげた。

「リコ、このクッキーは誰が作ったものかわかるかい？」

「え？ええと……たしか、調理場のアクアだったかしら」

小首をかしげてリコが答えると、なるほどとうなずいてもう一枚食べる。どうかしたのかと皆がフィージを注目すれば、彼は笑ってなんでもないと答えた。

「いつも食べているものより甘くないなと思ひまして」

「そついや、フィージは甘党だったな」

ふと思ひ出したようにレオンがそつづばやくと、意外だったのか視線がいつせいにフィージに集まる。それに苦笑し、なんとなく言い訳がましく言う。

「頭を使う仕事は、何かと疲れるんですよ。糖分摂取は仕事の一環です」

「それはフィージの好みだろう？私もどちらかというと頭を使う仕事をしているが、甘いものはそんなに食べないからね」

すかさずルークが少し意地悪く言えば、フィージは言葉に詰まった。言い返す言葉を搜しているうちに、リコの声が割り込む。

「お兄様の負けですね。ほんと、女の私よりも甘いものがお好きなんだから」

あきれたようにそういうと、いつせいに笑いが起こる。さすがに多勢に無勢、フィージはおとなしく降参することに決めた。と、そのとき。控えめなノックの音が耳に届き、場が一瞬にして静まる。

レオンが立ち上がろうとするのをレイが制し、すつと音もなく扉に歩み寄った。その仕草はさすがに剣をたしなむもので、大柄な体軀とは思えない。

ルークの私室ということで帯剣していないことをわずかに悔やむが、そんなことは顔に一切出さずに扉越しに声をかけた。

「誰だ？」

「えと……シドです」

少しだけおびえの混じった幼い少年の声。一同あっけにとられ、ルークが笑ってうなずいた。

「お一人でいらしたんですか？」

「だって、誰かに言ったら兄上に会えないもの」

シドと名乗った少年がするりと猫のようにしなやかな動きで私室に滑り込む。まず体を起こしたルークを見つけ、心底うれしそうに笑った。それからぐるりと見渡し、琳と沙綾を興味深そうに見る。

けれど視線は一瞬で、迷いもなくルークの元へ駆け寄った。

「兄上、目覚められて本当によかった」

「心配をかけたね」

ぎゅつと抱きつくその姿は、ルークとは似ていない。ルークが明るい金の髪に対してシドは赤みを帯びた茶色、その瞳もルークの不思議な碧の瞳とは違う澄んだ空の蒼だ。けれども、まとう雰囲気はさすが兄弟といおうか、幼さが残るがもう少し年を重ねればルークそっくりになるであろう。

「母上が兄上に会ったらいけないって……。病気がうつるからって」
そんなことないよね？と熱心に瞳で問いかけると、ルークはもちろん、とうなずく。シドの少し癖のある髪を優しくなでると、ちらりと腹心のものたちに視線を投げた。真っ先に気づいたのはミラで、席を立つとシドの元へ歩み寄る。

「せっかくシド様もいらっしやっただから、どうぞこちらへ」
すばやくルークの意味を解し、一番扉から席が遠い席、すなわち自分の席をシドに譲る。彼は黙ってやってきたとのことだったので、

いつ何時誰が入ってくるかわからない。ルーク同様、皆がシドを愛している。この愛らしい少年を傷つけることはなるべくしたくなかった。

ちょうどミラの席は沙綾の真向かいに当たるため、シドは珍しい客人を存分に見ることができた。けれど、彼が何か口を開く前に、当人がゆつくりとシドの前に来る。そして以前と同じように不思議な一礼をすると、シドの目線にあわせるように膝を突いた。

「お初にお目にかかります、沙綾と申します。ルーク殿下の弟君でいらっしやいますね？よく似ていらっしやいますね」

にこりと笑顔で告げられた言葉に、シドも他のものも首をかしげた。外見的特長としてはまず二人は兄弟に見えない。それもあるが、何より沙綾は目が見えないはずだ。何を持って似ているのだろうと。「ルーク殿下もシド殿下も、纏う雰囲気と申しますか……それがそっくりなのですよ」

皆の疑問を解消するように沙綾が言葉を紡ぐ。なぜわかったのかと不思議がる彼らをよそに、もう一つの声が補足するように聞こえた。

「沙綾は目が見えないから、人それぞれ特有の雰囲気とか、気で人を区別する。外見はまったく似ていないが、確かに二人は兄弟だな」人間とは違う構造をした器官から発せられる声は、少しだけくぐもっている。けれど聞き取りにくいということはない。初めて琳に会うシドはもとより、しゃべることを知らなかったミラとレイはぎよつとしたように狼を見つめた。そんな視線には慣れた琳は、別段気分を害するわけでもなくその豊かな尻尾を一振りする。

「君の名前は？」

幼さゆえか、恐怖よりも先に好奇心が勝つたらしい。恐々と琳の頭をなでながら、シドが尋ねる。

「この子は琳。私の大切な家族です」

琳の変わりに沙綾が返事を返し、そのあごの下を軽くくすぐる。気持ちよさそうに目を細める琳に恐怖心は消えたのか、シドも同じ

ように琳をなでた。

「さすがシド様……。リン様になれるのも早いですね」

くすくすと小さく笑いながら、リコがレオンに耳打ちする。レオンも苦笑を刻みながらうなずき、子供は柔軟性があるとひそかに考える。

神に仕える少女はともかく、自分も友人たちも琳がしゃべるたびに驚き緊張したものだ。それを、子供はすんなりと打ち解けている。見習うべきかと思ったが、さすがに年を重ねすぎていると打ち消した。

「リコ、シド様にもお茶を」

「はい」

フィージに言われ、隣室から予備のカップを手にとってくる。入れたてのお茶をシドに差だし、ついでにクッキーも皿に取り分ける。

「ありがとう」

渡されたクッキーをうれしそうに口に運び、蜂蜜をたっぷり入れたお茶を堪能する。その弟の仕草に微笑をもらし、ふと気づいたように沙綾に視線を投げた。

「そういえば、サーヤ殿はいつまでここに？」

「そろそろ殿下の容態も安定されてきたので、明後日には帰りたいと思います」

「明後日？それはまた早急な……」

「寂しくなりますわ」

口々に言うが、沙綾はうれしそうに、そして少しだけ寂しそうに言葉を紡ぐ。

「夕風を一人で残していますし、何より……ここは私のいる場所ではございません」

ふわりと微笑んだその儚い表情に、一瞬目を奪われる。どこかに消えてしまいそうな、どんな表情。そんなことはありえないはずなのに、彼女に関してはそういうきれずに。

「サーヤは、帰っちゃうの？」

ふと、幼い声が沙綾を呼んだ。せつかく仲良くなれると思ったのにと、シドは見るからに沈んだ表情をしている。沙綾はシドのまだ小さいとさえ言える手をそつと握ると、ふわりと微笑んだ。

「きつとまたお会いできますよ。お呼びいただければ、いつでも「本当に？」

「ええ、本当です。琳もシド殿下にお会いしたいといつてますから」「シドは賢い。私を見ても泣かずにいた強い子だからな」

沙綾の言葉を肯定し、琳が柔らかな尻尾を一振り揺らす。その仕草にシドはうれしそうに笑った。

「約束だよ」

「ええ、お約束します」

シドの明るい笑顔と沙綾の穏やかな微笑に、ようやく一同落ち着いていたように息をついた。そこですかさずリコが、

「お茶が冷めてしまいましたね。もう一度入れなおしますわ」

にこやかにティーポットを手にする。そうして、夕方の執務の間までお茶会は続いた。

雨がしとくと音もなく降っている。森の葉はみずみずしい緑をぬらし、柔らかな土には水溜りが点々とできている。

「もうそろそろ、お戻りになるころかしら」

窓の外を眺めながら、夕風は小さくつぶやいた。

思えば、沙綾と一緒に暮らすようになってから彼女とこれほどまでに離れたのは初めてかもしれない。まだ七つの小さな少女が、あつという間に大きくなった。

「……ひいさまは、立派な薬師になりましたよ」

そつと服の下にかけられたペンダントに話しかける。大振りの金飾りは開くように細工され、中には美しい女性の似せ絵が入っていた。

日の光が当たらないせいか、色あせもなくまるで本人をそのまま写し取ったようだ。銀の髪に、銀の瞳。沙綾をもう少し大人にしたら、きつと瓜二つになるだろう。ただ違うのは、その髪が緩く波打っているところと瞳が輝いているところだけだ。

似せ絵には、もう一人描かれていた。銀の髪に、黎明の空を映した瞳。穏やかな表情で女性と寄り添っている。

「綺羅様。皓貴様。今のひいさまを、お見せしたいくらい……」

そこで言葉を詰まらせると、思わず浮かんだ涙をそっと拭い取る。また元通りにペンダントを戻すと、気を変えるように大きく被りを振った。

ふと、外から微かな物音が聞こえる。こんな雨の日に、まさか森の奥深くまで物取りでもあるまいしと怪訝な顔で扉を開けた。

「どなたですか？」

そこにいたのは、見知らぬ青年。黒いフードを被り、顔はよく見えない。けれど、何か違和感を感じて夕風は眉をひそめた。

「お久しぶりですね」

「誰……まさか……」

聞き覚えのある声。穏やかで、一見優しく聞こえるがその奥に潜むのは冷笑。驚愕に目を見開く夕風に、青年の口元がゆるくつりあがった。

「まさかこんなところにいるとは……。思いもしませんでしたよ」

「お前は！……なんでこの場所を知って？」

怒りと憎しみに、一瞬夕風の視界が真っ赤に染まる。けれども一つ息を大きくすい、落ち着きを取り戻す。

「あの方の子供は、私がいただきます」

「まさか……沙綾に……」

「ええ。お会いしましたよ。本当に……綺羅にそっくりで驚きました。……憎らしい相手の血を受けた双眸は、濁っていましたね。これも銀歌様のお導きでしょう」

「汚らしい！その口で綺羅様と銀歌様のお名前を口にするな！」

はき捨てるように言うと、夕風はきつい眼差しで青年を見る。しかし青年はそんなことを意に介した風もなく、余裕とも言える表情だ。

「あの子をこんな森深くにおいておくなんて、もったいないですよ。銀の姫だけが受け継ぐあの力も、彼女の美しさも。すべて、私がもらいます。もう、国王も長くないですからね」

「まさか……すべてお前が……」

「ええ、そうです。ただ、沙綾に会えたことは奇跡とも言える偶然でしたがね。あの晩、銀の一族は絶えたと思っていましたから」

自ら犯した罪をなんとも思っていないどころか、どこか喜んでい
る風にさえ聞こえる口調。その恐ろしさにめまいを感じ、夕風はよ
ろけるように一歩後ずさる。その隙間を埋めるように、男は一歩前
に出た。

「いいことを教えてあげましょう。あの子は、私が誰か気づいてい
ませんよ。そして、あの子の父親を殺したのは、私です。あの晩、
騒動にまぎれてね」

「あ……皓貴様を……」

目を見開き、その事実硬直する。そんな夕風を優しいとさえ思
える仕草で男は抱き寄せた。その手に、銀の刃を持つて。

「安心して綺羅の元へいつてください。沙綾は私が責任を持って妻
に迎えますよ。綺羅と同じあの子を、ね」

「……！」

ごぼり、と喉元から熱い何かがせりあがってきた。彼女の血が男
を汚す前に、ずっと手を離す。まるで人形のように転がった女を無
表情に眺め、ただ一度だけ目を閉じた。そのまま、雨の中をゆっく
りと歩き出す。

「ぎ……か……さ、ま」

残された夕風は、薄れ行く意識の中で必死に彼女があがめる神の
名を呼んだ。悔しさに涙がにじみ、床をぬらす。

「……ど、う……か」

どうか、どうか。

愛しいあの子が真実を知って悲しみませんように。
どうか、どうか。

あの子が苦しみを背負いませんように。

「……きら……さ……ま……」

今からあなたの元へ逝きます。

ようやく、あなたの元へ。

最期の頼みを聞き届けられなかった私を、どうか……

思うとおりに動かない指先で必死に胸元を探る。震える手でペンダントを開けると、似せ絵の笑顔を目にふわりと微笑んだ。

そのまま、夕凧の体は動かなくなる。

それからどれくらいの時がたったのか。音もなく降り注いでいた雨がいつの間にか止み、空には丸い望月がかかっていた。と、月光が地上の一点へ収束する。その光は人の姿を形作り、きらきらと輝く影になった。

「哀れな子よ……」

影は夕凧の頭を優しくなでる。不思議なことに、夕凧の傷口はふさがり流れた血は綺麗に消える。そのままでは、まるで眠っているかのような。

「まだそこにおるのか……」

ふと視線を転じれば、ぼんやりとした淡い影が漂っている。その影に手を差し伸べると、影は生前の面影を残した、若い女性の姿にかわった。

「あの子は大丈夫。私が必ず守るから、安心おし」

涙ながらに何かを伝えようとする女性を安心させるように微笑む。その微笑にほっとしたのか、女はようやく笑顔を浮かべた。そして深々と頭を下げる。

「さあ、お逝き。お前の待ち人が待っているよ」

すっと影が月を指差した。その瞬間、月光が淡い橋の姿に変わる。女性はその橋に向かって歩き出し、ちょうど真ん中でぴたりと止ま

った。何か探すようにあたりを見回し、泣き出しそうな表情をする。
「わかった。一時だけ行っておいで」

影が仕方なさそうに息をついて許可の言葉を出すと、女は至極うれしそうに笑った。そしてずっとその姿が消える。それを見送ると、影はふわりと微笑んだ。

「あの子は愛さているようだね。かわいい子。お前はまだ安心できないのか？」

「まだまだ、安心なんかできませんわ。あの子が無事に大人になって、私の元へ来る日まで……」

そこには影以外何もいなかったはずだが、つぶやきに答えるように柔らかな声が響いた。その声を予想していたように、影はそうかとうなずく。

「あの子が悲しまないように……あの子が涙を浮かべないように……」

ただ、それだけを私は望みます……

女性の声が消えると同時に、影の姿も音もなく消える。そこに残されたのは、安らかな沈黙だけだった。

ふと、沙綾は人の気配に目を覚ます。あたりの静けさからまだ朝には程遠い時間だろう。なんとなく目が冴えて眠れずに、むくりと体を起こした。

「沙綾？ どうした？」

少しだけ眠たそうな琳の声が聞こえるが、それには答えない。ただ何かを探すようにきよろきよろと首をめぐらせる。

「沙綾？」

さすがに琳も不審に思ったのか、立ち上がると身軽にベッドに登った。そして真正面から沙綾の顔を見る。その表情はどこか泣き出しそうな、不安な色を濃く映し出していた。

「ばあやが……夕凧が……」

「夕風が？」

それだけつぶやくと、唐突に沙綾は立ち上がる。迷いもなく窓際によると裸足のままテラスへ駆けでた。その後ろに続く琳は、訳がわからずに軽く混乱する。

「沙綾！どうした？」

「ばあや！」

琳の言葉をまったく聴かずに、沙綾は暗闇に手を伸ばした。すると、その先に淡い光がとる。もしかしたら目の見えない自分だけに見えた幻想なのかもしれない。それでも、その光が夕風であると、なぜか直感的に沙綾は気づいた。

「ばあや……。どうしたの、何があったの？」

知らずこぼれた涙に声がかすむ。けれど光は何も答えることなくただふわりふわりと沙綾の周りを漂った。そして琳の元へ近づく。

『琳様。どうか、どうか、ひいさまのことをよろしくお願いいたします。ひいさまが泣かないように、どうか、どうか』

「夕風……」

ぺたりと耳を伏せ、琳はうつむく。そうして、理解した。彼女は最期の願いを自分に託すためにきたのだと。

「安心しろ。沙綾は私が守る」

琳の声に安心したようにちかちかと数回瞬き、やがて光は薄くなる。そのまま闇に溶けるように消えた。

「これは？」

夕風が消えた後に何か光るものが落ちている。不思議に思った琳が歩み寄り、沙綾の手元に運ぶ。

「何かしら……」

手に触れた感じでは、冷たい硬質のもの。丸くて鎖がついていることから、ペンダントだと気づく。形を確かめるように触れていると、不意にはかりとペンダントが開いた。

「綺羅と皓貴だ」

「え……？」

開いたペンダントにはめ込まれていたのは、精緻な似せ絵。色あせもなく、当時の姿そのままに。

「母様と父様？」

そつと指で絵の部分なぞるが、平らな紙に描かれたものは沙綾には感じる事ができない。せめてもう一度その姿を見たいと願うが、沙綾の瞳は相変わらず闇に閉ざされたままで。

「母様……父様……沙綾は……」

ひつく、と小さくしゃくりあげ、それを機に涙があふれて止まらない。大好きな人がどんどんいなくなり、やがて独りになってしまうのではないかという恐怖に体が震える。

「沙綾……」

琳はかける言葉が見つからず、そつと静かに寄り添う。無言で少女の横に座り、ひたすらその涙が止まるのを待つ。闇に落ちた沈黙の中、ただ沙綾のすすり泣きだけが響いていた。

やがて啜り泣きが消えるころ、沙綾のかすれた声が微かに響く。

「……明日、朝に帰るわ」

帰って、夕風を眠らせてあげないと。

そうつぶやく彼女の瞳に涙はない。だが、傷ついたガラスのように双眸はきらめいている。それが哀しみ故のものと知っていても、琳には美しく思えた。その感情を振り払うように一瞬き、うなずく。

「明日は早いよ。今日はもう眠ろう」

そつと誘うように沙綾の足元に寄り添い、琳はベッドの上に丸くなった。その暖かい体を抱きしめ、沙綾は目を閉じる。

眠気は一向に訪れなかったが、何も考える気になれずにただ闇を見つめていた。

「……琳、覚えている？」

「うん？」

「初めて、出会った日の事」

沙綾の言葉にふと、想いを過去に寄せた。そうすれば、まるで昨

日のことのように思い出せる。確かあれば、まだ自分も少女も幼かった日のこと。

深い森の中、まだ悲しみを知らずに微笑んでいた少女。初めて彼女を見たとき、琳は驚きに目を見開いた。主人が寵愛を贈った娘であることが一目で知れて。

「あなたはだあれ？」

静かな湖面に花畑が広がり、その中で少女は一人遊びをしていた。色とりどりの花で冠を作り、首飾りを作り、確か花束を作っていたときのことだったと思う。

「沙綾……か？」

「うん、そうだよ。あなたはだあれ？」

同じ言葉を二度繰り返し、黎明の瞳でまっすぐに自分を見ていた。狼が怖くないのかと考え、ふと改める。そういえば、彼女は生粋の銀の一族だ。怖いはずがあるまいと苦笑した。

「私の名前は琳」

名乗り、ゆつくりと少女に近づく。少女は怖がるでもなく、りん、と舌足らずに呼んだ。そうして自分の頭に乗っていた花冠を取ると、琳の頭に載せる。その行動はさすがに予想外で、琳は驚いたように立ち止まった。

「りに、あげるの。お友達だよ」

そういつてにこりと笑ったその顔に魅せられた。もしかしたらそれは自分を創った主の想いなのかもしれない。それでもいいと思う。純粹に自分を慕ってくれる少女を好きになったのだから。自分でそう感じているだけで、それだけで満足できる。

夕暮れまで沙綾と琳はそこですごした。少女は無心に花で遊び、琳は時折尻尾を揺らしながらその様子を眺める。ただ、それだけの時間が至極幸せだった。

「そろそろ帰らなきゃ。りんは？」

「私は……」

ふと、言葉に詰まる。帰る場所はもちろんある。けれど、主人の元へは一人で帰ることができない。かといって、少女の元へ一緒に行くにはまだ早い。彼の御方ならばためらわずに琳を迎えてくれるだろうが、自分がこの子の元へと来るのはもう数年先のはずだ。

「帰ろう?」

そんな琳の葛藤を知ってか知らずか　たぶん、無意識だろう

沙綾はごく自然に手を差し出した。帰ろうと。

それは、ある意味琳にとっては衝撃的だった。主人が帰ろうというのは当たり前のこととで、それ以外に琳に手を差し出す存在は今までいなかったのだから。

「りん、おうちに帰ろう?」

につこりと微笑み、沙綾は当たり前のようにもう一度告げた。そうして、琳はうなずく。

その背に沙綾を乗せて「家」に帰ると、当然のように驚きが待っていた。出迎えた夕風と皓貴は目を丸くし、ただ一人綺羅だけは微笑んでいたことを覚えている。

「今日から家族になるわね。よろしく、琳」

「家族?りんも一緒?」

母に抱きつきながら沙綾は期待に満ちた眼差しで綺羅を見る。綺羅はもちろんとうなずき、家族、という言葉にただ自分はきよんとした。

家族って、何だろう?

「りん、ずーっとずーっと一緒だよ」

心底うれしそうに笑顔を振りまき、幼い少女は狼に抱きつく。抱きつかれた琳はなぜか湧き上がる暖かい気持ちのままに、少女の頬をなめた。最初驚いた沙綾は、それがうれしくて楽しくて、きつくきつく抱きしめる。幼い力ではただ抱きつかれてるようにしか感じなかったが。

それから何年も時がたち、色々なことを見て、経験してきた。悲しみも喜びも二人で分かち合い、家族として過ごしてきた。きっと、沙綾に子供ができて孫ができて、自分はそのまま何も変わらぬままこの子と共にすごすのだろう。そんな確信に近い想いが琳の胸にはあった。

「琳、ずーっとずーっと一緒だよ」

幼い日と同じ言葉が耳に届き、ふと我に返る。気づけば沙綾の頬はまた涙にぬれていた。

「大丈夫だ。私はどこにも行かないから。ずっと、ずっと沙綾の傍にいるから」

何よりも孤独を恐れる子供。

あの日、すべてを失ってようやく笑顔を取り戻したというのに。その笑顔を奪ったものに、琳は初めて殺意に似た憎しみを抱いた。すべてを失った日は、まだ幼すぎて。憎しみよりも喪失感が強く、こんな感情は知らなかった。

「沙綾、眠りなさい。傍にいるから」

「……うん」

塩辛い涙をぺろりと舐め、琳はあやすように尻尾を揺らす。ぱたり、ぱたりと規則正しく揺れる尻尾に、いつしか沙綾は眠りに落ちていた。

ちようどそのところを見計らったようにふっと光の残像が室内に現れる。

「我が主」

そつと沙綾を起こさないように離れると、琳は床に座る。軽く頭を下げて主に敬意を示す。その頭をそつと撫でると、銀歌は音もなく沙綾の元へ近づいた。

「たくさん、泣いたか……」

すつと沙綾の頬を撫で、腫れてしまったまぶたに指先を当てる。赤くなつたまぶたは本来の色を取り戻し、幾分か沙綾の寝顔も楽に

なつたように感じる。

「お前をこの子に託したのは正解だったようだね」

主人の意図がわからずに琳は軽く首を傾げるが、言葉を紡ぐことはしない。そんな琳にふつと小さく笑い、もう一度琳の頭を撫でる。
「かわいい子。私の愛し子を慰めておくれ。この子はまだ一人で歩くには幼すぎる。……私の元へ来るにも、もう少し時間が必要だよ」
長い永い時を独りで過ごしているんだ。もう少し待っても、何も変わらないよ。

「我が君……。あの時、私を止めなかったのはわざとでしょうか？」

あの時。初めて沙綾とであった時、琳は銀歌に内緒で彼女の元へいったのだ。本来ならばもう数年先に銀歌とともに会おうはずだった少女。主人が寵愛を与えた娘を、ただ一目見てみたかった。

「ふむ……。そう思うならば、そうであろうな」

「……はぐらかさないでください」

「おや、ようやくと大人になったかい？」

「我が主」

からかうばかりで答えをくれない主人に狼が低くうなる。その様子でさえかわいいと思うのか、銀歌はただうれしそうに笑った。

「お前が思うとおりに行動してほしかったのだよ。私の傍にいるだけでは、お前に本当の幸せは訪れないからね。かわいい子。私はお前の幸せを願っているのだよ」

「……私は……」

戸惑うように視線を揺らめかせ、琳はうなだれる。けれど、銀歌は微笑むばかりで言葉を紡がない。まるで、狼が自分の意思で言葉を紡ぐのをまっているかのように。そんな主人に、狼は意を決したように口を開いた。

「私は、我が主を敬愛しております。私を創ってくださいましたそのことを、何よりも感謝しております。そして……沙綾にめぐり合わせてくださいましたことを、それ以上に感謝しております」

「いい子だね、琳。そう思ってくれることが、何よりもうれしいよ。」

……私はまだ、沙綾を愛することができないでいるからね。私が愛したのは綺羅であって、沙綾ではない。……綺羅と私の血を受け継いだこの子を愛おしいと思う。けれども、それだけなんだよ。……琳、私の分以上にこの子を愛してあげなさい。いつか、この子が私の元へくるそのときまで。……もしも、私がこの子を愛して上げられなかったとしても……お前の愛情は、きつとこの子の力になる」
寂しそうに告げる銀歌。その葛藤と悲しみを感じ取り、琳も切ない思いが胸によぎる。

生まれたときから自分のものになるはずだった彼の娘。確かに自分のものになったはずなのに、彼女もすべてが自分のものだそういったはずなのに、解ってしまった。彼女は自分のものであって、自分を愛していないのだと。

正確にはわからない。けれど、自分以上にあれを愛しているのだと、解ってしまった。彼の娘が自分に向ける愛情は、あれに向ける愛情とは違う。違いすぎる。それでも 彼の娘を愛している。

「私は、自分が神であることを心底呪わしいよ」

神でなければと何度願っただろうか。何度、人の身になるうかと思っただろうか。だが、それはできない。してはいけないこと。だからせめて、彼女の血を欲した。自分と愛しい娘の血を受け継いだものならば、愛せるだろうか。

けれども、まだ愛する娘の面影が離れずに。死してなお、自分のものにならない彼の娘。それでも、娘が愛おしくて。いつか、少女が大人になったならば、自分は少女を愛することができるのか

「我が主……私は……」

「何も言わなくていいよ。ただ……私のかわりに愛しい子を愛しておくれ」

「 仰せのままに」

銀歌の指先がもう一度沙綾に触れ、そのまま琳の頭に触れる。頭をたれた狼を優しく愛撫し、銀歌の姿は夜の闇に消えた。

銀歌が完全に見えなくなると、琳はするりと沙綾の腕の中にもぐりこむ。そのぬくもりを感じると、わずかながらにほっとする自分に気がついた。

「沙綾……。ずっと、ずっと傍にいるよ」

たとえば、愛するこの子が我が主の元へ行こうとも。

事件

6 事件

翌日の早朝。まだ朝もやが立ち込める森を二頭の馬と一匹の狼が先を急いでいた。はやる気持ちを抑え、濡れた地面に足をとられないように急ぐ。

見慣れた家が見えてきた。一週間程離れていたただだったが、なぜだかひどく懐かしく思える。

「夕風……？」

玄関先に倒れている人影。その姿が見えたわけではないだろうが、沙綾は反射的に走り出した。その前を琳が走り、扉に着く前に沙綾の足を止める。そして彼女が触れるその前に、琳はすばやく夕風の体を見回した。

「沙綾……」

「ばあや！」

琳が名前を呼ぶと沙綾は弾かれたように夕風にすがりつく。昨夜流しつくしたと思った涙は、また溢れ出す。

「ばあや……」

冷たくなったその頬にふれて髪を撫で、優しく体を抱きしめる。

沙綾より少し背の高い老婦人は安らかな表情だ。

「綺麗なもんだな」

二人を気遣ってかゆつくりときたレオンは、夕風を見てそういった。その穏やかな表情を見ていったのか、清められたその体を見ていったのかはわからない。ただ一度、夕風に死者への礼を尽くす。

「沙綾。夕風を眠らせてあげよう」

「……ええ」

うなずき、夕風を抱き上げようとしたがさすがに小柄な少女には無理があった。たたらを踏んだ沙綾をレオンが背中から支え、かわ

りにひよいと抱き上げる。

「ありがとう」

朝早くに黙って出て行こうとした沙綾と琳に気づいたのは、レオン一人だけだった。正確には偶然厩で出会っただけだったのだが、二人の表情から何かに気づき、無言で同行してくれた。その優しさが沙綾にはうれしかった。

「庭に」

言葉少なにそう告げ、琳と沙綾が先導する。

そこは、沙綾が好んでよく眠っていた場所。大きな大木の下に。琳がスコップをもつてくると、レオンと沙綾は無言で穴を掘り始めた。琳も何も言わずに手伝う。そうして、大人一人入れる位の穴が掘り終わると、レオンがそっと壊れ物を扱うように夕凧を寝かせ

る。

「ばあや……ありがとう。お母様とお父様によろしくね」

震える声でつげ、その額に唇を落とす。名残惜しむように一度頬を摺り寄せ、沙綾はきびすを返した。一瞬迷ってからレオンがおいかけ、それを見送ってから琳はじつと夕凧を見つめる。眠っているようなその表情に、心から銀歌に感謝した。

「絶対、あの子を一人にしない。私が守る」

低くそうつぶやくと、沙綾の足音が聞こえた。振り返れば、夕凧が大好きだったあかるい色の花を腕いっぱい抱えている。

「ばあや、大好き」

もう一度夕凧にキスをする、沙綾は夕凧の体全体に花をかぶせていく。花だけでは飽き足らずに、雪のような花びらを降らせて。あふれる涙をそのままに、優しく土をかぶせていく。やがて夕凧の姿が完全に隠れると、その場にへたりと座り込んだ。

「琳……どうしようね」

まだ、夕凧との思い出が残る場所にいるのは辛い。庭のあちこちに、家の全てに楽しかった思い出が残っているのだから。

ふと、地面についた手に柔らかな花びらが触れた。そっと壊さな

いように指先で触れると、ひらひらと柔らか感触。花卉は細かくたくさ、きつと色は鮮やかな黄色だろう。

「タンポポ……」

種が飛んだのか、もう時期も終わるといふのにけなげに咲いていた。

「タンポポは……薬にもなるからって……」

まだ幼いころ、タンポポの柔らかな花が好きでたくさんつんだことがあった。それを夕風は優しく諭した。

『ひいさま、タンポポは薬にもなるともすばらしい花なんですよ。かわいらしい花ですが、無闇とつんではいけません』

せっかく喜んでもらえると思ったのにとしょげていたら、夕風の柔らかな手のひらがほほに触れる。そつと慈しむように自分のほほをなで、こつりと額をあわせた。

『でも、夕風のために持つてきてくださったのですね。ありがとうございます。花壇に植わっている花も美しいですが、やっぱり自然に咲く花は力強く輝いていますね』

「ばあや……」

くつと唇をかみ締め、紗綾は優しくタンポポの花を指先でなでる。そして硬く目を閉じ、あふれる涙をこらえた。すると、戸惑った気配のままレオンがそつと近づいてくる。地面に片ひざをつき、紗綾の頭にこわごわと触れた。

「姫さん……泣きたいときは思い切り泣いたらいい。そんな……辛い顔してこらえるな」

健気に涙を飲み込むその姿は、母の姿を思いださせる。父が長く家を空けるときは、必ず必死に涙を飲み込んでいた母。幼いながらも、自分は母にこんな顔をさせてはいけないのだと思ったことがある。

姉は女で、男は自分と父しかない。だから、早く母の涙を受け止められるようにならなければいけないと、そう思った。

「リン」

尻尾をたらしめている狼の名前を呼び、レオンはじつと澄んだ瞳を見つめる。そして琳がうなずくのを確認すると、足音もなくそばを離れた。

「紗綾」

「り、ん……夕風、も、ば、ばあやも……っ、う……ふっつ、ああっ！」

琳の首にしっかりと抱きつき、艶のある毛並みをぬらす。涙を流すことができない狼は、ただじつと紗綾が抱きつくに任せていた。声の限りに涙を流し、その涙が泣きじゃくりに変わるころ。ふらりとレオンは戻ってきた。その手には湯気のたった暖かいお茶。

「勝手に作らせてもらったぜ」

少しだけ申し訳なさそうな顔でそういうと、目を真っ赤にした紗綾にカップを渡す。かすれて声が出せないのだろう、恥ずかしそうにうつむいて一口飲んだ。

「落ち着いたか？」

カップの中身が半分ほどになるころを見計らって、レオンが言葉をつむぐ。ほっとため息を漏らし、紗綾は顔を上げた。

「ええ……ごめんなさい、ありがとう」

「姫さん。行く場所がねえなら、城にこないか？ ルークもまだ万全ってわけじゃねえし、一度……陛下に会ってもらいたい」

「陛下……国王陛下に？」

「ああ。それに……姫さんをもしかしたら巻き込んでしまったのかもしれねえしな」

ぼそりとつぶやくようにいうと、ちらりと横目で狼を見た。琳はその視線を受け止め、思案する。

「そうだな。紗綾、しばらく王宮にしよう。ここは……もしかしたら、危険かもしれない」

「どういうこと？」

「狙われたのは、夕風じゃなくて紗綾だったのかもしれない」

琳が告げた事実、紗綾ははっと息を呑む。こんな深い森の中に

来る人間は、迷い人かよほど酔狂な人間か　もしくは、誰かに会いに来た人物以外いない。琳が何ものか知っているものはいないので、琳は除外される。夕凧が自分かどちらかといえば、限りなく自分に可能性が高いだろう。

「そう、ね。……王宮へ」

沙綾がうなずくと、どこかほっとしたような複雑な表情でレオンは立ち上がった。二人をおいて先に馬の元へ戻る。

「準備もあるだろうし、先に戻ってフィージに伝えておく」

「お願いします」

レオンの表情には気づけずに、琳と沙綾はレオンを見送った。

それからしばらくの後、王宮へついた二人は厩でレオンに迎えられた。初めてきたときと同じように人目に付かない通路を通される。待っていたのは、フィージとルークの二人。

「レオンから大体状況はきました。今日はお疲れでしょう。どうぞゆっくりお休みください。部屋は王子の向かいに用意させていただきました。隣はレオンと私の部屋になります。ここならば賊の進入はまず無理です。安心してください」

「……お心遣い、ありがとうございます」

静かに一礼を返すと琳を伴い沙綾は部屋を出た。その姿を見送り、三人は深刻な顔を付き合わせる。

「ルーク。陛下とあわせたほうがいいと思う」

「父上に？……そう、かもしれない。フィージはどう思う？」

「……彼女には真実を知る権利があります。そして何より、夕凧を殺害したのは間違いなくあの夜の出来事が関係しているでしょう。あの晩の出来事は、陛下が一番詳しいはずです。しかし……陛下の容態を考えると……」

二人の意見に瞑目し、ルークは浮かない顔でため息をつく。父と直に話をすることはたぶん必要だろう。父には話をしなければなら

ない理由がある。しかし、その理由を知ったとき彼女は思うか。
「私は……父上に会っていただくべきだと思う。しかし、フィージの言つとおり父の体調はおもわしくない。無理にならなければいいが……」

「それなら、私が陛下にお伺いいたしましょう」

悩むルークにフィージは告げる。本人が許可を出せば確かに沙綾は確実に彼に会うことができるだろう。一瞬瞑目し、ルークはうなずいた。

「そうだな。後で頼むよ」

彼女は、己の父が犯したおろかな過ちをどう思うだろうか。

軽蔑するか、憤るか。 絶望するか。

「もう、過去のことですよ」

ルークの気持ちを察し、フィージが言葉を紡ぐ。確かにそれは事実だ。けれども、それは一部の人間にとってのみ。

「……私たちにとってはな」

重苦しい沈黙が降りたとき、扉がたたかれる音がした。弾かれたようにレオンが扉に向かい、声をかける。

「誰だ？」

「リコです」

なじみのある声にほっと息をつき、レオンは扉を開けた。簡単な食事の載った盆を持ったりリコは、兄と王子の表情に首をかしげる。

リコはまだ何が起きたのか知らない。そして、この先の話を彼女はまだ知るべきではない。そう判断すると、誰かが口を開くより先にフィージが言葉を紡いだ。

「リコ、向かいの部屋にサーヤ殿がいる。昨晚、サーヤ殿の乳母殿が亡くなられた。何か温かい飲み物を持っていつてあげてくれないか？」

「まあ……すぐに行きますわ」

兄の言葉に目を丸くし、リコは一礼をして部屋を飛び出す。純粹に沙綾が好きなリコは、彼女が悲しんでいるのを知っていてもたっ

てもいらなかったのだろう。扉が閉まる音を聞いてから、フィージは隣室へ消えた。少ししてからお茶の乗った盆を持って戻ってくる。

「陛下にお話を伺ってからどうするか決めましょう」

フィージの一言でその話は打ち切りとなった。あまり明るいとはいえない表情で、フィージがお茶を入れる。

「王子、少し食べておかないと……。まだあなたの体調は万全ではないのですから」

「……そうだな。私が倒れてしまったら、彼女も危ないだろう」

あまり食欲はないのか、浮かない顔でそれでもパンを一つつまむ。幸いチーズがたっぷり練りこんであるパンはルークの好物だった。それがせめてもの救いと思いながら、一口二口。飲み込んだ瞬間、ルークの手から食べかけのパンが落ちた。

「ルーク？」

最初に気づいたのはレオン。しかし、気づいたときには遅すぎた。顔をなくし、椅子から転げ落ちるように床に倒れる。

「ルーク！」

「王子！」

フィージとレオンの悲鳴が重なり、それを見計らったかのように扉が勢いよく開いた。色白の貌をさらに蒼白にし、シドが駆け寄る。

「兄上！」

「シド様？なぜここに？」

「姫さんと呼んでくる」

シドをフィージに任せると、レオンは開いたままの扉を飛び出す。問答無用で向かいの扉を開ければ、リコと沙綾が不安そうな貌で待っていた。

「ルークが倒れた。たぶん何かの毒物だと思うんだが……」

「すぐに行きます」

先ほどのどこか魂の抜けたような表情から一変し、沙綾は薬袋をもってルークの元へ駆け寄った。先導する琳に従い、ルークの横に

座る。脈を取り、顔や口内に触れるうちに沙綾の顔色が変わった。

「何を食べたのですか？」

「これを……」

フィージが差し出したパンを受け取ると、においをかぎ軽く口に含む。その瞬間吐き出し、手探りで手繰り寄せたお茶で口をすすぐ。同様にルークの口にお茶を含ませ何度もすすいだ。

「水と桶を一つください。それから急いでベッドを整えて。どなたか、殿下の口を十分にすすいでください」

ただ見ていることしかできない彼らに指示を出すと、自分は薬袋の中身を床に広げる。一瞬の迷いもなく数種類の瓶を選び、琳が運んできた未使用のカップに中身を入れた。

「水だ」

急いで持ってきたのだろう。ポットの周りがまだ濡れていたがそんなことはまったく気にもせず受け取る。少量の水をカップに注ぐと、袋の中から細身のナイフを取り出した。

「姫君？」

真っ先に気づいたフィージが訝る横で、沙綾はためらいもなく手のひらを傷つける。流れ出る赤い液体をカップに落とし、さらに水を注いだ。

「どいてください。一刻を争います」

フィージとレオンが守るようにルークの隣にいる。彼らに険しい視線を投げれば、気おされたように道を開いた。ルークを前にして、沙綾は一瞬ためらう。けれどそれは瞬きする間のことで、すぐにカップの中身をあおった。

「待て」

沙綾の意図を察し、レオンが制止をかける。しかしそれを無視する形でルークに薬を流し込み、無理やり飲ませる。その瞬間びくりとルークの体が跳ねた。すかさず体をひっくり返すと、頭を支えて桶を口元にあてる。あまり食べていなかったのだろう。嘔吐は短く、すぐに終わった。苦しそうにあえぐルークの背中をなだめるように

たたき、そつと首筋の辺りを指圧する。すると、もともと意識の混濁していたルークは、すぐにまた気を失った。

沙綾の手際のよさに誰も何も手出しできずに、ただ見守るだけだった。どこか苦い表情をしているレオンとフィージに琳は気づくが、素知らぬふりで沙綾のそばに控えている。まるで、何かあったらすぐに守れるようにと。沙綾はそんなことにはまったく気づかずに、当たり前のように告げる。

「もう大丈夫です。あとは水をたくさん飲ませて休ませてください。その間に薬を作りますので」

ほつとしたように沙綾が言つと、全員の視線がいつせいに彼女に集まった。そして、その視線の意味に気づく。

恐れ。

不安。

わずかな畏敬。

自分たちとは違う生き物を見つめるその視線にさらされることを、何度も何度も経験してきた。

沙綾は流れ出る血を止めることもせずに、ただ静かに一つ瞬いた。怒りも悲しみもない。わずかな諦めが光を失った双眸に浮かんでいる。

皆が何か問おうと伺っていたが、湖面のように凪いだその姿に何も言わずにリコが立ち上がる。

「どれくらい水を飲ませたらよろしいのですか？」

「ティーポット一杯分を」

「わかりました」

ぐつたりと意識を失っているルークの頭を膝に乗せ、汚れた口元を丁寧にぬぐう。先ほどよりも格段に顔色のよくなった彼にほつとし、リコは慎重に水を飲ませた。

「沙綾。口をすすぎなさい」

「……ええ」

心配そうな琳の声に、沙綾は無理やり微笑んだ。琳が押しやった

ティーカップで口をすすぐが、顔色があまりよくない。

「姫君。王子を助けていただいてありがとうございます。申し訳ございません、私たちは何をすべきか、あなたが何をされているのか何もわからないのです。一瞬でも疑ったことをお許しください。手のひらの傷は大丈夫ですか？」

「傷はたいしたことありません。大丈夫です。……こちらこそ、取り乱してしまつて申し訳ございませんでした」

いくら一刻を争う事態とはいえ、一人で急ぎすぎた。そのせいで、余計な不安を彼らに与えてしまったことは薬師として恥ずべきことだろう。軽くうつむいて唇をかみ締め、後悔の念にまぶたを閉じる。けれどそれも一瞬のことで、顔を上げた沙綾はいつものとおりだった。

「薬を作りますので、殿下を休ませてください。それから……部屋を……申し訳ございません」

「そんなこと気にしなくていい。それより、姫さんの体は大丈夫なのか？」

「……先ほどの薬は、嘔吐を促す薬です。少量でも強い力が働くので。……大丈夫です。少し休めばよくなりますから」

「……そうか」

本人にそういわれてしまえばレオンに紡ぐ言葉はなくなる。心配そうな顔でうなずき、それでも沙綾に言われたとおりルークを抱き上げ隣室に運んだ。その後ろにリコと促されたシドも続く。

「姫君もどうか、隣室へ」

「え、え。でも……もう少しだけ」

どうやら、立ち上がるのも辛いらしい。顔色が一段と悪くなり、呼吸がわずかに荒い。

「先ほど王子に飲ませた薬は、本当に嘔吐を促すだけのものですか？」

不意にフィージが沙綾に問いかける。詰問するようではないが、どこか厳しい口調。嘘は許さないという意志の強さに沙綾の体は知

らず震えた。

幾度か唇を湿らせ、何かを探すように瞬きを繰り返す。

「……………正確には、違います。薬となる毒を飲ませました。それによって嘔吐します。……薬は、今の薬だけでなく、すべての薬は、量を間違えれば簡単に人を死に導きます。私たちが薬と呼ぶものは、すべて毒になりうるのです」

世間一般に流布している常識には、薬が毒になるという発想はない。それは限られたごく一部の人のしか知らないこと。それが悲しく、もどかしく、沙綾は唇をかみ締めた。

「……………わかりました。あなた御ご自身はどうなのですか？」

「私は……………耐性がありますから。少し休めばすぐに治ります。……」

……………怒らないのですね」

「怒る？なぜ？」

「結果的に薬になるとはいえ、私は大切な殿下に毒を飲ませました。それを、怒らないのかと」

目が見えているはずはないのに、まっすぐに自分を見つめる少女。今までただ綺麗としか認識していなかったが、その瞳の奥に暗い闇があることに気づく。その闇はまだ表に出てはいなかったが、いつか噴出すことを少女は解っているのだろう。だから、ぎりぎりですれを抑えている。

「あなたは間違えなかった。王子は生きている。その事実があるのに、何故怒るのですか？」

子供を諭すように笑いを含んで告げると、沙綾がまじまじとフィージを凝視した。その視線には、不思議でたまらないと表情いつぱいに告げられ、思わず微笑んだ。

「あなたは、一度王子を助けてくださいました。そして、自ら毒であると知っている薬を含んで王子に飲ませてくださいました。そんなあなたに、礼を言えども責めるべき言葉などありません。ありがとうございます」

「……………どうぞ、殿下の下へ。私もすぐに参ります」

沙綾は戸惑ったようにフィージを見つめ、やがて視線をはずす。うつむいたまま促せば、否といわずに彼は部屋を出た。

静かに涙をこぼす沙綾に寄り添い、琳は血の流れ続ける手のひらを舐める。ふしぎと血はすぐに止まり、それでも舐められるくすぐったさに、幾度も響くフィージの言葉に少女は微笑んだ。

「琳……初めてだね」

「そうだな」

毒を飲ませたと正直に言っただけで怒らなかった人は。

毒になると知っても礼を言われたことは。

「今までずっと嘘をついてきたけど、あの人は怒らなかった。私、すごく嬉しいの」

「苦しかっただろう？」

「すごく。でも、本当のことを言うともっと苦しいから」

何度も人を助けてきた自分の業。それでも、真実を知ると皆が皆必ずといっていいほど怒りを少女にぶつけた。たとえ助かっても助からなくても。

助かれば偶然とみなされ、助からなければ毒をもったと怒鳴られ。助かる見込みがあっても、彼女の作った薬を飲ませずに助けられなかったこともある。それもすべて彼女の責任にされた。

やがて少女は嘘をつくことを覚えた。正確には、嘘ではなく真実すべてを話すことを止めた。そうすれば、誰も怒らない。だれも怒鳴らない。けれど、そのことが澱のように心にたまっていく。人を救うことができず嬉しいはずなのに、なぜか苦しくて苦しくて。

薬師は、裏を返せば毒を扱う生業。加減を間違えれば確かに誰でも簡単に殺すことができるだろう。事実、一族を抜けてそのような生業を営むものもいる。けれど、覚えておきなさい。私たちの薬は命を救うもの。決して命を奪うものではないことを。誇りを持ちなさい。薬師の一族であることを、命を助けることができることを。

幼いころに何度も何度も聞かされた長老の言葉をふと思い出した。

そうして、自分はその言葉のとおりに誇りを持って仕事を続けてきた。だから、きっと彼はありがとうといってくれたのだろう。

「さあ、もう一つ薬を作ろう」

「ええ。救けるために」

薬師として恥ずかしくない仕事を完遂するために。

沙綾が隣室へいくと、皆が不安そうにルークを見守っていた。顔色はだいぶよくなったとはいえ、容態はかんばしくないのが明らかにわかる。

「お待たせいたしました」

沙綾自身もまだ顔色はあまりよくなかったが、背筋はぴんとのび、その口調にはためらいが一切ない。どこか神々しいとさえ感じるその姿に、皆がしらずに安堵する。

沙綾はティーカップに入れた薬をそっとルークに飲ませた。何事もなく嚥下してくれたことにほっとし、一人ひとりを見つめるように首をめぐらせる。

「もともと体力のあるお方です。きっと、今夜には目覚めるでしょう。今はゆっくりと休ませてください」

「それなら、場所を変えましょう。リコとシド様に伺いたいことがあります」

フィージがそう告げ、先導して歩く。その後にはぞろぞろとついていくと、シドが心配そうに後ろを振り返った。それに気づいた琳が、沙綾の隣を離れてシドの横につく。

「大丈夫だ。沙綾の薬はよく効く。すぐに目覚めるよ」

「……うん」

言葉少なにうなずき、琳のふわふわした頭を軽く撫でた。先に待っていた沙綾に足早に追いつくと、きゅっと手を握る。

「兄様を、助けて」

「必ず。お約束します」

沙綾の変わらぬ笑顔にほつと安堵の息を漏らし、部屋の外で待っていた皆に追いついた。

フィージにつれられて、彼の部屋へといく。思い思いの場所に皆が座るのを待ってから、フィージが口火を切った。

「シド様。どうしてあのとき、王子の部屋へいらっしゃったのですか？」

「母様が……話しているのを聞いたんだ」

それは、偶然のことだったという。ルークのことを聞きに母の元へ訪れると、中から何か話し声がした。低くてもう一人の声はよく聞こえなかったが、確かに母はこう言った。

「これでルークは終わりかの。前の眠り毒は失敗したが、今回おんしの渡した毒は確かよの？」

「……も、いません……かです」

ただ一言それしか聞こえなかったが、それで十分だった。常々兄を嫌っていた母が、とうとうここまでするとは思わなかった。そして、眠りの病も母が仕組んでいたことを知り目の前が暗くなる。しかし、ここでぼんやりしている時間はない。急いで兄の下へ向かわなければ。

「急いできたけれど……結局間に合わずに……」

唇をかみ締め、シドは必死で悔し涙をこらえる。

母はどう思っているか知らないが、自分は兄が大好きで、王位なんていらないと。そう思っている。けれど、自分の意志が弱いために大切な兄を危うく死に追いやろうとしてしまった。それが悔しくて仕方がない。

「その証言をしてくれただけで十分間に合う。ルークを助けられる」

「レオン……本当に？」

「ああ、もちろんだ」

自信あふれるレオンの言葉にシドは嬉しそうな笑みを浮かべた。それと対照的に、リコの顔色はどんどん青ざめていく。小刻みに震える手をしっかりと組み合わせ、神に祈るように目を閉じた。

「リコ。言いたいことはわかるね？」

「……はい、お兄様」

フィージと同じ澄んだ紅茶の瞳を涙で潤ませ、リコはこぶしに力をこめる。そうしなければ、声が震えてしまいそうだったからだ。

「私に食事を持っていつてほしいと頼んだのは……アンジュ様ですよ。やはり、とフィージとレオンは顔を見合わせ、シドは驚きの眼差しをリコに向ける。沙綾は一度だけ会ったことのある神官を思い出した。

自分にあつたとき、何かに驚いていた声。何も言わなかった琳。わずかな空白。

「神官と王妃に会う必要があるな」

「けれど、証拠がありません」

ただあるのはシドが聞いたという会話とリコが預かった食事。どちらとも知らぬと言われればそれまでだ。

「……………」

完全に手詰まりになってしまったとき、今まで黙っていた琳が口を開いた。

「そもそも、何故ルークは王妃に狙われるんだ？」

「それはもちろん、ルークを廃してシドを王位につけたいからだろっ？」

何を当たり前のことを、とレオンが言うと、そうではないと琳は首を振る。

「それは解る。単純な構図だ。古くから慣わしがあるのだろうか？それを決めるのは誰だ？」

確か、初めてレオンに会ったときに聴いた言葉。

「生まれた王子が二人以上ならば、そのうち光をまとうものが次の国王になる。それを決めるのは三人の神官が、現国王陛下です」

しかし、今は神官の数が足りないと聞いている。ならば、王妃は何故ルークを狙うのか？

「つまり、王妃はルークが次代の国王になると既に知っていること

になる。だからそれを覆すためにルークを執拗に狙う」

「どうやって王妃はそれを知ったのか。答えは簡単だ。」

「国王陛下自らがそれを王妃に教えたのでしょう。既に公布されていると思われるかもしれませんが。たぶん陛下は、この騒動を知りません。もしくは、知っていたとしても何も発言権を許されていないか……」

フィージはそこまで言うと言をつぐむ。それ以上は、臣下として口にはいけない言葉だ。

「夕凧が殺されたのは？」

琳が問いかける。ルークが狙われる理由は解った。しかし、まったく関係のない夕凧が殺されたのはどういうわけか。たぶん、王妃か神官が狙ったもので間違いはないだろう。しかしその理由がわからない。

「夕凧というより、姫さんを狙ったんじゃないのか？」

ルークを目覚めさせた薬師がいなくなれば誰にも王子を救うことができない。けれど、沙綾がまだ城にいることを知らずに訪れたのならばつじつまは合う。

「陛下に、ルークが次代国王だと書面をもらおう」

そうすれば、ルークも沙綾も安全になる。

そうレオンが提案すれば、フィージが何か思案した。そうして、しばらくの沈黙の後うなづく。

「そうですね。それが一番確実な方法のようです。シド様、リコ。王子を頼みました」

もしかしたら、眠っているルークが危ないかもしれない。

そう暗に告げ、フィージは立ち上がった。

「行きましょう。どうぞ、姫君も一緒においでください」

「私も？」

ルークに付き添っているべきだと考えていた沙綾は、フィージの提案に瞬いた。そうして、レオンの言葉を思い出す。国王に会ってほしいといった彼の言葉を。

「……わかりました」

これ以上、何事も起きないように。

これ以上、彼のお方を危険にさらさないように。

これ以上、彼のお方を傷つけないように。

それぞれの思いを胸に。

過去

7 過去

朦朧とした意識の中、うつすらと目を開ける。常に視界は悪く、いつも見上げる天井にも黒い染みが点々と散らばっている。

「……、……」

口を動かしてももれるのは乾いた吐息だけ。一言二言話すだけでも、疲労に意識がゆがむ。

「アツシュ。愛しい人。あの子が来るわ」

ふわりと金色の光が唐突に現れた。光は豊かな金髪にかわり、やがて人の形を作る。

ミルクティーのような色をした肌に波打つ金髪。薄く透ける紗の布を纏った姿は南に在るという伝説の舞姫を髣髴させる。

金色にきらめく爪先がアツシュの胸元にそっと触れた。その途端、濁った双眸に強いきらめきが灯る。

「カーシャ……」

「あの子と話をしたいのでしょう？」

「ああ……。老いばれの最期の懺悔を……聞いてもらいたい」

目を閉じ、少し疲れたように吐息をこぼす。その様子を包み込むような愛情と、同じくらいの哀しみ、そしてほんの少しの憐れみをこめて見つめる女。母のように、恋人のように、妻のように、娘のように。

「あの子が来るまで、もうしばらく時間があるわ。少しおやすみなさい。私は、もう一人の愛しい子に会ってくるから」

「すまない……」

「謝るのはなしよ。それでいいと、私が願ったのだから」

そっと細い指先でアツシュの双眸をふさぎ、いつくしむように軽く頬を撫でる。そうすれば、年老いた男はすぐに健やかな寝息を立

て始めた。

「愛しい人。あなたは最期まであの子を想うのね」

少しだけ悲しみの混じった眼差しで数瞬見つめ、ふわりとその姿は掻き消えた。

まるで死んだように眠る兄を、弟は泣きそうな貌でただ見守っていた。

大好きな兄。いつも優しく、忙しい時間を割いては自分を構ってくれた。母や周りの思惑なんてどうでもいい。ただ、自分は兄と一緒ににいたかった。それだけを願った。

「シド様。必ず、ルーク様はお目覚めになりますよ」

きつくかみ締めすぎて唇は色を失っている。握り締めたこぶしも白くなり、そのあまりの痛々しさにリコは思わず手を差し伸べた。強く握られすぎたこぶしをそっと開き、かみ締められた唇を開かせようと声をかける。

「……うん」

心細げな表情でうなずき、また視線をベッドに戻した。と、その視線の先が窓辺に変わる。つられてリコも窓を見れば、見たことのない金色の鷹が一羽。

「まさか……！」

あわてて窓を開ければ、鷹は音もなく入ってくる。何度かルークの周りを見ると、その枕元に翼を休めた。

「カーシャ様の御遣いでいらっしゃいますか？」

「そのとおりだ、巫女よ」

恐る恐るリコが鷹に問えば、鷹は明確な答えを返す。崇敬する神の一部とも言える遣いを前に、ため息のような吐息を漏らす。手を組み、感謝の祈りを神にささげた。

「お初にお目にかかります。私の名前はリコ。カーシャ様を崇敬す

るものです」

「私の名前はキアロ。巫女であるリコよ。その畏敬の念を忘れぬ限り、我が主の加護は永遠となるだろう」

正式な祈りの礼を行うリコの態度を快く想ったのか、キアロは楽しそうに笑って告げた。そうして、真顔　鷹に表情があるかどうかはともかく　になると、ふわりと音もなく舞い上がる。ルークのちょうど真上を大きく旋回すると、その翼から砂金のような光が降り注いだ。光を浴びたルークは、ゆっくりと目を開ける。

「兄上！」

「ルーク様……！」

「シド……リコ……？私は……」

ぼんやりとした表情で起き上がると、枕元に止まっている鷹に目をやった。そうして、ああ、と小さくつぶやく。

「あなたが……導いてくれたのですね」

起き上がったままの姿で目礼を返し、すつと手を出す。キアロはためらいもなくその腕に移り、真正面からルークの姿を見た。

「ふむ……。我が主の寵愛を一身に受けられたな。……私は主の命に従ったまで。主人はもう一人の寵愛を受けし者の元におられる。行くがいい」

「ありがとうございます」

言葉と共に翼を広げ、キアロは狭い室内をゆっくり旋回する。そうしてから音もなく外へと消えた。その姿を見送ると、ルークは立ち上がる。まだ少し体はふらつくが、前よりも快調だ。

「父上に、会いに」

そこできつと何もかも終わる。

そんな確信とも取れる想いが胸によぎる。

「ご一緒いたします」

「僕も一緒に行く」

強い決意を瞳に宿した二人に微笑み、ルークはうなずいた。

フィージとレオンに連れられ、沙綾は扉の前に立っていた。威圧感を感じ、なぜか扉に触れるのをためらわせる。

「沙綾」

琳に促され、沙綾は一步前に出た。そつと扉にふれ、ぐつと力をこめる。わずかにきしんだ音を立てて扉は開いた。中からは沙綾がいつも嗅ぎなれた薬の香りがする。そして 死の香りも。

「銀の娘よ。来たか」

声は思ったよりもはつきりと聞こえた。病にかすれているが、その声は若いときと変わらぬ魅力を持つている。

「もう少ししたら、我が子らが来るだろう。それまで、その顔をよく見せておくれ」

呼ばれるままにベッドに歩み寄り、手を差し出す。その手を、枯れ木のようにやせ細った手が壊れ物を握るように触れた。

「苦労している手だね。……いや、苦労をさせてしまったのか」

薬草を育てるために畑仕事は欠かせず、粉末状にするために石臼も欠かせない。そんな荒仕事を続けていた手は、目立つほどひどくないがマメや手荒れが確実にある。

「綺麗になったな。綺麗によく似てきた。……光をなくしてしまつたのか……。すまない」

「母を……。私を、知っているのですか？」

初めて声を出せば、何故かひどく震えていて。アッシュは安心させるように握る手に力をこめた。そうして、沙綾から視線をそらす。「よく、知っているよ」

ため息に似た吐息とともに吐き出した言葉は苦い。黙って控えていたフィージに視線を向けた。それだけで彼の意を汲み、フィージが口を開く。

「長い話になりそうです。姫君、どうぞおくつろぎください」

「……ありがとう」

差し出された椅子に礼を述べて座り、沙綾は暗闇に問いかける。

このまま彼の話を聞いていいのかと。けれど、なんと問いかけても話を聞く以外に選択肢は見つからない。聞くことが何故怖いのか解らないまま、沙綾はただ待った。

「父上」

短いのが長いのか、時間が流れ声が聞こえる。アツシユが何か答える前に扉は開き、ルークとシド、リコが姿を現した。

「父上、お加減はいかがでしょう？」

わずかに緊張したようにルークが問えば、アツシユが微かに笑う。そういえば、我が子と話をするのはいつぶりだろうと軽く思索した。そして驚く。記憶にないほどはるか昔だと。

「カーシャのおかげで今は大丈夫だ」

「そうですか……」

ほっと安堵したその表情は複雑だ。今は、とわざわざ告げた意図は、裏を返せばもう長くないということになる。きゅつとこぶしを握り締め、ルークは言葉を待つ。

「シド、おいで」

「はい」

父に呼ばれ、兄のそばからゆつくりと離れる。恐々と衰えた父を覗き込めば、意外な眼差しの強さとぶつかった。

「シド。お前は王になりたいか？」

「僕は……」

突然の質問にシドも含めて全員が驚いた。その危うい質問の内容にルークの体がこわばる。それに気づいているのかいないか、シドは何度か瞳を揺らめかせた。

「母上が、僕を王位につけたがっていることは知っています。でも、僕は、王になりたくありません。ただ、兄上の……兄上の隣にいたいです」

幼いながらに必死に考えた答えだった。母から毎晩のように聞かされる言葉よりも、兄が名前を呼んでくることのほうがとても魅力的で大切に思える。

途切れ途切れに選んだ言葉だが、その意志の強さを感じさせるには十分だった。アッシュもルークも、どこかほっとしたように表情を緩める。

「そうか……。……少し、昔話をしようか」

まぶたを閉じ、昔を思い出すように静かに国王は語り始めた。

深い深い森の中。アッシュは一人で牡鹿を追っている。数名の供と狩りにきたのだが、夢中で鹿を追いかけるうちにはぐれたらしい。あと一息。もう少して弓が届く。

そんなときだった。森の木陰から出てきた一人の少女に馬が驚き、アッシュは落馬した。幸いやわらかい土の上だったことと、彼が類まれな乗馬の素質を持っていたために大きな怪我はなかった。

「ごめんなさい！大丈夫ですか？」

最初、少女を見たときアッシュは目を疑った。その、あまりの美しさに。妖にだまされているのかとも思ったが、少女は駆け寄ってくるともう一度アッシュにたずねた。

「まさか、人がいるとは思わなくて……。ごめんなさい、怪我はありませんか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

そういつて立ち上がろうとしたとき、足首に鋭い痛みが走る。どうやらひねったらしく、立ち上がることは難しそうだ。それに気づいた少女が、眉をひそめてアッシュの足を押さえ込む。か細い腕のどこにそんな力があるのか、押さえ込まれたアッシュは起き上がることができない。

「動かないでください。失礼します」

一言断りを入れると、少女は手早くブーツを脱がせ足首に触れる。軽く押したり触ったりしていたが、やがてほっとしたように微笑んだ。

「大丈夫、少しひねっただけのようですね。骨に異常はありません。今薬を塗りますので、このままでお待ちくださいね」

持っていた籠から緑色の葉と赤い葉を数枚取り出す。腰に下げた筒から綺麗な水で丁寧な葉を洗うと、細かくちぎって手のひらでよく揉み解し、ぺたぺたとアッシュの足首に貼り付けだした。ひんやりとした心地よい冷たさにほっと顔が緩むと、少女と視線が合う。

「ようやく笑ってくださいましたね。……こんな森の中で、自分でも怪しいって思うような人に笑えなんていえることはありませんけど……笑ったほうが魅力的ですよ」

くすくすと冗談めかして告げると、アッシュも緊張が解けたのか頬が緩んだ。そうして、少女の手元を覗き込みながら感心したように言う。

「器用なものだな。薬師か？」

「はい。森に住む薬師です。……人を相手にすることは滅多にありませんので、外から来た人は少し珍しいんです」

「森に住む……銀の一族か？」

不意に、少女の手が止まった。その双眸がまっすぐに、探るようにアッシュの目を覗き込む。まるで何もかもを映し出す湖のように、少女の瞳は深く澄んでいた。その瞳を真正面から受け止め、アッシュは初めて気づいた。少女の髪も瞳も、見事な銀色だということに「……すまない。答えたくないならそれでいい。……名前だけ、教えてくれるか？」

「……綺羅と申します。……もうしばらく休めば、馬に乗っても支障はありません。私の村へお連れすることはできませんので、ここでお別れです」

きゅっと最後の仕上げに白い手巾でアッシュの足首を縛る。そうして、こわばった顔のままゆっくりと後ずさった。

「待ってくれ！すまない、言うてはいけないことを言ってしまったようだ。もう二度と口にしないから、せめてもうしばらく傍にいて

くれ」

このままここで少女と別れるのは耐えがたかった。何故そんなに心惹かれたのかは解らない。美しく、心優しい少女ならば都に山といる。ましてや、自分の身分ならば引く手数多である。それなのに、なぜか綺羅という少女に惹かれた。

「……銀の一族を知っていらっしやるということは、身分のある方ですね」

「違う。身分など……捨ててしまってもいい」

どうせ自分には必要のない人間だ。

そんな思いとは裏腹に、必要としてほしいという思いがあふれ、やり場のない憤りに今日森へ来た。

「……少し、お話をしましょうか。あなたが馬に乗れるまで」

アッシュの様子に何か感じたのか、綺羅は困ったような微笑を浮かべて彼の隣に腰を下ろした。

綺羅からは何もしゃべらない。アッシュも、いざ話となると何を話していいのかわからなかった。ただ無為に過ぎる時間がもつたいなくて、思うままに口を開く。

「私は……必要のない人間なんだ」

「何故ですか？必要のない存在など、この世界には存在ませんよ。例えば、小さな虫。この虫ですら、いなければならぬ存在なのですから。あなたが不必要なら、虫にも劣る存在になってしまえますよ？」

くすくすと笑ってそう告げると、さすがにアッシュは顔をしかめる。踏み潰すことも簡単な虫以下の存在にはなりたくない。

「母は……弟ばかりを目にかける。私よりも弟は従順でおとなしくて、かわいいのだろう」

そんな母の言いなりになっている弟も嫌いだった。後から生まれてきたくせに、大好きだった母を横取り、自分を見下す。弟よりも優れていると証明すれば、母は弟に花を持たせることもできないのかと非難し、弟はわざと負けて母に泣きつく日々。

「あなたは実際、弟よりも優れているのでしょうか？ならば何を卑下するんですか。あなたはただ逃げているだけです。誰も見てくれない、ではなく、誰も見ようとしない。だから、だれもあなたを気にかけない。それだけの存在だと決め付けているんですよ」

まっすぐに自分を見つめる綺羅の視線に、はつとした。彼女の言うことは、正しい。弟なんかいなくなれと、ただそれだけを願っていた。どうあがいても実際に弟はそこに存在しているのだから、それは消せない事実。それから逃げ回り、周りがすべて悪いと決め付けていた。

「……そう、だな」

「大丈夫。あなたならば立派な王になれますよ」

にこりと笑って告げると、綺羅は立ち上がって駆け出す。彼女の言葉に驚いているアッシュをその場に残し、すこし離れた位置に立ち止まる。

「何故……」

「金の髪。湖の瞳。カーシャ様のご寵愛を受けていらっしゃる方が、立派でないはありません。どうぞ、双つの神のご加護がありますように」

不思議な一礼をすると、綺羅はそのまま森の中へ消えていった。それと入れ違うように、はぐれた従者が駆けてくる。

「アッシュ様！お一人で先に行かれるから……どうなさいました？」

「……森の、精霊に助けられたよ」

「は？アッシュ様？」

ぼんやりしたその様子と怪我の手当てを見比べ、ただ従者は訝るように主人を見るばかりだ。そんな従者の様子にも気づかずに、アッシュは綺羅が消えた森をただひたすら見つめていた。

それからしばらくたった頃のことだ。春が終わりを告げ、夏がやってくるころ。アッシュは、どうしてもあの日出会った少女　綺

羅のことが忘れられずに、再び森へと出かけた。うまく森の木陰に
供をまき、うろ覚えの道をゆつくりと進む。そうして、少女が自分
を手当てしてくれた場所までどうにかたどり着いた。

馬をつなぎ、草の上にごろりと横になる。鳥の声が聞こえ、虫が
鳴き、なんとも穏やかだ。木陰に入ればそよ風は涼しく、ついうと
うとまどろみ始める。そうすれば、がさりと人の足音が聞こえた。
はっとして身を起こすと、剣に手を添えて油断なく見回す。そうす
れば、あの日と同じように木陰から少女が姿を現した。

「まあ……またどこかお怪我をされたのですか？」

心底驚いたのか、望月のように双眸が丸く開かれる。少しはにか
んだように笑うと、ゆつくりと近づいてきた。

「お久しぶりです。今日はどうされたのですか？」

自分にこびるでもなく、ただ自然と向き合ってくれる少女。そう
して気づいた。自分は彼女のことが好きなのだ。

「今日は……綺羅に……いや、馬を少し、見てもらいたくて」

「変わったお方。馬のためにわざわざこんな森の奥まで来るなんて
昼間は大丈夫ですけど、夜は決して来てはいけませんよ」

足取りも軽くつないである馬に歩み寄りながら綺羅はさりげなく
告げた。一瞬言葉を聞き逃すが、何故とすぐに疑問がわく。その疑
問のままに問いかけると、なんていうこともなく少女から答えが返
ってきた。

「狼が出ます。私たち銀の民は狼は信頼できる友達ですが、それ以
外の方には容赦なく牙と爪をむきますので気をつけてくださいね。」

……少し足が腫れてますね。手入れは綺麗にされていますけど、無
茶な走りかたをしたのでしょうか。もう少しいたわってあげてくださ
い」

少しだけ怒ったように、しかし馬から目をそらさずに綺羅は告げ
る。馬に優しく語りかけ、首筋を撫でてから足に薬草を塗りだした。
そうして、何を思ったのか懷から細身のナイフを取り出すと無造作
に指先を傷つける。

「何を」

「知っていらつしやるでしょう？ 私たち銀の民の血が、何に使われるかを」

少しだけ冷やかな声。その声に頭の芯がすつと冴え渡り、そういえばと思い出す。

「……銀の神に愛されし者は、その体が薬となる。液体は万能薬となり、肉と骨は若さを、臓腑は永遠の命を与える」

「そんなことをいまだに信じていらつしやるんですね。すべておとぎ話ですよ。もちろん、血や涙が薬にはなりません。他の薬草に混ぜて使えばたちどころに傷はふさがり、体の痛みはなくなる。けれど、それだけです。永遠の命も若さも、そんなものを銀歌様は与えたりしません。……私たちは薬師の一族。ただほんの少し、銀歌様から恵みをいただき、怪我や病をほんの少しだけ早く治す業を持っているだけです。銀歌様は心優しいお方ですから……」

何の感情もなく、けれど崇める神の名を呼ぶときだけは幸福そうに。淡々と事実だけを告げる少女の顔は、アッシュからは見えない。ただ、その冷たい響きが何故彼女らが深い森の中で生きているのかを語っていた。

「……すまない」

「あなたが謝る必要は何もありませんよ。すべてあるがままに。それが、銀歌様の教えでもあります」

振り返り、にこりと微笑んだその姿はごく普通の少女に見えた。心優しく、美しい少女。アッシュは綺羅に歩み寄ると、その手をそつと握る。

「綺羅。私の薬師になってくれないか？」

アッシュの湖の瞳と綺羅の月の瞳がぶつかった。二人とも言葉は口にせず、ただ探るように互いの双眸を見つめあふ。

先に言葉を紡いだのは、綺羅。

「殿下。私は、銀歌様にお仕えする巫女。たとえこの世のすべてを持つ国王陛下のお頼みであっても、それは聞き届けられません」

「もし……もし、私が王子の身分を……」

「その先は言ってはなりません。あなたは必ず次の国王になるお方。人々に必要とされるお方です。軽々しくそんなことをいってはなりません」

アッシュの言葉を封じると、綺羅は少し悩むように顔をうつむける。そうして、仕方ないと小さく苦笑した。

「殿下。友達になりましたようか。殿下のために薬を煎じることはできませんが、あなたのために馬を見たり、話をしたりすることはできます」

「友達……」

それは、不思議な響きだった。乳兄弟と呼ばれるものや、従者となるものは大勢いたが、友達と呼べるものは一人もいなかった。それを、綺羅はにこやかに友達になろうといってくれたのだ。こんなうれしい申し出は今まであつただろうか。

「そう、友達です。あなたの話を聞くことなら、私はできます」

「……ありがとう」

何よりもうれしい申し出に、アッシュの顔がほころびた。そのくつたかない笑顔に綺羅も笑い、いたずらっぽく告げる。

「あなたの名前は？」

「アッシュ。ただの、アッシュだ」

「アッシュ。いい名前ね。……満月の日は朝からここに来ているわ」

「わかった」

そうして、アッシュと綺羅の穏やかな日々が始まった。

「それは、永遠に続くと思っていた」

そう、アッシュは続ける。老いた顔は昔を思い出してか顔に赤みが戻り、幾分若く見えた。

誰も何も言わない。ただ老人とその子供、運命の子らの吐息が響くばかりだ。

「何度も何度も、綺羅と会って話をしたよ。それはとても楽しい日々だった。彼女を愛おしいと思っていたが、手に入れようとは思わなかった。綺羅にとって、私だけが特別だと……そう信じていたから」

夢のような日々が崩れたその日。朝から小雨が降りしきる、あまり天気の良い日とはいえなかった。それでもアツシュは馬を急がせ、いつもの場所に着いた。

「アツシュ！ ねえ、きいて、とても嬉しいことがあったの」

「どうしたんだ？」

抱きついてくる綺羅を受け止めながら、アツシュは首をかしげる。今までこんなに喜んでいて綺羅の姿は見たことがなかった。戸惑いと、微かな不安がアツシュの胸をよぎるが、綺羅は気づかない。喜びに頬を紅潮させ、言葉を紡いだ。

「娘にやっと逢えるの。一週間後、娘が三つになるわ。……私たちが一族の間では、巫女の子供は三つになるまで他人と交わってはいけないしきたりなの。その間は月下という身分の女が子を育て、たとえそれが血を分けた両親であっても会うことは許されない。けれど、三つになったら誰にも邪魔されずに、やっと本当の家族になるの」
立て板に水のごとく、喜びを告げる綺羅。アツシュの表情が見る間に変わることにも気づかない。

「娘……？ 子供が？」

「ええ、そうよ。私の子供。ああ……やっと沙綾にあえるわ」
愛しい子供の姿を思ってたか、綺羅の姿は一段と美しかった。けれど、その姿がアツシュの心に影を生む。

子供がいる。

娘が。

ならば、夫もいるのだろう。

私だけの綺羅。

私だけの、綺羅だった。

「……そうか、それは……嬉しいだろう。……すまない、今日は少し気分が優れない。戻るよ」

「大変、顔色が悪いわ。ごめんなさい、自分のことですごく舞い上がってしまったって……薬はある？」

「いや、大丈夫。横になればすぐによくなるよ」

心配する綺羅を振り切り、早足で馬に向かう。そのまま訝る綺羅を置き去りに駆け去った。

どこをどう通ったのかまったく覚えていない。気づけば雨は豪雨となり、ぐしよぬれのまま王宮にたどり着いた。誰もいない抜け道を通り、部屋まで行く。乱暴に濡れた服を脱ぎ捨て部屋着に着替える。そのままベッドに横になると、目を閉じた。

「綺羅……」

名前をつぶやき、顔をゆがめる。瞼の裏に浮かぶのは、先ほどの喜びに満ちた表情。白い頬を紅潮させ、満月のような瞳を輝かせたその姿。その姿を追い払うように頭を大きく振る。けれど幻は消えるどころか大きくふくらみ、やがてもう一つの幻を生み出す。

綺羅に手を引かれた子供。その子供を挟むように立つ夫。やがて綺羅は、アッシュを置いて歩き出した。その後姿に追いすがっても追いつけない。

「綺羅……！」

声に出して名前を呼び、ようやく幻を振り払った。その額には汗が浮かび、顔色は悪い。雨に当たったせいか悪寒まで感じてきて、アッシュは苛立ったように起き上がった。

トン　トン

そんなときだった。扉をたたく音が聞こえ顔をしかめる。

「今は誰にも会いたくない。帰れ」

不機嫌そのものの声で部屋からそう告げるが、扉の前にいる人物は気にした風もなく言った。

「国王陛下。今私に会わないと後悔されますよ」

「……無礼者。誰だ？」

不遜な物言いにむっときたアツシュは、乱暴にドアを開ける。そこにいたのは、見知らぬ人物。黒一色でまとめた緩いローブに、目深に被った黒いヴェール。小柄なその体つきから女かとも思ったが、すぐに違うと気づく。

「銀の一族から参ったものです」

綺羅が初めて見せた不思議で複雑な一礼をすると、ぱさりとフードを下ろした。そうして気づく。男に銀の色がないことを。

「本当に銀の一族か？」

文献では、銀の一族はその体に銀色を宿すといわれている。一族のほとんどは髪や瞳に色が現れるが、まれに爪や髪の一部だけが銀色であったりすることもあるが、必ずどこかに宿しているはずだ。銀は銀歌の色。その聖なる色を宿すものだけが銀の一族となれるとある。

「私は異端のものです。だからこうしていつもフードを被っているのですよ」

「……入れ」

男を招きいれ、アツシュは黙ったまま椅子に座る。そうして、彼の出方を待った。

「陛下。陛下は巫女が愛おしいのでしょうか？」

「何故……」

ぎくりと体をこわばらせ、真正面から男を見つめた。その深い黒の瞳に吸い込まれそうになり、慌てて視線をそらす。その様子を楽しそうに見つめ、続けた。

「陛下がいつも遠乗りで向かう先は、古の森。あそこには、我らが銀の一族がおります。陛下と巫女がどうやって出会ったのかは解りかねますが、陛下は巫女を愛した。けれど、巫女は陛下を愛してい

なかった。違いますか？」

淡々と語るその口調に、なぜか恐怖がわきあがる。暗い闇の中に独りでいるときのような、なんともいえない恐怖。何があるわけでもないし、何もないはずなのに、なぜか「怖い」と感じる。それと同時に、誰にも話していないことを知る男に興味が沸いた。

「どうやって知った？」

「私は異端の者。銀の一族であり、銀の一族ではないもの。もう一つの月、新月を崇めるものにございます」

「新月を？」

「はい。銀の一族の中のほんの一握りのものだけが新月を崇めます。新月を崇拜するものは闇の一族と呼ばれ、薬師の能力を失います。代わりに、別な力が手に入るのですよ」

ふわりと微笑んだその姿は、美しくそして妖のように魔性を秘めている。たおやかな姿に隠された毒に気づけずに、アッシュは言葉を紡いだ。

「……話を、聞こうか」

「ありがとうございます」

ふっと、息を継ぐ音が響いた。その声がかすれていることに気づき、フィージは席を立つ。その音で痛いくらいの緊張を帯びていた場が緩んだ。

「陛下、少しお休みください」

カチャリと音を立てて茶器がなり、フィージがいたわるように声をかける。それにうなずき、アッシュは緩慢な動作で体を起こす。途端、激しい痛みが胸を襲い、かがみこんで咳き込む。

「父上！」

ルークとシドが同時に立ち上がり、その小さくなった背をゆつくりと撫でた。なだめるように動く手のひらに、徐々にアッシュの呼吸が静まる。

「大丈夫だ」

ふー、と大きく息を吐くと、フィージからぬるい白湯を受け取った。ゆっくりと口の中で転がすようにして飲み込み、呼吸を整える。

「カーシャ、おるかね？」

「もちろん、お傍に」

アッシュが呼ぶと同時にふわりと金の光が舞った。それは人の姿を形作り、驚く皆にいたずらに笑いかける。

体重を感じさせない動作で床に舞い降りると、心配そうにアッシュの顔を覗き込んだ。

「無理をして……私にも限界があるわ」

「それでも、話さなければならぬだろう？」

「……そうね」

ずっとカーシャの唇がアッシュの唇と重なりすぐに離れる。その瞬間、目に見えてアッシュの顔色がよくなった。ほっと安堵の息を漏らす子供たちに笑いかけ、ずっと手を伸ばす。

「ルーク。アッシュの次に愛しい子。あなたが次の国王よ。アッシュの変わりに、この国を、私のかわいい子らを導いて」

「わかりました」

「いい目をしているわ。アッシュと同じ瞳。……シド。あなたは王にはなれないけれど、決してひがんではダメよ。ルークを、兄を支えなさい。それはあなたにしかできないことよ」

「は、はい」

緊張に少々上ずった口調でシドはうなずき、そうして兄を見た。

ルークの厳しい目にその重責を知り、必ず兄を助けようと心に誓う。そんなシドの内を見透かしたようにカーシャは笑い、リコに視線を転じた。

「リコ。いつもあなたの祈りを聞いているわ。あなたの祈りは私の命。ありがとう」

「い、いいえ！私の祈りなど、些細なもので……私を含めて、民全員がカーシャ様をお慕いしております」

「あなたのその純粹さが大好きよ。だから……どうか、真実を知っても悲しまないでね」

「え……？」

何を、と問い返す間を与えずに、カーシャはすつとりコから視線をはずす。それに戸惑いながらも問いかける機を逃し、リコは唇をかんだ。

金の女神は視線をフィージに向ける。複雑なその眼差しの意味に気づき、フィージはただ首を横に振った。それに少しだけ悲しそうな視線で見つめ返し、レオンを見る。

「レオン。いつもルークを支えてくれてありがとう。これからも、何があっても私の愛しい子を見守ってあげて」

「お約束します」

真摯な瞳でカーシャを見つめ返し、レオンはしっかりとうなずいた。それに満足して微笑み、最期に銀の娘と狼の隣に行く。

「沙綾……ごめんなさい」

「何を……何を、謝られるのですか？」

不安にきつくこぶしを握り締め、沙綾はかすかにゆれる声音で問う。

「あの人を、止められなくて……」

碧い双眸に涙をいっぱい浮かべ、カーシャはうつむいた。その姿にそれ以上問えずに、沙綾は口を閉ざす。すると、何も無い空間から突然声が降ってきた。

「カーシャが謝ることではないよ」

「兄様？」

カーシャが顔を上げると、沙綾の後ろにいつの間にか影が立っていた。銀色の影はすぐに人型となり、神の姿と変わる。誰もが初めてみるその姿に驚き、やがて慌てて深く頭をたれた。崇敬する神ではないが、それが当たり前のことと。

「お前一人の責任ではないよ。私にも……非はある」

「でも……」

「私は自分の中の欲に負けた。だから、私の愛しい子をいつまでも悲しませている。…アッシュ」

「はい」

カーシャから視線をはずすと、銀歌はアッシュに視線を転じた。老いた国王は、その眼差しを真正面から受け止める。一瞬だけ揺らめいた瞳には罪悪感に彩られていた。

「この続きは、私が話そう」

「……よろしく、お願いいたします」

ベッドの上から深く頭を垂れ、アッシュは悲しみと後悔に顔をゆがめる。その表情が見えたかのように、銀歌は一つ瞬いた。

「アッシュ、楽にしていなさい。カーシャの加護も、無理をすれば長く続かない」

銀歌の言葉に続き、カーシャがそつとアッシュの背中に手を添える。そのままいたわるように横たわらせ、それをみてから銀歌は口を開いた。

「男とアッシュは、ある一つの計画を立てた」

あの雨の日から、何年も時が経った。何度も何度も満月は訪れたが、アッシュは訪れない。かといって、綺羅から彼に連絡を取るすべはなかった。ただ、そこで彼を待つだけだった。

「今日も、来ないかな……」

もうこないかもしれないとそんな思いが何度も頭をちらついたが、最後に会ったときの彼が気になって仕方がない。もしも、という淡い期待を抱き、結局何度も足を運んでしまうのだ。

綺羅があきらめのため息とともに村へ戻ろうとしたその瞬間。遠くから微かにひずめの音が響く。綺羅はその音へ向かって無我夢中で駆け出した。

「アッシュ！」

「綺羅……」

少し見ないうちに、彼女はさらに綺麗になつた気がする。うつと
りと目を細め、その美貌をしつかりとまぶたに焼き付けた。きつと
自分は彼女に嫌われてしまふだろうから。それでも、それでも

「綺麗、一つだけ頼みがある」

「何？」

「一度でいい。君の家族にあわせてくれないか？」

それは無謀ともいえる言葉。銀の一族は決してよそ者を村にいれ
ない。けれど、もしも、

綺麗が自分を少しでも愛してくれているのならば たえそれが、
友愛だとしても。

「……わかつたわ。今夜、望月の祭りがあるの。そのときに。……
あなたは大切な友人だわ。私の娘を見てもらいたい」

少しだけ迷つてから、綺麗はうなずいた。うなずいて、しまった。
アツシュは一度硬く目を閉じると、ありがとうとかすれるような
声でつぶやく。そのとき、綺麗は気づけなかった。友人の様子がお
かしいことに。

「そうね……月が中天に昇るころ、またこの場所で。あまり早くい
つたら、村の人にはばれてしまうわ」

くすりと笑い、いまだ馬上のアツシュを見上げる。手綱を取る手
にそつと触れ、押し戴くように額に当てた。

「アツシュ、あなたは私の初めての友達よ。巫女である私に気安く
話しかける人はいないわ。夫を愛している。けれど、それと同じく
らいあなたも大切よ」

「綺麗……」

「また夜にね。待っているわ」

何か言いかけたアツシュをその場に残し、綺麗は駆け去つた。そ
の姿を見送り、アツシュは一度天を仰ぐ。唇だけで愛しい人の名前
をつぶやき、自嘲するように笑つた。

「もう、遅い……」

星が瞬き、満ち満ちた月が天を飾る夜が来た。綺羅は巫女装束に身を包み、アッシュを待っている。その横には、彼女にそっくりな子供の姿。

「沙綾。これから来る人のことは、誰にも言っちゃだめよ？」

「父様にも夕凧にも言っちゃダメなの？」

小さな手で母の指をしっかりと握り、沙綾は不思議そうに問うた。なぜなら、母は父と夕凧には何でも話さないといつも言っていたからだ。いつもと違って、不思議そうに首をかしげる。そんな我が子の姿をみて、綺羅は微笑んだ。

「他のことなら何でも話していいのよ。これから来る人は、私と沙綾だけの友達だからよ」

「ともだち？」

「そう、友達。もう少ししたらあなたにも友達ができるわ」

母の言うことは半分も理解できなかったが、ただこれから来る人は特別な人なのだと。それだけは解った。だから、沙綾は目を輝かせてうなずく。

「うん、わかった。母様と二人だけのひみつだね。あ、でも……りんにも言っちゃダメ？」

「琳にはいいわよ。琳に隠し事はできないからね」

くすくすと楽しそうに笑って母はうなずいた。綺羅の許可をもらい、沙綾は目に見えてほっとした表情になる。そんな娘を愛おしそうに見つめていると、やがて蹄の音が聞こえてきた。けれど、何かが違う。いつもの聞きなれた音ではない。

「……沙綾、村へ戻りなさい。父様のところへ行くの」

「母様は？」

「すぐに行くわ。だから、急いで」

ただならぬその様子におびえ、それでも沙綾は駆け出した。すぐに父に知らせなければとそれだけを思い、一心に走る。

やがてその姿が見えなくなると、アッシュがやってきた。しかし、

いつもと様子が違う。硬質なよろいを身につけ、その後ろにも十騎ほどの騎士がいる。

「アッシュ。どういうこと？」

「……綺羅、私ときてもらう。さもないければ、このまま森は炎に包まれることになるだろう」

「……なんですって？」

あまりに言われたことが非現実的で、思わず綺羅は問い返した。冗談だろうと思いたくて、けれども彼はきつと本気だろうとなぜか解る。

「私と一緒に来い。お前が来れば、村も子供も無事だ」

「……アッシュ。本気なの？そんなバカなこと、本気で考えているの？」

「本気だし、バカなことでもない。……最初から、こうすればよかったのだ」

「ふざけないで！私はあなたのものにはならないと最初に言ったはずよ」

「それならば……仕方がない」

アッシュが手を振ると同時に、十騎の馬が一気に森の奥へと駆け出した。それを見て、綺羅も反射的に駆け出そうとするがその行く手をアッシュがさえぎった。

「どいて！あそこには私の家族がいるのよ。あなたと一緒に行く気はないわ！」

「綺羅。私のものになれ」

「いやよ！私は銀の一族の巫女。いつか銀歌様にお仕えするの。あなたの元には死んでも行かないわ」

「そうか……」

どこか解っていたような、あきらめたような声。その声音に一瞬気を抜いた瞬間、綺羅は馬上の人となっていた。無理やり馬に抱き上げられたのだ。

「下ろして！アッシュ、目を覚まして！いつものあなたに戻って！」

「暴れるな。落ちる」

闇雲に暴れる綺羅を器用に抱きなおすと、馬を走らせる。その先は森の外ではなく中。村へと向かっていた。

綺羅が見た村は、悲惨な状況だった。炎が木々を燃やし、たった十人の男が村を蹂躪している。幼い女子供は逃げ惑い、男は立ち向かうも人形のように倒れていく。

「ひどい……！」

「お前がしたことだ。お前が素直に言うことを聞かないから、こうなった」

「私のせい……？……アツシュ、お願い……下ろして」

涙で顔をぬらし、アツシュを見つめる。その銀色の眼差しに貫かれ、アツシュは一瞬腕の力を抜いた。その瞬間、馬から転がり落ちるように綺羅は抜け出す。走った先は、愛する家族の元。

「綺羅！」

戻れという男の声を無視し、綺羅はひたすら走った。そして、目を見開く。家は炎に包まれ、その前に倒れているのは自分が愛した夫。

「皓貴！ いや……お願い、目を開けて……」

「きら……？」

「こうき！」

うわごとのように名前をつぶやいた男にすがりつき、綺羅は涙ながらに名前を叫ぶ。今から自分の血を飲ませて、間に合わない。もう、命のともし火が消えかかっているのが解った。

「き、ら。愛しているよ。私はいいから、沙綾を……かわいい私たちの娘を……」

「皓貴……いやよ……」

「綺羅。わがママを言わないで。さあ……」

ぎこちない仕草で涙を流す妻の髪を撫で、促す。綺羅は何度も迷いに視線を揺らめかせたが、やがてその唇に最期のキスをする勢いよく駆け出した。

涙で曇る視界を拭い去り、今はただ愛する娘のことだけを考える。
「さあや！りん！」

大声で名前を呼びながら走るその姿を、不思議と誰も止めなかった。もしかしたら、アッシュにそう命じられていたのかもしれない。今はそれが好都合とばかりにひたすら走る。

「助けて！」

遠くから悲鳴のような声が聞こえ、綺羅は足を速めた。遠すぎて娘かどうか判断はできないが、もしかしたらと望みをかける。

果たして、そこにはぐったりと動かない狼の姿と、同じように血を流して倒れている娘の姿があった。そして、そこにさらに刃をつきたてようとする男の姿。

「さあや！」

綺羅は声限りに叫ぶと、渾身の力で男に体当たりをした。男はよろめき、刃はそれる。その隙に娘を抱きしめた。

「沙綾！」

返事のない娘にさつと顔から血の気がうせる。けれど今はこの場を離れることが先と、娘を抱いたまま駆け出した。

闇雲に走り、大木の陰に隠れる。

「沙綾、沙綾。お願い、目を覚まして……」

頬を撫で、綺羅は何度もキスをする。やがてまぶたが動き、ゆっくりと黎明の瞳が母を捕らえた。

「母……様？」

「ああ……沙綾……」

ぎゅっと抱きしめ、もう一度娘にキスをする。それにほんの少しだけ微笑み、沙綾はすぐに意識を手放した。血の気の失せた表情に綺羅は息を呑み、沙綾をしっかりと抱きしめたまま月を見上げる。銀色に輝く双眸でまっすぐに満ちた月を見つめ、静かに祈りを捧げた。すると、銀の光がずっと人型となっておりてくる。

「銀歌様。どうか、この子をお願いします。私は……すぐにあなたの元へ参ります」

きつとそうなるであろうと、どこか確信した口調。それに小さく瞬き、銀歌は軽く吐息を漏らした。

「私の元へきても……私のものにはならないのだろう？愛しい娘よ」
「……私は……皓貴を愛しています。すべてあなたのもの。けれど、これだけは譲れないのです」

「ならば、お前のかわりに娘をもらおう。私と愛しい子と、あれの血が混ざったこの娘を」

「……沙綾の命が助かるならば」

「必ず約束しよう」

「ありがとうございます」

そういつて微笑んだ瞬間、背後に気配を感じた。そのときには既に遅く、痛みというよりも焼けるような熱が背中を襲った。声もなく沙綾を抱きしめたまま倒れる綺羅。その衝撃か、沙綾の瞳が開いた。

「さあや、怪我はない？」

「母様……？」

「どこも、いたくない？」

かすれるような、泣きそうな声で母が尋ねると、娘は精一杯微笑んでうなずいた。なんとか母を安心させたかったのだが、いつもと違うその気配に顔がこわばる。

「痛くないよ。母様が抱きしめてくれるから……どこも、いたくないよ」

「よか……た。……ごめ、ね、さあや。母様、なにもにしてあげられなくて。一緒に、いられなくて、ごめん……ね」

「一緒に、いられないの？母様……どこかにいったら、やだよ」
ひつく、と幼い泣き声が聞こえ、綺羅は困ったように微笑んだ。その双眸から涙があふれ。ごぼりといやな音を立てて喉から血があふれ出る。

「泣かないで。父様と……いつも、沙綾を……見守っているから」
そういつて、娘に口付けしようとした瞬間。意識が闇に落ち、腕が

ずるりと外れる。

幼い子供には支えきれずに、母の体の下敷きになる。けれどその重みは心地よく、そして悲しくて。沙綾はその体にしがみつこうようにして叫んだ。

心からの叫びに、あたりが銀色に染まる。やがて銀白色に森は染まり、光が消えた後には何も残っていなかった。そう、あれだけ森を紅に染めた炎も、凶刃を手にした男たちも、村人の、母の亡骸もすべてが何もなかったように消えうせた。ただそこに在ったのは、小さな子供と一匹の狼、そして間違いを犯した国王の姿。

「これは……」

唐突にすべてが消えてしまった森の中でアッシュが呆然としてみると、銀色の光が一つの影になる。それは書物で見たことのある月の神の姿。

「月の……神？」

「哀しきものよ。我が妹の加護を受けし者よ。何故間違いを犯した？」

「私は……私はただ、あの娘がほしかった。誰よりも私を理解してくれたあの娘が。なのに……娘は私を裏切った」

怒りのにじむ声に銀歌は悲しそうにまぶたを伏せる。ずっと右手をあげると、そこには生前そのものの綺羅の姿が浮かび上がった。

「アッシュ。私は言っただわ。あなたのものにはならないと。……なれないと。私は銀の神に仕える巫女。銀歌様のものよ。皓貴を……夫を愛しているわ。けれど、やがて私は銀歌様の元へいく。それを承知で、皓貴も私を愛してくれたわ」

「月の神の元へ行くのは、お前が死んでからのことだろう？それまで、お前はあいつのものになる。あいつに微笑みかけ、あいつの腕の中で眠る。それが許せない」

悲しみをたたえた綺羅の瞳から、涙が一滴零れ落ちた。その涙はとめどなくあふれ、綺羅の美しい顔がゆがむ。

「私は、あなたのものでもあったのよ。私に友達はいない。あなた

にもいない。あなたを理解し、私を理解してくれるあなたは、私のたった一人の友達よ。なのに、あなたは私のすべてを欲した。……悲しいことよ」

「何故だ？何故私ではいけなかった。お前は私を理解してくれて、私はお前を理解した。それなのに、何故いけなかった？」

「あなたは、たった一つだけ理解してくれなかった。それは、私が巫女であること。生まれたときから銀歌様のものであることを、理解してくれなかった」

アッシュには何を言われているのかが解らなかった。彼女が銀歌のものであるということは理解しているのに、何故理解していないといわれなければならないのか。それが解らなかった。

「こういえば解るかしら？私と皓貴は清い仲よ。正確には少し違うけれど……沙綾は、皓貴の血を受け継いでいるけれど、同時に銀歌様の血を受け継いでいるの」

「……何？」

「皓貴は覲なのよ。その身に銀歌様ののせることができる人。私は皓貴と契りを結んだわけではないわ。銀歌様と契りを結んだの」

なんとという男だと、正直な感想はそれだった。

たとえそれが神だとしても、愛した女を与えることができる男はそうそういるものではない。もし自分が覲だとしても、決してできないだろう。神をおろしているときの感覚はわからないが、それは自分であって自分ではないときのこと。そんなときに女を愛することは、自分ならばできない。たとえそれが役目であつても。

「皓貴は、銀歌様のために存在する人。そして、私は銀歌様のものなのよ。たとえ、皓貴を愛していたとしても、私は皓貴のものにはなれないの」

「私は……」

ふらりと揺らめいたその体を、綺羅が抱きしめることはもうできない。手を伸ばしても、その手がぬくもりをつかむことはできない。それは、自分がしてしまったこと。

「私は……！」

「もう、終わってしまったことよ。だから……この森には二度と近づかないで。最期のお願いよ」

「……約束、しよう」

「ありがとう」

ふわりと微笑み、綺羅は空気に溶けるように消えた。その姿を送り、アッシュは疲れたように肩を落とす。その姿を憐れみをこめて見つめ、銀歌は告げた。

「今日のことは、誰の記憶にも残らない。すべて夢の出来事となるう。けれど……我が妻が許したとしても、私はお前を許すことはできない」

「……承知しております」

すべては自分の欲から生まれてしまった悲劇だ。どんなことを言われても耐える覚悟はあった。

「お前には、今夜のことを克明に……そう、悲鳴のすべてを、木々が燃えるにおいを、人が倒れる音を。すべて覚えておいてもらう」

「……仰せのままに」

深く頭をたれた瞬間、アッシュは自室に戻っていた。鎧は着ておらず、柔らかなガウンにその身は包まれていたが、血のにおいだけが夢ではないと語っている。

「綺羅……」

愛した女性の名前を小さくつぶやき、アッシュは倒れこむように眠りについた。

「眠って、起きて。あの夜の出来事を知っている者に聞いてみたが、誰も覚えていなかったよ」

口を閉ざした銀歌のあとをつぐように、アッシュが言葉を紡いだ。けれど、彼は今でも覚えていると、そうつぶやく。

「沙綾。私を恨んでくれていい。綺羅をお前から奪ったのは、私な

のだから」

「私は……」

青ざめた顔でアッシュを見つめる沙綾を、銀歌が優しく抱きしめる。そのぬくもりに助けられるように沙綾は口を開いた。

「あなたをそそのかした男は、誰なのですか？」

「あの夜の後、どこへ消えたのか私は知らない。名前は、闇樹といった」

アッシュのその言葉に息を呑んだのは、沙綾ではなくリコ。真つ青な顔で衝撃と落胆と絶望をない交ぜにしたような視線を向ける。

「それは……本当なのでしょうか？」

「ああ。覚えているよ。黒に銀をちりばめたような髪に、闇のように深い漆黒の目。女のように華奢だが……あれは、闇に属するものだ」

「アンジュ様が……」

ふらりとゆれたその体を、いつの間にか背後に来ていたフィージが支える。リコの様子が腑に落ちず、アッシュは問いかけるようにフィージに視線を向けた。

「アンジュは……現在、神官を務めております。……王妃様と共謀なさって……ルーク様を……」

「そうか……。あれの望みは、たぶん沙綾だろう。綺羅に固執していたからな。……恋敵はなんとわかるものだ」

くすりと悪戯に笑い、けれどすぐに笑顔を消すとシドに目を向ける。リコほどではないが、シドの顔色も悪い。

「シド。お前の母親は、本当は心根の優しい女だ。それは私が保障しよう。そこまで気に病むことはない。ルークも、あれを恨んではいけない。……あれは、心根は優しいが少し臆病だな。お前の母親が完璧すぎて、自分もそうでなければならぬともがいているのだよ。許しておくれ」

「……昔、シドの……いえ、義母上に、おまえは義母上の子供だとそういつていただいたことがあります。その言葉を信じております」

ルークとシドはうなずくと、それを満足そうに見やり、アッシユはまぶたを閉じた。ひどく疲れたのか、顔色があまりよくない。

「アッシユ。そろそろ限界よ。眠りなさい」

優しくカーシャがささやくと、アッシユは疲れたようにため息を漏らす。その姿を見ていた銀歌は、一つ瞬くとすつとアッシユの額に手を伸ばした。

「アッシユ。哀れな子よ。お前はやがてカーシャの元へいく。それでも我が妻が忘れられないか？」

「……カーシャの元へいく、そのときまでは。どうぞ、彼の人を想わせてください」

「ならば、夢を授けよう。カーシャの元へ行くまで、あの娘と過ごす夢を」

そうささやくと、アッシユはすつと眠りに落ちた。カーシャはその姿を複雑な眼差しで見つめる。

「ルーク、シド。一週間。愛しい人が、あなたたちとともに過ごせる時間よ」

それは、死を宣告されたに等しい。けれど、二人ともわかっていた。静かにうなずき、シドはルークの手をしっかりと握る。

「兄様」

「解った」

言葉少なに兄弟は視線を交わし、ふつとカーシャの姿は消えた。そうして残された銀歌は、沙綾に視線を向ける。

「闇樹の元へ行こうか」

「……はい」

ともすれば足元が揺らいでしまいそうな不思議な感覚。気力だけでしのいでいる沙綾を勇気付けるように、銀歌はその手をきつく握り締めた。

「巫女よ。お前は どうする？」

「私は……私は……」

きゅつと唇をかみ締め、リコはまぶたを閉じた。

聞きたいことがたくさんある。けれども、聞くことが怖い。

迷うリコに、そつとフィージが手を伸ばした。

「迷っているならば、気持ちの整理をつけてから行きなさい。今のまま彼に会ったら、きっと言いたいことの半分も言葉になりませんよ」

「……はい、兄様。……後から、必ず、いきます」

揺れる瞳のまま沙綾に告げると、沙綾はふわりと微笑んだ。彼女も戸惑い混乱しているだろうに、その強さを羨ましく思う。

「気をつけて」

ルークの声が響き、その瞬間視界は銀白色に変わった。

結末

8 結末

ふっと、アンジュは誰かに呼ばれたように視線を上げた。それはその昔愛しい娘に呼ばれたときのような、そんな心が浮き上がる感覚。

「……もう、そろそろですか」

パタンと読んでいた本を閉じると、アンジュはぼんやりと揺らめく灯りを見つめる。オレンジ色に淡く輝く炎は、昔々、まだ自分が闇に魅せられる前のことを映し出した。そう、それは幸せの日々を。

「闇樹。何をしているの？」

後ろから名前を呼ばれ、振り返ればそこには一人の女性。艶めく銀色の髪に、望月の瞳。愛しい人だった。

「綺羅様。薬を、煎じておりました」

綺羅は、自分よりも五つ年上の女性だった。脈々と受け継がれてきた銀の巫女の中でもその力は高く、そして誰よりも美しかった。その姿だけでなく、心根も。

綺羅が生まれてきたときに、枕元に崇敬する神が降り立ったという。神は、綺羅をいづれ妻に迎えると、そう告げたらしい。それ以来、綺羅は巫女として、また神の妻としての修行が続いていた。

「闇樹は薬を作るのが上手よねえ。私、薬を作るのが本当に苦手だから羨ましいわ」

闇樹の手元を覗き込みながら綺羅は感心したように言う。彼が煎じているのは、解熱と解毒の作用があるきわめて難しい薬だった。「何をおっしゃいますか。綺羅様には尊いご使命がおりになります。私ごときの能力と比べてはいけません」

闇樹は慌ててとんでもないと首を振るが、それが謙遜だということとは綺羅はよく知っていた。一族の中でも、彼は薬作りがとても優れていると評判だったからだ。綺羅はくすくすと笑い、子供にするように彼の頭を撫でる。

「き、綺羅様！もう子供ではありません！」

「ごめんなさい、あんまりかわいいから」

顔を真っ赤にして怒る闇樹がさらに可愛らしく見えて、綺羅はなおも笑う。そんな綺羅はいつものことだったので、あきらめたように肩を落とした。少しだけすねたように唇を尖らせれば、綺羅がふわりと微笑む。

「そうね、あなたももう成人の儀を済ませたのだったわね。ごめんなさい」

「いいえ、構いませんが……人前ではしないでくださいね」

「もちろん。わかってるわよ」

なんだかんだいいながらも、闇樹は綺羅に構われることが好きだった。淡い恋心を抱く相手に子ども扱いされるのは複雑な心境だが、それでもうれしい。

「綺羅、ここにいたのか。婆様が探していたぞ」

不意にがらりと扉が開き、長身の男性が顔をのぞかせる。穏やかな黎明の瞳に、柔らかな亜麻色の髪。綺羅の幼馴染だ。

「皓貴。ごめんなさい、すぐに行くわ。またね、闇樹」

会釈で皓貴と綺羅に別れを告げ、闇樹はため息を漏らす。今夜に迫った、綺羅の相手を務める儀式を思っで。

「もしも……」

もしも、自分が綺羅の相手を務めることができたならば。他には何も望まないのに。

その夜、「婆様の屋敷」と呼ばれる長老の家で儀式が行われた。何を基準で選ばれるのかは解らない。硯の素質があると言われた皓

貴、闇樹、そして他に二人の男が横一列に並んで座った。皆一族の正装をしているが、色が違う。皓貴はその瞳と同じ柔らかな黎明の色であり、闇樹は濃い緑であつたりと様々だ。

「今から儀式を始める。既に解つているとは思うが、この儀式で綺羅の現世での夫が決まる。その身に銀歌様をお迎えし、銀歌様のお力を綺羅に移す大切な役目じゃ。覚悟を決めや」

元は綺麗な亜麻色の髪だったのだらう。とどこころにその名残は見えるが、大半は白く染まっている。しわくちやの顔に小柄な体だが、さすがに前代の巫女だけあつてその瞳は美しい銀色のままだ。

婆の声が途切れると、一段高くあがつた舞台に綺羅がやってきた。その身を正式な巫女の衣装で包み、手に足首に鈴をつけている。歩くたびにしゃりり、しゃりりと澄んだ音色が聞こえた。しかし、その美しい音色よりもなによりも、綺羅は美しかった。複雑に結い上げられた髪、ほんのりと紅をさした頬と唇。閉じた瞳が開けば、まるでそこに銀色の花が開いたようで。思わず闇樹は息を止めた。

「我が夫となるものを」

やや緊張した声音で綺羅が告げ、銀歌に捧げる神楽舞を舞う。その表情は、時を経るごとにやがて本来の彼女とは違う姿に変わる。否、姿かたちは同じだが、彼女の意味はどこか遠くへと消え、巫女としての彼女が舞う。

シャン、シャン、シャラン

軽やかに鈴の音が鳴り、白い手足がまるで蝶のように。激しく、時にたおやかに。やがて唐突に舞は終わった。そして、綺羅が跪いた相手は

「皓貴。あなたを、我が夫に^{つま}」

闇樹を含め、残りの男たちもまっすぐに二人を見つめる。そして、その視線の中皓貴は一度だけ瞬いた。

「承りました」

皓貴がうなずいた瞬間、闇樹は思わず綺羅を凝視した。その瞳に、表情に、わずかにでも喜びの色がないかと。彼女の意味で決めたの

ではないかと、探してしまった。そうすれば、この決定は覆されるのにと。巫女　穢れなき乙女ではなく、俗世に在る「綺羅」という女が決めたことと言い切れるのに。

「本日より、皓貴が巫女・綺羅の現世の夫となることをここに認める。皓貴よ。おぬしの体はおぬしのものであつておぬしのものではない。巫女も覲も銀歌様であるということを決しれ忘れるなかれ」

「はい」

やがて灯りが増やされ、綺羅と皓貴が部屋を出る。これから彼らは何をするのか知り、闇樹は絶望に落ちる。たとえ、その身に銀歌を宿しているとしても、誰も知らない綺羅を知ることができる皓貴にたとえようもないくらい憎しみが募った。

あの美しい銀の髪が、柔らかな白い体が、甘い声が。すべて、彼のものになるのかと

どこをどう歩いたのか解らないが、気づいたら村から出て森のはずれに来ていた。そこは、はるか昔から決して立ち入ってはいけない聖域。否、禁忌の地。空には銀色の望月が、銀歌に従う星が輝いているというのに、そこだけはぽっかりと闇のように暗い。

「憎らしいか？」

「誰だ」

どこからともなく、虚ろな声が聞こえた。思わず辺りを見回すが、人気はない。押し殺した声音で名を尋ねると、声はしばらくの沈黙の後に響いた。

「誰でもない。何ものでもない。我は闇。人の心に、現世の影に、常世の隅に在る闇」

「その闇が私に何のようだ」

そのとき、不思議と闇樹は怖くはなかった。常ならば、この近くに薬草を取りに来るだけでも恐怖と訳のわからない不安に襲われるというのに。もしかしたら、どこか頭の一部がおかしくなっていたのかもしれない。

「お前の憎しみが我を呼んだ。憎いか？恨めしいか？」

「……憎い。恨めしい。綺羅を手に入れることができる銀歌が恨めしい。綺羅の体を抱くことができる皓貴が憎い」

「ならば、我を受け入れよ。さすれば、お前は女を手にいれることができるだろう」

闇のささやきは強い誘惑。抗わなければいけないという気持ちと、いつそのことゆだねてしまえという気持ちで闇樹を責める。

「本当に、綺羅を……」

「我は闇。我は力。憎しみが強ければ強いほど、恨めば恨むほど我は力となる」

「私は……」

迷いは、一瞬だった。きっと、このまま二度と戻れないだろうとどこかで考える自分がいた。

けれども、それでも。力が手に入るのならば。彼女が手に入るならば。

「受け入れよう」

その瞬間から、闇樹は聖なる色を失った。

不意に、炎の揺らめきが一段と強くなる。どれくらい物思いにふけていたのか、気づけばあたりは薄暗い。そして、扉の外に人の気配。

「あいていますよ。お入りなさい」

穏やかとも呼べる声で言葉を紡ぐと、ほんの少しのためらいとともに少女が入ってきた。足元には威嚇に牙をむき出す狼の姿。

「あなたに……訪ねたいことがあります」

「何なりと、銀の姫」

悠然と椅子に腰をかけたまま、闇樹は少女の顔を見つめた。そして、そこにかつて愛した女の表情を見つけ、小さく微笑む。

「あなたは、何のためにここにいますか？何のために……一族を裏切ったのですか？」

「そうですね……あえて言うならば、私の中の一部が騒乱を求めるのですよ。闇に落ちた、私の魂の一部が、ね」

「もう……戻れないのですか？」

「戻るつもりはありませんよ。私は綺羅を必ず手に入れる。あなたの母上を……あなたの中に」

そういつて闇樹はすつと手を伸ばした。何かをつかむような仕草をすれば、その手には銀色に輝く短剣。

「夕風の血をすったこの剣で、あなたも彼女の元へ逝くがいい。その体には綺羅が入る。意識は二つもいらない」

「夕風を……」

「そう、私が夕風を殺したよ。そして……憎らしいあなたの父親もね」

優しいと思わせる笑顔でそう告げると、闇樹は音もなく立ち上がった。あまりの衝撃に動けないでいる沙綾に、体当たりをするように琳が退かせる。威嚇に大きくほえ、闇樹に飛び掛る。しかし、その爪が彼に届く寸前、まるで何かに守られるように琳が弾かれた。

「ぐう……!!」

「琳！」

床に思い切りたたきつけられ、それでも狼は立ち上がる。訝るように彼を見つめて思案すれば、琳が何か言う前に言葉が降ってきた。「私にはその牙は届かないよ。私は新月をあがめるもの。そして、新月の化身が私の中にいる。お前が主に牙を立てられないように、私にも牙を向けることはできない」

琳がうなり声を上げ、沙綾が恐怖に身をすくませる。その瞬間、あたりが白銀に染まった。そして、闇樹の前に銀歌が立ちはだかる。「ここにいたのか……我が身の一部よ」

「銀……歌」

不意に、闇樹の体がぐらりと傾き、長い髪が表情を覆い隠した。そして顔を上げたそこには、闇樹であって闇樹ではないものが姿を現した。

「久しぶりだな、銀歌」

「黒隸。何故彼に取り付いた？」

「お前が俺を切り捨てたからだろう？」

憎憎しそうに銀歌をにらみつけ、闇樹　否、黒隸は告げる。銀歌の表情に苦悩の色が浮いたことに気づき、心底うれしそうに笑った。

「俺はお前が憎らしい。お前の一部であるはずなのに、お前に要らないと切り捨てられた。あの森の中の、暗い暗い闇の中で何度お前を呪ったことか」

昼間でも日が差さない、鬱蒼とした森の中。神聖なる大木に封印され、来る日も来る日も闇を見続けた。何時しか、光を欲することをあきらめた。何度願っても、かなわぬ望みと。

「あいつがやってきたときは本当に嬉しかったね。これでお前に復讐ができる。あいつも、それを願っていたからな」

「黒隸……」

男の言葉に銀歌は悲しい表情でまぶたを閉じる。その貌が見えたわけではないだろうが、何かを察した沙綾遠慮がちにそっと銀歌の腕に触れた。

「銀歌様……泣いていらつしやるのですか？」

「沙綾……」

その仕草は、なんと彼の女性にそっくりなのだろうか。彼女もよく、落ち込む自分の腕に触れてただ静かに時を過ごしてくれた。

「泣いてはいないよ。いや……泣いているように見えるのならば、それは後悔の涙だよ」

「後悔？」

「そう。私が……私が、未熟だったのだよ」

そっと沙綾の頭を撫でると、銀歌は少女を引き離す。その様子を見ていた黒隸は、くつくつと喉を震わせ、刃を銀歌に向けた。

「お前が後悔？はっ！お前の口からそんな言葉が聞けるとはないか、女。こいつはな、欲望にまみれた汚い奴なんだよ」

「そんなこと……そんなことありません！」

「信じられないなら一つ、昔話をしてやろう」

そういつて、黒隼はどっかりと椅子に腰を下ろす。刃を銀歌に向けたまま、一瞬だけ遠くを見つめた。けれどその視線はすぐに沙綾に移り、言葉を紡ぐ。

「あれは何時のことだったかな。遠い遠い昔のことだ。俺と銀歌は、一人の人間だった」

一人の人間だった頃の名前は覚えていない。ただ、光と影のように相反する自分たちが一つの器に入っていたという事実だけを覚えている。

「俺たちには、不思議な力があつた。自分の血を与えることで病気を治したり、怪我を治したりする力だ。そう、お前が持っているの力だ」

彼ら……いや、彼はその不思議な力を使ってたくさんの村を回った。年老いた老婆の目を治し、生まれたばかりの赤子を病から救い、走れなくなった少年の足を治し　　たくさんの、数え切れないくらいの村を回った。そしてある日気づいた。

「何故私は顔も名前も知らなかった人々を治療し続けているのだろうか。何故、私は旅をして回っているのだろうか」

そして幾晩も幾晩も考えた。やがて気づいた結果は。

「自己満足だったんだよ。俺には不思議な力がある。癒しの力がある。だから治してあげよう。そうすれば、俺は認められる」

誰に？

自問自答しても答えは出ずに。また、毎晩毎晩考えた。考えて考えて　　考え抜いたある夜、声が聞こえた。

「誰のかわからない。けれど、声はこうささやいた。お前の力は人として持つべき力ではない。神の眷属となるか、力を捨てて人の身になるのか、そうたずねた。そして、こうも言った。人の身になるのであれば、今までの働きを評してお前の好きなものを与えよう。富も名声も女も、何でもくれるといった。しかし、神になれば人と

交わることはできないが、永い命と力を授けようと」

黒隸はそこで言葉を区切ると、黙ったままの銀歌にちらりと視線を向ける。その表情は苦悩に満ちていて、黒い男は満足したようににたりと笑った。

「ここで、俺たちは二つに分かれた。おれは富がほしかった。名声がほしかった。今まで散々苦労したのだから、こゝらで報われてもいいだろうと。そう考えた。しかし、こいつは違った。力を失いたくないと。この力がなければ誰も自分を見てくれないと。だから神になり、人との交わりを絶つとそういったんだ」

まっすぐに銀歌を見つめる黒い双眸が、銀色を射抜く。それに恐怖したように銀歌はうつむき、自嘲するように笑った。

「私は……怖かったのだよ。どこで生まれたのかも解らない。何故、こんな力があるのかもわからない。けれども、この力がなければ誰も自分など気にかけることはなかっただろう。もしもこの力を失って人と交わり続けたら？やがて、独りになるのではないかと。怖かったのだよ」

そういつてうなだれるその姿からは、神とは想像できない。一人の人間のようで。琳は主の切ない姿に思わず尾をたれる。そしてそつとその手に頭を摺り寄せた。

「琳……ありがとう。愛しい娘よ。笑ってくれていい。神と呼ばれていても、私は愚かで醜い生き物なのだよ」

「銀歌様……」

沙綾にかける言葉は見つからずに、ただこぶしを握り締める。唇をかみ締め、見えない光を探すように視線をさまよわせた。

「こいつは、人らしい欲望をすべて捨てた。いや、俺がすべて持つていった。富と名声と金と地位と女と……すべて欲した。そんなおれとは反対に、こいつは富みも名声も金持ち芋女も要らないといった。ただほしいのは、愛情だけだ。俺はこいつを憎んだし、こいつも俺を嫌った。嫌い、憎み、要らないと最後に切り捨てた」

自分の影を切り捨てることによって、銀歌は光となった。天空へ

と昇り、神となり人を見つめ続けた。

「自分だけ望みをかなえたんだ。もう一つの自分を切り捨ててな。

……おれは、あの薄暗い闇の中で何故と考え続けた。今まで散々人のためになることをしたんだ。この辺で楽をしたっていいじゃないか？愛情をもらったって腹が膨れるわけでもない、体が満たされるわけでもない。なのに、こいつはただ愛情がほしいと、自分を見つめる視線がほしいといった」

動けない体。見渡す限りの闇。人の声も聞こえず、ただ沈黙だけが支配する真の闇。気が狂いそうになるくらい、果てのない時間。

「闇樹は、ある意味俺を救ってくれたよ。自らの体を供し、俺の言葉に素直に耳を傾けた。だから、銀歌の力を失ったこいつに俺は俺の持つすべての知識を与えた。そして俺は、こいつの意識奥深くに眠った。俺に気づかないまま、すべて自分がしたことと思い込むように」

にやりと笑い、黒隼は立ち上がるとゆっくりと一步踏みだす。銀歌と琳は沙綾をかばうようにその背に押しやった。

一瞬の、永いにらみ合い。

不意に銀歌は悲しそうに微笑み、一度まぶたを閉じる。何かを決意したその表情に、琳が口を開く。

「我が主」

「琳。お前は沙綾を守りなさい。これは……私がけじめをつけなければいけないことだ」

「ですが！」

「大丈夫。私はいなくならないよ。私でなくなったとしても……」

琳の頭を一度撫でるとすっと片手を前に差し出す。その瞬間、光の帯が黒隼に伸び、その体をぐるりと囲った。

「何を！」

「しばらくそのまま置いてほしいからね。……沙綾」

「はい」

銀歌に呼ばれ、沙綾はその白い手をそっと握る。その瞬間、ふわ

りとぬくもりが包み込んだ。そして、耳元で聞こえるほんの少し震えた声。

「許してほしい。わたしは、愛しい娘を……お前の母を助けることができなかった。私の弱さが……悲劇を招いた。……お前に、光を返そう。せめてもの、償いに」

ぬくもりが離れ、すつとまぶたに暖かな手のひらが触れる。そして唇に冷たい感触。

「目を開けてごらん」

銀歌に促されてまぶたを開けば、目の前に端正な面立ち。母と同じ長い銀の髪に、父と同じ黎明の瞳。穏やかで優しい貌。

「銀歌様？」

「覚えておいで、沙綾。私の愛しい娘。お前の光を奪ったのは私だよ。お前の命を助けることと引き換えに、お前を私の花嫁に迎えるその日まで。けれど、私はお前を愛せない。愛しい女としてみることはできない。許しておくれ。私の心は……あの日から、綺羅にとらわれたままなのだよ」

「何故……何故、銀歌様が謝られるのですか？助けていただいたこの命、そして最後の銀の娘として、私はあなたのものです」

光が戻ったばかりの双眸に涙をいっぴいためて、沙綾は言い募る。それに困ったような顔で何か答えようとした瞬間、低い笑い声が聞こえた。

「くつくつく……。銀歌、今までの報いだな。お前はすべてがほしいといった俺を切り離してまで愛情がほしいといった。」

黒隼は狂ったように笑い続け、銀歌はきつく唇をかみ締める。何か言い返そうと言葉を捜すものの、黒隼のことばは的を得ているような気がしてならない。その迷いと逡巡に、黒い男は勝ち誇った顔で続けた。

「結局はすべてこいつに自己満足さ。誰にも必要とされないのが怖いから神になって人から必要とされたい。女がほしいけれども自分は人と交わってはいけないから間接的に人と交わる。ほしい女が手

に入らなかったから、代わりに別の女を、ほしい女の血を引いた子供を手に入れる。俺よりも身勝手に傲慢だ。どうあがいても、俺とお前は同じなんだよ」

「……そうかもしれないな」

銀歌はポツリとそうつぶやくと、動けない黒隸に近寄った。一度立ち止まり、まぶたを閉じる。そこには、かつて人の身であった自分の姿。そしてふわりと微笑んだ。

「もう一度、一つに戻ろう。私はお前を切り捨てたことで、きっとどこかが壊れてしまったのだよ。もう一度、人としてやり直そう」

「……俺を取り込んだら、俺の中の闇樹はきえるぞ？」

何かにおびえたように黒隸は銀歌をにらみつけて言い募る。けれども銀歌は微笑んだ。

「闇樹は消えない。私が、消させない」

そして腕を伸ばし、黒隸をやわらかく抱きしめた。

「お前は私。私はお前だ」

そのまま黒隸は泡がはじけるように光の粒子となり、銀歌の体が発光する。あまりのまぶしさに沙綾はまぶたを閉じ、琳はそれでも主に近づこうと足を前に出す。

「琳。お前はもう自由だよ。行くといい。お前の愛する主人の下へ」

「我が主！」

琳が叫ぶと、そこには二人の赤ん坊が残されていた。黒と銀の異なる瞳を持つ赤子と、銀色の瞳を持つ赤ん坊。どちらも無邪気に笑い、沙綾に向かって手を伸ばしている。

「銀歌様……」

そつと手に触れると、思った以上の力強さで握り返されて。その生命力の塊に自然と微笑んだ。と、そのとき静かに扉を開ける音がある。

「リコ」

「サーヤ様……お目が……？その赤ん坊は？」

「この子たちは……銀歌様と、闇樹、様です」

そして、銀の瞳を持つ赤ん坊を抱き上げ、リコに歩み寄る。

「闇樹様の生まれ変わりです」

「……きつと、銀歌様のお導きでしょう。私がこの子を育てます」

「この子は、正真正銘最後の銀の民。もう、崇めるべき神も……お隠れになりました」

その言葉に、リコは目を見張る。一度強くまぶたを閉じると、少しだけ悲しみの混じった微笑を浮かべた。

「この子に、太陽の加護があらんことを。この子の道行く先が日の光であふれんことを」

そして、無邪気に笑っているもう一人の赤子を見つめる。その視線に沙綾が気づき、そっと抱きあげた。

「銀歌様……いえ、この子はもう一度生をやり直します。孤独で寂しい思いをしたぶん、きつと幸せになります」

「もう誰も……悲しまないといいですね」

リコがそうつぶやき、沙綾がうなずく。ふと、窓の外に目を向けると柔らかな日差しが降り注ぎ始めていた。新しい日差しの中から、女性が現れた。半ば光と同化した、陽の女神。

「兄様は……決められてしまったのね。いつも私に何の相談もなく……私は、本当に兄様を愛していたのに……。残されたものの気持ちなんて考えずに、いつも自分勝手なんだから」

緑の双眸にたくさん涙のため、カーシャは無邪気な赤ん坊を見つめた。そしてずっと手を上げるときらきらとした光の粒子が人の形となる。

人の形はカーシャと同じように光と同化していたが、それでも沙綾には誰かすぐにわかった。自分と同じ銀色の髪。満月の双眸。優しい微笑み。

「……母様……？」

「沙綾……。ずっと、ずっとあなたを見ていたわ。私のかわいい子供。大きくなったわね」

「母様……私、わたし……」

ぼろぼろと涙をこぼし、その涙が赤子に降り注ぐ。赤子は不思議そうに涙を見つめ、濡れる頬に手を伸ばした。その暖かさに駆け出そうとした足が止まる。

「銀歌様の変わりに、私があなたを見守るわ。夜空を照らす月となつて。あなたの行く先に暗闇が降りないように」

「いつか……いつかまた、会える？」

「もちろんよ。皓貴と……父様と夕凧と三人で待っているわ。琳と一緒に来ることを。けれども、すぐはダメよ。あなたはたくさんたくさん幸せになるの。好きな人と結婚して、子供生んで。そして、もう何もすることがなくなったら会いにきなさい。それまで……あなたはこの地上で幸せになるのよ」

「……はい、約束、します」

涙ながらにそれでも微笑めば、母は満足そうに笑った。ゆっくりと歩み寄り、日差しのような暖かさで沙綾を包み込む。

「沙綾。私のかわいい子供。あなたが微笑んでいるなら、私も笑えるわ。あなたが悲しくて涙を流したくなったら、月を見なさい。私はいつでもあなたのそばにいるわ。……沙綾。永遠にあなたを愛している」

そう告げると、愛しい娘にそつと口づけた。その瞬間、光が溶けるように消える。ただ、母親のぬくもりだけを残して。

「母様……。……カーシャ様、ありがとうございます」

「兄様の愛した、兄様と同じ血を持つ子。あなたに、光の祝福を。

兄様はもう……。私のことを覚えていないだろうけれど……。兄様をお願いします。私では……。ダメだから」

「カーシャ様……。きつと、銀歌様はカーシャ様のことを忘れてはいません。人の身になられても、赤子になっても……。きつと、銀歌様のお心にはカーシャ様のことが残っています」

「……そうね。……ありがとう、沙綾」

ふわりと哀しい微笑を残すと、カーシャも光が溶けるように消える。その名残を見送ってから、沙綾はリコに微笑んだ。

「行きましょう」
帰るべき場所へ。
待つ人の下へ。

終章

9 終章

森の中で、沙綾と琳は二人仲良く薬草を摘んでいた。そしてその隣にはどんな魔法か、二年で五つほどの年頃に見える少年。白金色だった髪は、二年でところどころに金が混じる不思議な髪色になった。そしてその瞳は黒と銀。ニコニコとおとなしく沙綾の姿を見つめている。

「麗銀、もう少し待っててね」

「うん、大丈夫。ちゃんといいい子で待つてるよ」

沙綾を見つめるその異色の双眸は愛情に満ち溢れていて。黒隸の悲しみも、銀歌の哀しみも残っていない。そのことが嬉しくて、ふわりと微笑んだ。

ふっと空を見上げれば、夏の名残はそろそろ消えかけている。澄み切った高い青空にふと、幼い少年の瞳を思い出した。

風の便りにルークが王位を継いだことを聞いた。アッシュは病に亡くなり、空の瞳を持つシドも、ルークが王位を継いだことをきっかけに立派な国王補佐となったらしい。リコは巫女の職を辞し、闇樹 安寿を育てている。

「またレオン兄ちゃんこないかな？」

「そうね。安寿も一緒に来るといいわね」

時折ふらりとやってくるレオンらに、麗銀はよくなついていた。遊び半分に剣の稽古をしてもらったり、フィージからいろいろな話を聞いたりとせわしない。けれどどれも楽しいのか、普通の子供と変わらずに目を輝かせて話を聞いていた。

空には太陽と月が輝いている。真白い昼間の月は、輝くこともせずただ見守り続けている。けれど、それで十分だった。琳がいて、麗銀がいて、空には父も母も夕凧もいて。

「私は今、とても幸せです」
小さく呟かれた言葉に、真白い月が淡く輝いたような気がした。

終章（後書き）

以前、某投稿サイトで投稿した作品です。「事件」のあたりに少々加筆してあります。

まずは、長編を完読していただきましてありがとうございます！個人的に、終わりのあたり……「過去」→「終章」をもっとうまく加筆修正したいのですが、どこをどういじったらいいのか検討が付きません……。ふがない作者です。どうぞ、辛口批評でも結構ですので皆様のコメントを心よりお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7033g/>

銀の薬師

2010年10月8日13時09分発行